

タイムリープしたら10年前の世界だった件

ボノボン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

202X年〇月△日世界は第三次世界大戦の真っ最中だった。

全ての原因は千魔というある怪物のせいです。

日本政府は戦力として戦車道を行っている女性に出兵命令を発令した。

本作の主人公青田千次郎の恋人栗田仁美の所にも。

しかし出兵前日仁美は千魔によって殺されてしまう。

恋人を殺された憎しみで千次郎は千魔に戦いを挑むが返り討ちに遭い、

拳げ匂に千魔の血を自身の体に植え付けられてしまう。

瀕死直前の千次郎に雷が落ち、千次郎は雷に包まれたままどこかへと

連れ去れてしまい、次に目を覚ました場所は何と10年前の世界だった。

馬鹿でおちよつこちよいだけど優しい青年青田千次郎と

仲間達が繰り広げるバトルストーリー……!

(注 この作品はガルパンやドラゴンボール、BLEACH、シャーマンキング、

HUNTER×HUNTERなどの要素が入ってくるのでよく理解してお読みください。)

# 目次

## 序章

プロローグ

1

登場人物（主人公、界王様、西住みほ）

4

ここはどこ？分からず主人公と界王との出会い

7

少女の苦しみと迫る危機！

12

目覚めた力！！

20

界王星に向かえ！新たなる決意と西住みほの決意！

27

宇宙一の狂戦士サイヤ人登場！！

33

やめて下さいー！桃と千次郎と鬼六と

44

蛇の道終点くくく！界王との再会！千次郎の涙の申し入れ！

51

逃げるバブルス君と、頑張る死人青田千次郎！

56

第二の修行開始！とサイヤ人の歴史！

65

ついに奴らがやって来た・・・！！

73

サイヤ人襲来編！！

STAGE 1 サイヤ人大洗に来たる！！

88

STAGE 2 仲間《友》は助ける！あんこうチームの決意と多

田修平の後悔その1

94

STAGE 3 え!?あんたが神様!?千次郎、暁に散る!!

101

STAGE 4 それぞれの目的と行動

111

STAGE 5 到着大洗！気絶から目覚めた戦士青田千次郎の

静かな激しい怒り!!

122

STAGE 6 千次郎の謝罪と成長！

143

STAGE 7 ナツパ手も足も出さず!!

151

STAGE 8	界王拳の謎	156
STAGE 9	動き始めた帝王・・・!	162
STAGE 10	一騎打ち!!千次郎VS慎也!!!!	172
STAGE 11	天下分け目の超決戦!!	180
STAGE 12	3倍界王拳の力!!!!	185
STAGE 13	激突!!ギャリツク砲vsかめはめ波!!!!	193
STAGE 14	慎也の形態変化!!!	197
STAGE 15	元気玉!!!	208
STAGE 16	元気玉・・・失敗!?	216
STAGE 17	必殺!!気円斬!!!	223
STAGE 18	覚醒!!	230
STAGE 19	邪悪な力	237
STAGE 20	喰らえ!!アベック元気玉!!!	244

## 序章

### プロローグ

2021年○月△日

「君は弱い」

「くそつたれ・・・」バタツ

ここは東京が、日本が、この世の全てが崩壊した世界である。

「どうして僕なんか立ち向かおうとするのかなあー?」

ある男は倒れている青年に話しかけた。

「どうしてってお前を倒すためだからだ」ハア ハア

青年はいかにも苦しいそうにそう伝えた。

「へえー僕を倒すかあ・・・久しく聞いたよ」

男は青年の前に立ちニヤついていた。

「ま、僕に殺されるだけでも少しは贅沢だと思いな」

そう言うと男は体から触手を出して、

「遺言はなんだい?」

男は青年に触手を向けた。

「なぜ・・・なぜ俺の仁美さんに手を出した!」ギロツ

青年は唇を噛み締めて男を睨むつけた。

「なぜって彼女は僕の秘密を知ってしまったからだよ」

男がそう呟いた瞬間

グサツ

「ああああああああ!!」

青年は悲鳴を上げながら周りをのたうち回った。

「ふふいいねー♪その断末魔!!?」

男はさらにニヤつきを出しもう一回刺した。

グサツ

「ああ・・・あうう・・・ああ」

青年はもう悲鳴すらも上げれずにのたうち回った。

「もうこれぐらいでいいか。もう死んだし」

男は触手を戻しこの場を去ろうとした瞬間  
ガブツ

「ぜってえー逃さねえよ」

青年は男の足に噛み付いていたのだ。

「へえータフなんだね君」

男は笑いながら青年の顎をクイツと持ち上げ

「僕、気に入ったよ君のこと」

そして青年の額に思い切り人差し指を差し込んだ。

ブスツ

「グアアアアアア!!体体がー！ー！！」

青年の体が突如に紫に染まっていくのだった。

「僕の血を君に注入したんだよ。ふふどうだい？段々細胞が壊死して  
いくのは」

男は笑いながら青年の額に血を注入していくのだ。ドピュ、ドピュ  
とそして男は少し経つと人差し指を抜いた。

「少しの間だったけど楽しかったよ今度会う時は天国でsee you  
u」

そう別れの言葉を伝えると男はフツと消えていった。

「ああああえああああ」

青年の容体はあまりにも酷かった。額はおろか、細胞が3分の1も  
壊死していたのだ。

「死んで、たまるかってんだ。ぜってえー」

青年は事切れ寸前だった。

「俺は…仁美《ひとみ》を…救うまで死ねるか…よ」  
もう死ぬ誰もが思ったその時だった。

ピカーーーン

突如とても大きな雷が落ちたのだ。

「何…だあの雷…は…」

「まるで龍…見たいだ」

そしてその雷は青年へと近づいてきて

ギャオーン

咆哮し青年を口の中へ入れて

ギャオーン

再び咆哮し青年を口の中へ入れたまま時空へと飛び立って行った。

青年は口の中にいる時こう囁かれていた。

(小僧！貴様はまだ死んではいかん貴様がこの邪悪な未来を変えるのだ。)

(誰・・・ですか？あな・・・たは？)

(名乗れる程名が通った者ではない。)

(さあ着いたぞ早く目を覚ますのだ。)

ピカーン

眩い光に包まれて目蓋を開けるとそこは10年前の世界だった。

## 登場人物（主人公、界王様、西住みほ）

タイムリープしたら10年前の世界だった。 設定情報集その1

主人公・バトルタイプ・必殺技集

主人公

青田 千次郎（あおだ・せんじろう）（27）↓（17）

優しくて、普段は温厚な性格だが大切な者を傷つけられた時は人一倍怒りを露わにする。

運動と勉強はダメダメ。顔は普通で髪型が黒色の短髪で

身長は175cm、体重は62kgの中肉中背男子。

弟が一人いて弟は養子として家を出ているため、滅多に会っていない。

10年前の自分は当時不良であり、髪がブラウンであだ名は「一匹狼の青田」。

未来ではフリーターで、大学の時に栗田仁美と出会い、恋人関係だったが千魔に殺されてしまう。

また千魔に血を与えられたため超人的な力を使うことができる。死ぬ寸前の所を界王様に助けて

もらう。趣味は絵画と喧嘩。高校3年生で陸の学校では通信制として通っている。

### バトルタイプ

ドラゴンボール全般でサブとしてハンターハンターの能力を持っている。

### 必殺技

かめはめ波（ドラゴンボール）

体内の潜在エネルギーを凝縮させて一気に放出させる技。千次郎の得意技である。

界王拳



千次郎が界王様から「元気玉」とともに教わった奥義の一つ。体中の気をコントロールすることで戦闘力を数倍高められる技だが、体に負担がかかるという欠点がある。

元気玉

界王様が究極の奥義として千次郎に伝授した技で、人々や動物、植物から太陽・大気まで、

あらゆるもののエネルギーを集めて放つエネルギー弾。

ジャジャン拳（ハンターハンター）

ジャンケンでヒントを得て開発した技。千次郎の場合グーしか使えない。

神速《カムムル》

気を電気に変化させ身体の末梢神経に流し込むことで超人的な反動行動を可能にする。

さらに相手の反撃を封じ込めながら戦うことが可能。

しかしこの技は大量の電気を必要とするためすぐに電池切れとなってしまう。

この技を使っている間は髪が稲妻のように逆立っている。

疾風迅雷

プログラムしておいた動きを自動反応で繰り出す【神速（カムムル）】の派生技。

電光石火

自分の意志で肉体を操作するタイプの【神速（カムムル）】。

電気の負荷をかけてより高速での動作を可能にする。

落雷（ナルカミ）

電気に変えた自身の気を雷のように相手に落とす。

登場人物（界王様とガルパン（西住みほ））

界王様

瀕死状態の千次郎を龍を使って助けてくれた千次郎にとって命の恩人。

体色は薄い青色で太目の体型をしている。また、コオロギやゴキブリのように

長い触角状のものがついた黒い帽子と丸いサングラスを着用している。

ギャグ（特にダジャレ。千次郎曰く「ギャグとダジャレが無ければ憧れる存在」）が好きで

趣味はドライブ。また北の宇宙を担当する界王である。はるか銀河の彼方の様子を見たり、

自身を介して全宇宙に声を伝えることができる能力を持っている。地球の重力の10倍である

界王星で猿のバブルスくとバッタのようなグレゴリーと3人暮らしである。

西住みほ（16）

戦車道の名家、西住家の次女として生まれた少女。

性格は引っ込み思案でいつもオドオドしているがいざ戦車道となれば、幼少期に教え込まれた

戦車乗りとしての戦術や技術を駆使して姉である西住まほの腹心として日々精進していたが、

第62回戦車道全国高校生大会で川に転落した味方車両の乗員を助けるために戦車を飛び出して

救出に行っている間に敵にフラッグ車を撃破され、黒森峰は10連覇を逃した。その行為を

母の西住しほや味方に厳しく叱責され心に深い傷を負っている。しかしある人の助言により

心の傷が治り大洗女子学園に転校する。

ここはどこ？分かんず主人公と界王との出会い

(さあ着いたぞ小僧！早く目を覚ますのだ。)

千次郎は何者かに起こされ目蓋を開くと信じられない物を見た。

賑やかな商店街、人混みが多いスクランブル交差点、そして子供の笑い声。

千次郎は真っ先に自分の目を疑った。なぜなら自分が見ているのは故郷の熊本市だからである。

千次郎は何のことかさっぱり分からず周りをキョロキョロしていた。

「俺は確か千魔にやられて・・・」

「わしが助けたのだ」

「え？」

千次郎は、そーと後ろを見た。そこにはゴキブリのように触覚状のものがついた黒い帽子と

丸いサングラス身に纏っていて体色が薄い青色で太目の体型をしていて道着の中央に

「界王」と書かれて立っていたまあ変な人が自分の後ろにちよこんと立っていた。

「あなたは？」

「わしは貴様を助けた北の界王という者だ：ってまずは自分から名乗る方だろう！」

「あ！俺は青田千次郎ですって界王様！あのドラゴンボールの？」

「そうだがそれがどうした？」

千次郎はびっくりした。ドラゴンボールに登場する界王が今自分の目の前にいるからだ。

「全く近頃の人間はわしのことを全く知らんなあ・・・ま！そんなことより青田千次郎お前に

言っておかなければならない言葉がある」

「もしかしてタイムリープしていることですか？」

千次郎はもしやと思いきそのことを聞いた。すると、

「何だお前も分かっていたのかそうだお前さんは今から10年前にタイムリープしたのだ」

「そうなのかってええー……!!!」

あまりにも自分が返した言葉が本当だったので千次郎はびっくりしてしまった。

「そんなびっくりしなくていいだろ！まあびっくりするかもしれないが」

「どっちだよー！」

千次郎はつい界王の言動につっこんでしまった。

「嘘だろ・・・何で俺が10年前にタイムリープしてるんだよ」

「こんなの嘘だ！絶対！」

そう言いながら千次郎は自分のほつぺたを抓っていた。そしたらほつぺたに痛みが襲った。

そしてようやく理解した自分はタイムリープしたのだと。

「嘘だろ・・・マジでタイムリープしてる」

「俺はこれからどうしたらいいんだよ」

千次郎は掌で顔を隠して俯いてしまった。まあ誰だって急にタイムリープしたなど言われたら

絶対びっくりするに違いない。それなのに界王は突然タイムリープしたと言ったので

頭がぐちゃぐちゃだった。

「それで俺はこの世界でどうすればいいんだよ」

気が付けば自分は涙を流していた。

「そのこと何だがよく話を聞いてくれ千次郎！」

「何だよ話ってのは？」

「実はこの世界でも既に千魔という奴によって支配されている」

「え？でも千魔は今から10年後じゃないのか」

「わしもそうだと思っていたのだから何とこの世界でもう始まっていたのだ」

「それで俺とどう関係あるんだ？」

「そこでだ青田千次郎！お前にこの世界を守ってくれないか？」

「え？」

「お前しか居ないのだからねならお前はあの千魔の力を・・・千次郎？」

「はあはあはあ」

千次郎は界王の発言に耳を疑った。自分がこの世界を守れたと・・・この10年前の世界を！

何にも出来ない自分にこの世界を守れ・・・と。

「いい加減にしやがれ！」

次の瞬間千次郎は界王の胸ぐらを掴んでいた。

「あなたの自分勝手に程があるぜ！何で俺がこの世界を守らなければならないんだ！」

「・・・」

界王は黙って千次郎を見ていた。

「何だよ！その目は！まるで俺の事を馬鹿にしてるような目はよ！」

「もういい！あなたといるとおかしくなりそうだ！」

「じゃあな！二度と俺の目の前に現れないでくれ！」

そう言うのと千次郎は界王から手を離し、どこかへ走り去って行った。

界王はゆっくりと立ち上がり千次郎を見つめて

「千次郎今はそうやって言える。でもいつか必ず思う時が来る。自分が世界を守らないと

思う時が」

と呟いた。

「くそつくそつ」バン バン

一方千次郎は、界王の事でかなりの力で柵を蹴っていた。

「何だよ！何で俺に世界を守ってくれだよ！ふざけんな」バン バン

界王の件でかなり怒りを出し柵を蹴っていた。しかしやはり長時間蹴り続けると息を切らした。

「はあはあはあはあ少し休もう」

そう言うのと柵にもたれ少し休んだ。するとどこから話し声が聞こえてきた。

「ねえいいじゃん少しお茶するだけでも。ね！」

「い、いえ・・・私、そういうの・・・け、結構です」

「そんなこと言わずにさ。ちよっとだけでもいいじゃん」

なにやら若い男2人が1人の栗毛色のボブカットの少女にナンパをしている最中だった。

少女は嫌がっているのにも関わらず男達はしつこくナンパを続けている。

「ウザえな他所でやれよ他所で」

千次郎はそのナンパしている所を上から見ていた。普段はナンパなどに興味がないのに。

「あーマジウザえなああの2人殴りてえ」

しかし今の千次郎は界王の件によりかなり怒りが頂点に立っていた。

でも、

「だからいいデートスポットもあるしさ」

「っ!?触らないで下さい!」

男達はやめようとせずまだ続けていた。

千次郎は怒りを鎮めようとどこか別の場所に行こうとしたその瞬間だった。

パシンッ

すぐに後ろを向くと少女がグツタリと倒れていた。何と男達が少女に手を出したのだ。

「ちつすぐに言う事を聞いてれば良いのになあ」

「それマジな」

男達は少女に手を出したことに何も抵抗が無かった。

まるで手を出したことが当たり前のようだった。

「ううう・・・痛い・・・痛いよ」

少女は男達の容赦ない平手打ちで涙を流していた。

「あいつら・・・女に手を出しやがった」

千次郎は男達に怒りをさらに覚えた。

「もう我慢出来ねえあいつらぶっ殺してやる」

その瞬間柵を跨いで男達に近づいていった。  
そして・・・

「何やってんだお前ら！」

怒鳴り声を上げて男達を呼びかけた。

## 少女の苦しみと迫る危機！

「何やってんだお前ら」

千次郎は男達に大きな怒鳴り声を上げて近づいた。

「なにお前？来たよ来たよ正義のヒーロー的な奴」

「おいお前死にたくなかったら早くどっか行きな」

男達は笑いながら千次郎に近づいてきた。

「おいお前ら今すぐこの娘に土下座して消えろ死にたくなかったら」

「なにこの馬鹿俺らが誰か知らないの」

「俺達ここらで『オルトロス』って言われてんだぜ」

男達は自分達のあだ名を名乗った次の瞬間、

「お前みたいな馬鹿は死ね」ドゴツ

「ガツ」

「ついでにこれもくらえ！」ゲシツ

「ブツ」

右のボディーと腹に膝蹴りを食らった千次郎はそのまま立ちすくんでしまう。

「なにこいつ口程にも何ねえじゃん」

「所詮口だけだな」

「ううう・・・」ポロ ポロ

「なにこいつもしかして泣いてんの」

「もつとして欲しんじゃね？」

男達はそう言うのと倒れてる千次郎に蹴りとボディーをまた入れてきた。

ドゴツ！ ゲシツ！

「フガアア！」

千次郎はさらに蹴りとボディーを食らったため口から血を出していた。

「さらにもう一発だ！」

「死ね！」

男達がもう一発千次郎に向けて放とうとしたその時だった。



「やめて!!!!」

少女が千次郎と男達の間を割って入ったのだ。

「なにお前も死にたいの?」

「どかねえならタダじゃおかねえぞ!」

1人の男が少女に脅迫したが少女は怯まなかった。

「もうやめてください! 私付き合いますからもうやめてください!」

少女は必死に千次郎を守っている所を見て千次郎は情け無い気持ちでいっぱいだった。

(くそ! 助けようと思ったなら逆に助けられてしまったぜ)

そう考えていた時だった。

「もう遅いんだよこのアマー!」パシンツ

「きやあ!!!」ドサツ

少女は男の平手打ちを食らって倒れた。

「ははははは! 最初から大人しくしてたら良かったのになあははははは!」

男の笑い声はまさに狂人だった。しかしその笑い声も次の瞬間で止まった。

「グギヤアア!」ドサツ

男が何者かによつて気絶したのだ。

「はあ! 何倒れてんだよ! 起きろよ!」

もう1人の男が倒れているのを起こすがグツタリと気を失っていた。

「おい・・・お前」

「てめえはもしかしてお前が・・・」

「よくも女に手を出しやがって・・・」

千次郎は男にゆっくりと近づく。

「ま・・・待て! 話し合えば分かる!」

「そう・・・でも俺は話し合っても分かんねえよ!」

ゆっくりと構えて・・・

「一回死んでこい!」バキツ!

「フゲエエ」ドサツ

千次郎のパンチをまともに食らった男は10mぐらいぶっ飛んだ後動かなくなつた。

「大丈夫ですか?」

千次郎は倒れている少女に話しかけた。

「あ……はい、大丈夫です。」

少女は千次郎を見て顔を赤くしていた。

どこかおかしいのかなあと体を触るとすぐに分かつた。

ズボンのチャックが空いていたのだ。

「うわあ!ごめんすぐ閉めるから」

そう言つてズボンのチャックを閉めた。

「ごめんごめんチャック開けていて」

「いや大丈夫です」

少女と軽く話していると千次郎は気になる事があつた。

「でも何で君みたいに可愛い子が1人で帰っているんだい?」

そう質問すると少女の顔が暗くなつた。

「実は私……大変な事をしてしまつたんです」

「大変な事?」

「実は私……黒森峰で戦車道をしているんですけど10連覇を逃してしまつたんです」

「ええ黒森峰つてあの9連覇していたあの?」

「はい……」

「もしかして貴方は西住みほさんですか?」

そう質問すると少女は一瞬びっくりしてまた暗くなつた。

「はい……私は西住みほです」

「ええ……!」

千次郎はとても驚いた。なぜならみほは千次郎の世界では世界の中で5本指に入る実力を持つ

トップアスリートだったからだ。

「そんなに驚きますか?」

みほは千次郎の対応に少しきよとんとしていた。

「いやごめん少しびっくりしちやつてそれで?」

千次郎は謝って事情を聞いた。

「それで私決勝戦で味方の戦車が川に落ちちやってそしたら私はフラッグ車を捨てたんで敵戦車に

狙われてそれで10連覇を逃したんです。私のせいで・・・私の自分勝手のせいで」

みほは話しているうちに涙を流していた。

「その日からずっと皆に手のひらを返されたように見られました。

私はただ人を助けただけなのに」

「やっぱり私間違っていたのかなあ・・・自分が助けにいかなかったら『それは間違っていないですよ。』」

「え?」

千次郎はみほの顔を見て、

「みほさん! 貴女がやったことは素晴らしいことなんです。だから自分が悪いとか

思わないでください。いつか絶対分かってくれる人をいます。その時まで今は耐えてください。

今は」

千次郎は笑ってみほを見つめた。すると、

「……………う……………うええ……………」

みほは泣いていた。

「ええいや何で泣いてんのまるで俺が流したみたいじゃないか!」

あの決勝戦の後、みほのことを誰もが責めた。特に戦車道の隊員たち、それを支援し推してきた学園、その生徒やOG。みほを庇う者は誰もいなかった。そして皆は絶対このようなことを言った。

「ーあなたのせいでウチが負けた。

「ーフラッグ車を捨てるなんて、考えられない。

「ー副隊長なのに、逃げるなんて信じられない。

みほの行動も、その考え方も、試合そのものも。その全てを否定されたのだ。

誰も認めてくれない、自分の戦車道。西住流に身を置きながらも、静かに己の中に隠していた

自分だけの戦車道。それを真正面から屈服させられ、貶められてきたみほにとつて、千次郎の言った言葉は予想外だった。あの時、勝利よりも仲間を優先した行動は、みほ自身もまだ自覚していない自分だけの戦車道の行動だった。その行動の結果は敗北だった。そしてそれは間違っているのだと誰もが責めた。けれど、認めてくれる人も確かにいたのだ。自分の信じた道を進んだあの試合を、素晴らしいと言ってくれる人が。自分の戦車道は、間違っていないのかもしれない。なぜならあの決勝戦の行動を素晴らしいと言ってくれる人がいたのだからだ。その思いが爆発して、

胸にこみ上げるものが視界を瞬時に歪ませた。

「じゃ、じゃあ俺は帰るので、ではさ、さようなら！」

千次郎はそう伝えた瞬間一目散に走った。

「ああ待ってください」

みほは呼び止めようとしたが千次郎はそのまま行ってしまった。

みほの心の中は複雑な気持ちだった。「あなたがやったことは素晴らしいことです」この言葉が

しきりに自分の頭の中に響いていた。

(私のことを認めてくれた人がいた。私は間違っただんかいないなかったんだ！)

そう思うとみほは何かを決心した。

「はあはあ何であんなこと言ったんだろう」

一方千次郎はあのまま走って再びあの商店街へと戻っていた。

「結局ここに戻ってしまったか・・・」

そう思うとため息をつく千次郎。辺はすっかり夕方で明かりがつき始めた。

「あいつは・・・いないなあ」

界王はもうここにはいなかった。

「まああいつがいても絶対戻らないけどなはっはっは！」

ゲラゲラ笑っていたその時だった。

ヒューーン

夕方の空に何かが降り注いでいた。まるで隕石のようだった。

「あれ？何だ？隕石なんて初めて見たぜ」

そして隕石はそのまま熊本市内に落ちて衝撃波が起きた。商店街の人々はいきなりの隕石落下に

ざわついていた。

「何だ隕石だ！」

「何あれヤバくない？」

「お母さん何あれ？」

「近いぞ！落ちた所」

そして隕石が落ちた場所には煙が上がっていた。

「何だ火事が起きたのか？」

「何か怖くないか？」

「何ビビってんだよただの煙ごとき」

「近くに見に行こうぜ！」

「待てよ俺も行く！」

人々が隕石のことで騒がしい中1人だけ警戒している者がいた。

（何だろうこの胸騒ぎ？何にもいないのに誰かに見られているようだ。）

千次郎以外は隕石のことで夢中でスマホで写真を撮ったりSNSにあげている人ばかりだった。

このままではまずいすぐにここから逃げようと身構えた時だった。

「うわあ何だ！煙の中から人が出てきたぞ！」

誰かが大きな声で叫んでいた。

目をそこに向けると確かに人がいた。髪が長く何かよくわからぬい服装をしていた。

「大丈夫ですか？すぐに救急車を呼びますから！」

叫んだ人はスマホを取り出して電話をかけようとしたその時だった。

「戦闘力たったの5か・・・ゴミめ」フーン！

「え？」

叫んだ人がびつくりした瞬間、叫んだ人から赤いものが吹き出した。

「ぎやあああああ」

「ふん脆すぎるな」

叫んだ人はそこらをのたうち回った後事切れた。

それを見ていた市民は一気にパニックに陥った。

「きやあああ」

「何あれ？殺されるー！」

「うわあああどけどけ邪魔だ」

「こっちに来る逃げる逃げる!!」

パニックに陥った人々はすぐさま一目散に謎の人から逃げていた。

「逃げなくていいものおこれから全員死ぬというのに」

怪人はそう言うとき空中に浮き近くのビルや商店街を気弾で撃ち壊し始めた。

「グワアああ」

「死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ！」

「やばい殺されるー！」

人々はその気弾に巻き込まれて吹き飛んだ。

「なんて奴だ。ここから離れないと」

千次郎は壊された商店街からその一部始終を見て逃げようとしていた。しかし、

「助けてくれ！誰かー！」

「!!」

1人の男が怪人捕まって殺されそうになっていた。

「安心しろすぐに楽にしてやるからなあハッハッハ！」

「ひいー」

これを見ていた千次郎は止まってしまった。

（くそっ！何で捕まってんだよ！やばい早く逃げないと！くそっ何で足が動かないんだ！

どうしよう俺が行かなきゃ死んじゃう！くそっ逃げちゃダメだ。

逃げちやダメだ。

逃げちやダメだ。逃げちやダメだ。逃げちやダメだ。くそっ！  
そう思いながら怪人に向かって、

「今すぐその人から手を離せ！このクズ野郎！」

怪人の目の前に立ってそう言っていた。

目覚めた力!!

「今すぐその人から手を離せ!このクズ野郎!」

千次郎は怪人に向かってこう叫んで目の前に立った。

「うん?何だ逃げ遅れたのにも関わらず死にに來た馬鹿が來たか」

怪人はあざ笑いながら千次郎を見つめていた。

「お前は一体何者何だ?」

「まあ冥土の土産として教えてやろう俺の名はラディッツ!惑星ベジータからやって來た者だ!」

怪人は・・・ラディッツは千次郎に名を名乗った瞬間、  
バキッ

鋭いパンチを千次郎に向けて飛ばした。

「ぐわあ!」 ドサッ

あまりにも強すぎるパンチに思わず意識が朦朧した。

「やはりこの星の住んでいる奴らは皆脆すぎるな」

「うわあああああ」

「次はお前の番だ」

「うわあやめて下さいやめて下さい」

「ふん命乞いするのなら精々あの世で頼め」ビュン

ラディッツはそう言うと言に氣弾をぶつけた。

すると男は肉体もろとも砕け散った。

「さて次はお前の番だ小僧」

ラディッツは倒れている千次郎に向けて氣弾を飛ばそうとしていた。

「くそ・・・ここで死ぬのは・・・嫌だ」

「短い人生だったな・・・今ここで終止符を打ってやる」キュイーン

「じゃあな哀れな子供《ガキ》よ」ビューン

ラディッツは千次郎に向けて氣弾を撃った。

「マジかよ・・・死にたくない死にたくない絶対・・・死んでたまるか  
!」

そして、



ドカーン

激しい爆発音と共に千次郎は消えてしまった。

「ふんもう少し面白みのある子供《ガキ》かと思ったが飛んだ思い違いだ」

ラディッツは舞空術でどこかへ飛び立とうとした瞬間だった。

「待てよ・・・クス野郎・・・」

「!!」

ラディッツは驚いた。なぜならそこにいるのは死んだはずの千次郎がいたからである。



「よくもさつきの人を・・・殺しやがって・・・」

「絶対に・・・許さない!」

「な・・・なんだと!」

「戦闘力が1・・・1307!」

「あ・・・ありえん・・・」

ラディッツが口を開いた瞬間、

ドンツ

「ガハツツ」

ラディッツに対して鋭いパンチがみぞおちに入った。さらに、

バキツ

「グワアアア」

鋭い蹴りがラディッツの腹にもう一回入った。

「馬鹿な・・・なぜ生きている・・・あれを喰らっていたのに・・・無傷だなんて」

「違うよ」

「っ!?!」

「確かに攻撃を喰らったけど何故か体が・・・再生していた」

「なんだとー！」

そう言うと千次郎は自分の腕を切った。すると、ギョルギョル

何と腕がくつついたのだ。腕を切ったはずなのに……。

「なんだと……化け物なのか」

ラディッツはあまりの驚きに顔が隠せなかった。

「ああ具体的に言えばある化け物から血をもらったと言えればいいかなあ」

「化け物から血をもらっただと……だつたらなぜ最初から使わなかった？」

「知らねえよ急にこの力を使えるようになったんだよ」

「あともうお前と話したくないから……死んで」キュイーン

千次郎は手のひらから気を集め気弾を作ろうとしていた。

「ま……待て！小僧！もう地球に攻撃なんてしないから許してくれ！頼むー！」

「やだねお前の言うことなんて信じられないし、後お前嘘ついてるし」  
そう言うと千次郎はさらに近づく。

「ちっ！バレたか！まあいい例えそんな力が使えても扱えなければただのゴミだー！」

そう言うとラディッツは両手に気を集めていき、

「これでも喰らうがいい《ダブルサンデー》!!」バキューン

ラディッツの両手から凄まじい光線が千次郎に向けて飛び出した。

「フハハハハ!!この光線を喰らって生きた者はいない例え急激に気を高めたお前でも

この光線には手も足も出まい」

「!!」

「どうした小僧！さっきまでの威勢はどうした早く見せてみる！」

「くっ！ちくしよー」

千次郎は考えていた。どうあの光線を弾き返そうかと考えていた。

「あっ!?!」

突然千次郎の頭にスパークが走った。そして手のひらの気を潰し

て、

「最初はグー！」

「っ!!」

突如、手の気が大きくなり、

「ジャン!!ケン!!」

「なんだ？あの大きな気は！」

そして段々大きくなり、

「グー!!!」バンツ！

「!!」

光線に向けてパンチした。すると、

「なに光線を跳ね返しただと」

何と光線が跳ね返ってラディッツの方に飛んでいったのだ。ラディッツは突然戻ってきた光線に

呆気にとられていた。しかしラディッツは諦めず、跳ね返そうとするも、

「くっ！くそっ何で戻らない！」

あまりにも強すぎるパンチなため反動力が強く、戻れなかった

「無駄だお前はそのまま跳ね返せず、死ぬんだよ」

「うるせい！黙ってる！」

「くっ！この俺がここで死ぬのか・・・こんな地球人の子供《ガキ》なんかに」

ラディッツは反動力が効いた《ダブルサンデー》に持ち堪えられず、

「うっ、うそだ・・・嘘だー!!」

そのまま自分の胸に貫通した。

(馬鹿な・・・負けてしまうとはなんて・・・情け無い)

貫通した直後、自分の負けに無念を感じるラディッツだった。

一方千次郎は、自分が考えた作戦が成功したことにとっても驚いていた。

「ふうー助かった。まさか本当に成功してしまうなんてなあ」

そして手を見つめて、

「ハンターハンターのジャジャン拳をぶっつけただけなのにこれほどの威力だなんて恐ろしい」

改めて自分の秘めている力に恐怖を感じた。

「凶に乗るなよ小僧……」

「っ!!」

千次郎はラディッツを見て睨みつけた。

「俺とすることがまさか子供《ガキ》なんかにやられるとはなあ」

「まあ俺を倒した冥土の土産に良い事を教えてやろう」

「良い事?」

「今俺が付いているスカウターは俺の知り合いに通信している……」

「つまり、この地球に知り合いが人類を殲滅しようとしてくる……」

「後1年後になあ!」

「何だと!!」

「それに俺の知り合いは俺よりさらに戦闘力が高い!その日まで精々待つておくんだなあ」

「じゃあな……化け物小僧よ……」

そう千次郎に伝えるとラディッツは息を引き取った。

「後1年後か……時間がないなあその日まで強くないとっ!」バ  
タツ

突然力が抜けて倒れた千次郎。そしてさらに、

「ガハッ」ピチャピチャ

何と血を吐いていた。よく見ると腹に血がべつとりと付いていた。

「マジかよ……まさかここで死ぬんじゃないだろうなあ」

段々体に力が入っていなくなる自分に恐怖を覚えていく。

「俺が……俺がこの世界を守らなきゃ行けないのに……ここで死ぬ  
なんて……」

そして、目の周りが霞んでいき、

「どう……や……ら、本当……見た……い……だ」

死を認め、事切れを待つことにしたその時だった。

ギャオーン

何とまたあの龍が再び現れたのだ。そして千次郎に近づいてきた。「また・・・か・・・今度は本当に・・・天国なん・・・だろ・・・う・・・な」

ギャオーン

目を瞑り、龍に連れて行かれながらゆっくりと眠った。

■  
ここはとある星である。

この星は、とても静かだった。まるでそこに住んでいる者がいないようだった。

「ラディッツと通信が切れた。死んだか・・・」

「ちつ、あの弱虫ラディッツが死ぬなんて・・・なあ『慎也』」

「うるさい・・・食事中に俺に話しかけるな」

2人の男が死体に座つて火を焚き、死体をムシヤムシヤ頬張つていた。

1人の男は体がスリムで、もう1人の男はその男よりさらに大きかった。

「地球かあ・・・面白そうな星だなあ」

「ああラディッツを倒すぐらいなら少しは手応えがありそうだ」

「まあ俺らには敵わないがなあ」

「さて、そうと決まれば地球へ向かいますよう」

2人の男はそう決意すると宇宙船に向かって行った。

「地球にはいつかかかろ?」

「約1年だなあ」

「1年かあその日まで久しぶりに寝ておくか」

「ええそうしましょう」

「その前にラディッツの奴が気になる奴をよく言っていたなあ」

「ええ言っていました。たしか名前は『青田千次郎』っ!!」

慎也は千次郎の名前を呟くと笑みを浮かべ、

「青田千次郎かあ・・・少しは俺を楽しませろよ!」

そう言うのと慎也は眠りに落ちた。

界王星に向かえ！新たな決意と西住みほの決意！

「ううん・・・むにやむにや・・・暖かいなあここ・・・」

千次郎はラディッツとの戦いを終えた後、急激な疲労により疲労死寸前だったが何と謎の龍に

もう一度助けられ、今は龍の背中で安らかに眠っていた。するとよく眠ったのか

目を覚まし始めた。

「ふうーよく眠ったなああれ・・・ここはどこだ？」

龍の背中から立って軽く背伸びしている時辺りを見渡していた。

「そうか・・・俺は・・・死んだんだな」

千次郎は自分の身体を触ってようやく自分が死んだことを理解した。

「でも一体この龍はどこに向かっているんだ？」

そう言って辺りを見渡しているとようやく何か建物が見えた。

「スゲーー宮殿みたいだ！それに仏の大群がいっぱいー!!」

まるで宮殿のような建物で大きな一本道にたくさん人の魂がキリツと一列に並んでいた。

だがしかしここである違和感を千次郎は感じた。

「あれ？何で俺の身体はこのまま何だ？」

普通死んでしまった場合、肉体と精神が離れて精神だけになるのが千次郎の場合

肉体と精神が離れていなかったのだ。

「何でだろう？まあいつか魂だけになるだろう」

「どうでもいいや」という気持ちでいたときどこから大きな声が聞こえてきた。

「すみませんー!!?ここに青田千次郎様と言う人居ませんでしょうか?おいででしたら

返事をお願いしますー!!?」

角が生えている鬼が自分の名前を呼んでいたからだ。

「すみませんー!!?青田千次郎様と言う人居ませんでしょうか?」

「何で俺のこと探してるんだろう?まあいいか・・・はーい!!?ここ  
でーす!!?」

名前を呼ばれたことに違和感を覚えたが一応返事をした。

「あああなたが青田千次郎様ですか?至急私と一緒に閻魔大王様の所  
へ」向かいお願いします」

「ええ閻魔大王の所へ!?なんか俺悪いことしたのかなあ?」

「早く!早く!遅かったら閻魔大王様に叱られますよ」

そう言うわかれては手を引つ張つられ閻魔大王の所へ連れて行かれ  
た。

??

「大王様!!?連れて参りました」

見習い鬼は千次郎を連れてきたことを閻魔大王に伝えた。

「ご苦労よく連れてきた。お前さんが青田千次郎だなあ?」

閻魔大王は書類を片手に千次郎の方へ目を向けた。

「あ!はい!!俺がいや僕が青田千次郎です」

慌てテンパったがちゃんと返事ができた。

「まあまあそんなかしこまらんでよい。実はお前さんを連れて来て欲  
しいと言う奴がいてな」

「連れて来て欲しい奴?」

「まあ今そいつは、お前さんを待っているそうだ」

「はあ」

「まあ至急そいつの所へ向かってくれ。わしから言うことは以上だ」

閻魔大王はそう言うのと一呼吸入れてまた仕事を始めた。

「あのー少し質問があるんですが?」

「うん?何だ言ってみろ」

「どうして僕だけ魂だけになっていないんですか?」

「これだけはどうしても聞きたかった。」

「ああそれはなお前さんを連れて来て欲しい奴がわしに頼んで特別に



お前さんだけ魂だけになっっていないんだ」

「へえー分かりました。ありがとうございます。それとも一つ」

「何だまだあるのか？早く言ってくれ」

「ここにラディッツっていう奴が来たと思うんですけど今どこに・・・」

「ああそいつならもう地獄へ行つたよ」

「地獄？」

「よく暴れてな、わしに殴りかかろうとしたから即地獄行きにした」

「そうですねありがとうございます。では僕は今からその場所に行つて参ります」

千次郎はそう伝えると閻魔大王にお辞儀して走り去った。

「今時あんな純粋な心を持つ奴がいたとはなあ・・・だが『界王様』も悪いなあわざわざあんな遠い

界王星にあの少年を呼ぶとは・・・さて疲れたし、一息とするか」

閻魔大王はそう言うのと座っている椅子から立ち上がってドスドスと足を鳴らして休憩しに行つた。

「あのー僕が向かう場所って遠い場所何ですか？」

「ええ遠いと言えないぐらいめっちゃやくちや遠い場所です！なんせ100万キロメートルですから」

「ええ!!？100万キロメートル!!」

千次郎は見習い鬼と車に乗って道案内してもらっていた。

「そんなところへ俺を待っている人がいるんですか？」

「それぐらい千次郎様のことをよく知っている人なんですよ！」

「俺のことをよく知っている・・・人か・・・」

千次郎は全く分からなかった。自分を知っているのは、あのイジたらしい界王と西住みほと

唯一血の繋がりがある弟だけだった。

「さあ!!？着きましたよ。ここからはこの蛇の道を進んで行けば千次郎様を待っている方のところに

着くはずですよ」

そう言うのと見習い鬼は蛇の道を見せた。蛇の道は、その名の通り、

蛇のくねくねした道だった。

しかし千次郎はある違和感を感じる。

「これがドラゴンボールに出てきた蛇の道か・・・待てよこの到着場所って」

「それでは私はここでお別れです。頑張ってください!!?」

「あーちよつと待ってください!!」

千次郎は呼び止めようとしたが見習い鬼はそのまま車にエンジンをかけて行ってしまった。

「ああー行っちゃった。どうしよう・・・」

千次郎は悩んでいた。行けば界王のいる界王星でもし行かなかつたら後でどう言い訳をしたら

いいか分からないし、とても悩んだ。しかし、

「俺は・・・この世界を守るって決めたんだ!!1年後に来るサイヤ人に對抗するためにアイツにでも

武術を教わってみよう!!?」

そう言うのと界王星に向けて蛇の道を走り始めた。これから長い道のりの始まりである。

??

ここは大洗女子学園である。ここである少女の決意が決定した。

「私!!?戦車道やります!!」

「本当ーありがとう西住ちゃん!!明日から頼むよ」

それは西住みほが大洗女子学園で戦車道を再開することを生徒会の前で決意したのだ。

「やったね♪みほりん!明日から一緒に頑張ろうね!!」

「頑張りましたよみほさん」

武部沙織と五十鈴華がみほと一緒に戦車道をやれることにとっても喜んでいた。

「うん。ありがとう沙織さん、華さん。私頑張るよ」

みほは沙織と華に笑顔で返事した。

「でもみほりんも急に変わったね。戦車道嫌がっていたのに」  
「そうですね。何で急に変わったんですか？」

沙織と華はみほが急に戦車道をやる決意に少し驚いていた。  
「確かに最初は嫌で戦車を見るだけでも嫌だったけどあの人の言葉を  
思い出して」

「あの人って？」

「私の戦車道を素晴らしいと言ってくれた私にとって恩人みたいな人  
かなあ」

みほは笑顔で沙織と華に伝えた。

「恩人か・・・その人ってどこにいるの？もしかして・・・恋人!!？」  
沙織は焦りながらみほを見ていた。

「その人はそれを言ってくれた瞬間、走り去ってどっか行っちゃった  
けどいつか感謝の言葉を言いたいなあ」

「だったらその人をいつか探そうよ!!？そして、お礼を言ったら？」

「え！いいの!!」

「当たり前ですよ。みほさん。私達は、友達じゃないですかみほさん」  
「ありがとう2人とも!!」

本当にいい友達だ。みほは感謝の気持ちでいっぱいだった。

「そうと決まったらお茶して考えようよ!!？」

「そうしましょうか」

「うん!!」

3人はそう言う喫茶店に向かって足を動かした。本当に楽しそ  
うだった。

しかし、

もうすぐこの大洗女子学園と大洗町にサイヤ人が来ることは、

まだ誰も

知らない・・・。

## 宇宙一の狂戦士サイヤ人登場!!

「ハアハアハア」ダツダツダツ!

この世界を救うことを決め界王星に向かうためただひたすらに蛇の道走る千次郎。

「ハアハアもうだいたい10kmは走っただろう」

しかしまだ100万kmには全く届いていない。

「少し休もうか」

そう言うのと道の真ん中に腰を下ろした。

「ハアハア100万kmなんか聞いてしまったらまだ全然先が見えないなあ」

「ああ・・・もし空を飛べたら少しは早く着くのかなあー」

中二病的なことを言っていると、

「うわあヤバい!バランス崩した!」

走り過ぎて疲れてしまったため重心を誤って左にかけてしまった。

「ヤバイヤバイ右にかけないと!」

手をグルグル回してバランスを戻そうとするがバランスが戻らない。

そうジタバタしていると黄色い雲の中から黒い手が伸びてきた。

その手はまるで地獄へと連れ去ろうとする手のように。

「くそっ!こんなところで終わって・・・たまるか!?!?」

その瞬間ものすごい気が千次郎にまとわりつき、

「たあー!」

大きな声を上げて、

「はっ!!」

体が浮き、そのまま元の道に戻ることが出来た。

「すげえ!体が浮いてる!よし!このまま界王星へ飛んで行こう!」

ビューーン

その言うのと、ものすごい速さで蛇の道を飛び去っていた。

??

ここはとある宇宙空間である。この宇宙空間の中に2つの宇宙船が太陽系の地球に向かっていた。

そうラディッツが言っていた知り合いの2人「慎也とナツパ」である。

(起きろナツパ!起きるんだナツパ!)

「うん?もう地球ですか?」

「いやまだだちよつと寄り道しようと思つてな少し覚醒タイマーをセツトして置いた」

「寄り道?」

「ああこの先に少しいい星があつてな高く売れるぞ!」

「分かりました。へへ1年ずつと寝ていると体が鈍つちまうからなあ丁度いいウォーミングアップだ」

そして2人の宇宙船はとある星に漂着した。

「とにかく・・・汚い星だな・・・」

「本当だな汚くてありやしないぜ」

2人が漂着した星はまあ薄汚く闇に覆われていた星だった。

「早くここから離れましょう。汚くて体が痒いぜ」

「まあそう焦るな。とにかくもつと調べた方がよさそうだなあ」

2人が会話していたその時だった。

ピ。ピ。ピ。!

スカウターが何かに反応した。その瞬間、

ドカーーン、ドカーーン

地中から巨大なダンゴムシが出てきた。

「待て!そこの怪しい者達!」

2人が目を向けるとそこにハエのような宇宙人達がいた。

「うわあーなんて醜い生き物だい！」

「へへーこいつら宇宙人らしいです。モアイ様が喜びますよ」

2人を見ながら嘲笑う宇宙人達。

「ここは惑星アーリア！そしてこの星を仕切っている王・・・モアイ王の配下だ」

「まあ遠い宇宙からやって来たんだ。この星に来たからには・・・ゆっくりでも・・・して行け！」

その瞬間、1人のアーリア星人の口から赤い光線が出た。

そのまま2人のもとへ飛んで行き、

ドカーーン

爆発音と共に2人は消えた。

「フハハハハ！どうだこの光線の威力は！って何！聞いていないだど！」

2人は光線を喰らってもなお平然としていた。

「何だ！こいつら！ますます気持ち悪い！」

アーリア星人達は懐に入れていた剣を出そうとしていた。

「おーおーこいつは面白れーじゃないか」

ナツパが戦闘モードに入ろうとした時だった。

（やめろナツパ！ここで争ってどうする）

「っ!!慎也・・・」

慎也がナツパにテレパシーで話しかけていた。

（まあ俺に面白い作戦がある）

「作戦だと・・・」

（よく聞いとけナツパ）

そう言う慎也はナツパにテレパシーで作戦を教えた。

「よし！分かった。それでいこう」

作戦を聞いたナツパはアーリア星人達に対し、

「おいお前たち！お前らの星に勝手に入った俺らが悪かった」

「・・・」

「大人しく着いていくからそれで勘弁してくれ・・・な！」

「・・・ちっ！何だ急に脅かしやがって・・・ほら手を出せ！」

そう言うときアーリア星人達は2人に手錠をかけた。

キン！キン！キン！

コロシラムに響く激しく剣と剣がぶつかる音。どちらも戦っている者は傷だらけで命懸けだった。

それに対し、それを見て暇そう見ているモアイ王。モアイ王の周りには妻や彼に服従している者がたくさんいた。そして、

「グワア！」

1人の戦闘者が剣を腹に刺され倒れてしまった。

「ひいー待ってくれ！死にたくないよ」

「うるさい早く立て！」

戦闘者はそのまま2人の配下に連れて行かれ、

「あばよ負け犬」カチツ

「うわあああ」

スイッチを押されてそのまま暗い知地下に落とされた。

「うう痛い・・・うわあ何だこの怪物は！」

「ウーウーウー」

「待ってくれ！食べないでくれ・・・ぎゃああー」

「ガウガウガウガウ」

そのまま戦闘者は怪物に喰われてしまった。

??

ここは地下牢。ここにまた新しい囚人が入って来た。



「さあとつとと早く入るんだ」

兵隊に連れてこられた2人は慎也とナツパだった。

「ふふしばらくはここに大人しくしておくんだな宇宙人さん」

兵隊はそう言うところかへ去って行った。

「なかなかやつてくれるじゃないか」

ナツパがニヤニヤしながら言っていると、

「おい！宇宙人だ！」

「本当だ！」

目を向けるとそこには収容されていたアリア星人がいたのだ。

「おいおい・・・とうとうあいつら宇宙人にまで手を出したぞ」

アリア星人達は、慎也達を哀愁のこもった目で見つめ、

「君達も悪い時にやって来たね」

「モアイが王についてから何もかもがめちやくちやだ」

「我々一般市民はモアイのおもちや同然だ。それに・・・僕なんて結婚式の時  
に

妻を盗まれたんです」

1人のアリア星人は慎也達にそう伝えると涙を流しながら腕輪を触っていた。

「退屈だな」

モアイは、殺し合いにも飽きたのかつまらなそうな顔をしていた。  
すると、

「王様」

1人の兵士がモアイに何か伝えようとしていた。

「うん？何だ？」

「王様に伝えたいことがあります」

「何だ言ってみろ」

モアイがそう言うと兵士はモアイの耳に向かって要件を伝えた。

「何！宇宙人を捕まえただと」

「はい・・・左様でございます」

「面白い・・・連れて来い可愛かったらわしのペットにしてやるぞ・・・」

うん？」

モアイが好奇心を抱いていると何と慎也達がコロシウムにやって来たのだ。

「もしかして・・・あれが例の？」

モアイが兵士に顔を向けると兵士は怯えた顔で、

「あいつらどうやって牢を抜け出したんだ・・・」

一方地下牢では、兵士の死体や粉々になった牢屋がたくさんあった。

「すごい・・・あいつらなんてパワーだ！」

アーリア星人達は驚きのあまり顔を隠せなかった。

そしてコロシウムでは、

「えへん！何という醜い生き物だ。これではペットにもならん・・・なあレミリア」

モアイは深刻な顔でレミリアという女のアーリア星人にそう言った。

「おい宇宙人わしと賭けをしないか？」

「賭け？」

そう言うともアイはニヤつきながら、

「そうだ。わしの戦士と戦ってみろ！勝ったら何でも好きな物をくれてやる」

「まあお前らに勝ち目がないがな」

そう言うともアイは慎也達にさらにニヤつきを覚えた。

「ギイイイイ」

目を向けるとそこには1人の兵士が慎也達に向かって剣を向けていた。

「さあ宇宙人がどんな血を流すのか楽しみだ・・・さあやれ！」

モアイがハンカチを落とした瞬間、

「ギイイイイ!!」

兵士が剣を慎也達に振り翳した。その時だった。

「ふん雑魚が」 キュイーン

「ギイ?」

「死ぬ」 バキューン

慎也は人差し指に溜めていた気を兵士に飛ばした。すると、

「ギャヤヤヤ」

見事に兵士の顔に命中し、焼け焦げてしまった。

「何だ? 何がどうなっているんだ?」

モアイは触覚をピンと立てて驚いた。

「何でも好きな物をくれると言ったなあ」

慎也は笑みを浮かべて、モアイにこう言った。

「では・・・この星を頂こう!」

「何!?!」

「聞こえなかったのか? この星と貴様らの命だ!」

ナツパがそう呟いた瞬間、

「ギイイイイ」 ギューーン

「ギイイイイ」 ギューーン

「凶に乗るな!」 ギューーン

たくさんの兵士が慎也とナツパを囲み口から赤い光線をでました。しかし、

「何! バリアを張っている」

慎也達は、バリアを張っていたので光線など効いてもいなかった。

「ばっ馬鹿な」

それを見ていた兵士は啞然としていた。

「まだ分からないのか? 俺達は貴様らにわざと捕まったのだ。ここに案内してもらうためにな」

慎也は、モアイにニヤつきながらそう言った。

「奴らを殺せ! 八つ裂きにしろ!」

モアイは張り裂けるような大声で兵士達に叫んだ。

「「ギイイイイ」」

兵士達はそれに応えようと戦うが、

「ふん懲りない奴が」キユイーン

「死ね！」バキユーン

「ギャヤヤヤ」

慎也が放つ気弾に全く歯が立たなかった。

「ハーーーーー!!!」

一方ナツパはとでも気を溜めていた。コロシアムの床が揺れるぐらいだった。

「ヒイイイ」

それを見ていた兵士達は最早怯えるしかなかった。

「ハーーーーー!!!」

ナツパはさらに気を溜め、体中からバチバチと電気が流れていた。

そして次の瞬間、

「ハ!!」

ナツパが手を上に上げた瞬間、

「ギャヤヤヤ」

兵士達の肉体がスーッと消えていった。

「うわあ!?!イエディをイエディを解き放て!」

モアイは残りの兵士達にそう伝えた瞬間、

「ヴオオオオ」

床から大きな茶色の皮膚した大きな怪物が現れた。そうイエディだ。

「ふん……この怪物《バケモノ》が切り札ってか」

「やれイエディ!その2人をぶち殺せ!」

「ヴオオオオ」

モアイの命令を聞き2人に近づくイエディ。

「俺がやろう」

「……好きにしろ」

次の瞬間、

「ヴオオオオ」ヒュン!

イエディから鋭いパンチが飛んできた。

ドカーーン

2人には当たらなかったが、コロシアムの半分が半壊された。

「ヴオオオオ」

続け様にイエデイのタツクルが入った。しかし2人には全く当たっていない。

「ふんただの凶体がデカイノロマだぜ」

「ヴオオオオ」バキューン

イエデイの目から鋭い光線が放たれた。

「おっと危ない危ない」

しかし、慎也には当たらずコロシアムが崩れていくだけだった。

「ヴオオオオ」ヒュン！

イエデイがナツパに対し、鋭い突きを出したが、

「ふん」

ナツパがガシツとイエデイの突きを止めた。

「馬鹿がイエデイと力比べをするつもりか」

モアイはナツパの行動を馬鹿にしていた。

「ヴオオオオ」

「ちつこのノロマが！」

ナツパとイエデイの力比べはどちらも互角だった。しかし、

「この野郎が！」ブチツ

「ヴァアアアア」

何とナツパがイエデイの指を引きちぎったのだ。イエデイはあまりの痛さに叫ぶことしか

出来なかった。

「ふん」ペロ

それを見ていたナツパは、イエデイの血を舐めていた。

「お遊びはお終いだー」バチバチ

ナツパは手のひらに溜めていた気をイエデイにぶつけた。

「ヴァアアアア」

イエデイは気弾を喰らうと肉体がサイコロステーキのように砕けちった。

「ひんひん」

イエデイが死んだことでモアイは逃げようとしていたが、

「ふん！ やすやすと逃げられると思うなよ」

慎也がゆつくりと手を上げると崩れた岩石などがモアイに向かって行ったのだ。

モアイは避けることもできず、

「グワアアアア」

岩石に当たり事切れてしまった。

「ハアハア何だこれはどうなってるんだ」

1人のアーリア星人は、変わり果てたコロシウムにとっても驚いていた。

「ふうーやつと終わったな」ピコピコピコ

慎也はスカウターで宇宙船を呼ぼうとしていた。

「す、すごいね君達！ あなた方はこの星を救ってくれた救世主だ！」

「これでもう一度この星に平和が戻ってくる」

アーリア星人は、慎也達に感謝の言葉を述べた。

アーリア星人が感謝の言葉を述べている時宇宙船がやって来た。そのまま慎也とナツパは宇宙船に乗り上へ上へと舞い上がっていった。

「アドラー！」

「・・・レミアア！」

アーリア星人のアドラーとレミアアはもう一度会えたことに喜びをあらわにした。

「ちっ駄目だこんな星一円にもなりやしない」

「行くぞナツパ」

一方慎也とナツパは宇宙船でこの星を離れようとしていた。

「アドラー！」

「レミアア！」

2人はもうすぐ抱き合うまで後もう少し。

「消えて無くなれクズ星め！」バキューン

慎也はそう言った瞬間人差し指から気弾を飛ばした。そして気弾は段々星に近づき、

「アドラー！」

「レミリア！」

2人が手と手を合わせた瞬間、

ピカーーーン

眩い光と共にアドラーとレミリアそして惑星アーリアは破滅した。

「ふんどんな星でも消え去る時は美しいものだ。フッフハツハハハハアツハハハハハ」

恐ろしい連中だ。これがもし地球ならさらに恐ろしい連中だ。

「さて今度着く場所が地球だな」

「さてもう一度眠るとするか」

慎也とナツパはそう言うともう一度眠りついた。

「青田千次郎・・・俺達が地球に着いた時は楽しませてくれよ・・・特にこの『阿散井慎也』様をな」

そう眩いた後覚醒タイマーを地球までにセットした。

やめて下さーい！桃と千次郎と鬼六と

「うーん・・・ムニヤムニヤ・・・うー」

「全く界王様も人が悪い。よりよってこんな少年をわざわざ界王星に呼ぶだなんて・・・」

見習い鬼は、車を運転しながらミラー越しに映る千次郎を見ていた。

「スウー・・・スウー・・・」

千次郎は蛇の道を舞空術で走っていたが、やはり人間誰にも限界があるため疲労が溜まり寝ていた所を用事で蛇の道を歩いていた見習い鬼に助けられて今車の荷台に乗って寝ていたのだ。

「早く連れて帰ってあげよう・・・こんなに疲れているの見ている方も辛い」

そう言うときさらにアクセルを踏み出した瞬間、

「っ誰だよ!!こんなところに石を置いて行った野郎は!ってあれ!!あの少年はどこ行った?」

突如、道の石をタイヤで踏んでしまったため車体が大きく揺れてしまった。その瞬間千次郎は

荷台から落ちてしまったのだ。

「どうしようどこへ落ちたんだ!?早く見つけないと大王様に怒られてしまう!」

もし落ちたとしたらあそこに違いない」

焦りながら見習い鬼は、閻魔大王に連絡した。

??

「うーんふああああってあれ!!ここどこだ!」

一方眠りから目を覚めた千次郎は荷台から落ちたことに気づいていなかった。

「あれー?おかしいな・・・疲れたから道の真ん中で寝ていただけなのに・・・」



頭をキョロキョロ動かしながら辺りを見回していると、

「うん？何だあれ？」

自分の目に何か一つ引つかかったためよく見るとそこには沢山の桃が付いていた木があった。

「うわあ桃の木があるぞー！丁度腹が減っていたから運がいいや！ラツキー！」

そう言うのと木に飛びついて桃を取りアーンと言いながら頬張り始めた。

それから何分経っただろうかあんなに沢山あった桃は寂しくもただの木へと変わり果てて

しまった。腹をさすりながら大きくあくびをしていた千次郎。沢山食べたためか木にもたれて

ウトウトしていた。食べ物で沢山たべた後にくる昼寝はまさに極楽。睡魔が来て眠りに

つこうとしたその時だった。

「うわあー！！！！桃が無くなってるじゃないか！！」

「うん・・・何だろう？」

突然大きな声がしたので目を開けるとそこには金棒を持っていた赤鬼がいた。

「誰だ！俺の桃を喰っちゃった野郎は！！」

しかもかなり怒りを覚えていて目を真っ赤にしていた。すると赤鬼は鼻息を荒々しく立てながら

千次郎に近づき、

「テメエか！俺の桃を勝手に喰った野郎は！！」

激しく怒鳴り声を上げながら千次郎の胸ぐらを掴んだ。

「ま、待ってくれよ！頼む！腹が減っちゃったから喰っちゃっただけなんだ。それにそんなに

怒るなよ・・・なあ」

千次郎は赤鬼を嗜めようと思ったが、

「そ・ん・な・に・お・こ・る・な・よ・．．．だと．．．ふざけるなあ  
!!!」  
「わあちよ、ちよつとー!」

突然胸ぐらから肩を掴み始めて、  
「あの木はなあ!俺が毎日毎日手入れして、荒枝を切り落として、水を上げてやつと実も出来て

今日食べようと思ったら全部食べられてちまって．．．それでそんなに怒るなよだとふざけるのも

大概しろ!!」

すると突然赤鬼は涙を流して、

「テメエは俺の今までの努力をどう落とし前付けてくれるんだよ．．．グスツ」ツ

「えつと．．．そのーごめんなさい」

やっと自分がやったことに理解したのか涙を流している赤鬼に謝罪した。しかし次の言葉に

千次郎は恐怖を感じた。

「まあいいや．．．桃が食えないなら．．．」お前食うしかないなあー  
“!”」

そう言うと肩に置いている金棒を肩から下ろして千次郎に金棒を向けた。

「え!それは流石に『落とし前付けてくれるんだろ!?!』」

そしてゆっくり振りかぶって、

「シューね!!!」ブンッ

金棒を思い切り千次郎の頭にぶつけた。

バキッ

「グワアアア!!!」ドサツ

突如走る頭の痛みにただ叫ぶことしか出来なかった。

「もうういつちよ!!!」ブンッ

すかさずもう一度金棒を思い切り振ってきた。

「やばい．．．今度まともに喰らったら本当に死ぬ．．．」

「早く避けないと．．．」

逃げようと体を動かそうとするが頭を殴られたため体が言うこと聞かなかった。

バキッ！

「うわあああああー！！！！」

甲高い叫び声と共に千次郎は意識を失った……。

「やった！やった！やった！やった！遂に死んだ！！ヒヤハハハハハハハハハハ！！」

赤鬼は喜びをとてあらわにしていた。

「せて腹が減つては戦はできぬと言うからな……早く飯にするか……」

そう言つて千次郎の足を掴んだ次の瞬間、

「俺の足を勝手に触るな……下衆！」

「な、何だとまだ生きていたのか!？」

赤鬼は喜びから恐怖へと変わった。なぜなら死んだはずの千次郎が今こうして生きていたからだ。

「うわあ！何だよテメエ！早く死にやがれ!!」ブンッ

赤鬼はもう一度金棒を思い切り千次郎の頭にぶつけたが、

「そんなの……聞かないよ」

ギョルギョル

「何だと！再生したのか!？」

赤鬼は金棒を何度も何度も千次郎の頭にぶつけるが全く効いていなかった。

「何だ……もう終わりか？じゃ今度は俺の番だ」キュイーン

「ま、待ってくれ！俺が悪かったから！な！」

「本当に悪いと思ってる？」

「ああ本当だ！だから殺さないでくれ！頼むこの通りに」

赤鬼は頭を垂れながら涙を流して命乞いをした。

「分かった……」

千次郎は手に溜めていて気弾を消した。

「あれ？俺確か意識を失つてそれからあれ？どうなったんだっけ？」

「あ！あのすみません！勝手に桃を食べちゃって！本当にごめんなさい！」

突如急に千次郎はガラツと雰囲気が変わり赤鬼に謝罪し始めた。  
（こいつは・・・自分がさつきまでやっていたことを忘れているのか・・・）

赤鬼はその行動を見て驚いていた。

「いやいいよ！何もそこまで謝らなくて『本当にごめんなさい！落とし前は

付けますから!!』!？」

泣きながら謝っている千次郎は見て赤鬼はしどろもどろだった。

「わ、分かったからじゃ、じゃあ名前だけ教えてくれないか？」

「名前は・・・青田千次郎ですが」

「千次郎かい名前だな俺は『鬼六』だ」

「鬼六さん本当にごめんなさい」

「鬼六さんなんて鬼六でいいって鬼六で」

鬼六は嗜めようとするも、

「いや！鬼六さんと呼ばせてください！どうせならこれが落とし前として」

千次郎の謝罪の気持ちに勝てる訳でもなくとうとう折れてしまった。

「そーいや千次郎だったけ？何でお前さんはこんなところにいるんだ？」

「実は俺界王っていう奴に会いに行かなければならなくて」

「何!?界王様だと！だったら早く行かなきゃいけないじゃないか！」

「で、でも俺ここがどこなのか分からなくて・・・」

「ここは俺の私有地だ。多分お前がヘマして蛇の道から落ちてしまったんだらう・・・えーい！」

こうなったら千次郎俺の前に来い！」

「え!?ちよつと!」

振り解こうとするも鬼六に連れて行かれ、

「いいか千次郎！今から俺はお前を金棒で打つ！」

突然言われた言葉なので首を傾げてしまった。

「え!? 打つ・・・の? 俺を?」

「そうだ! ここから蛇の道は高さ1000m以上ある! 安心しろ! 俺は力に自信があるから」

「そういう事じゃ無くて『行くぞー!!』話聞いてーない!!」

「そーれ!!!」 ブンツ  
!!!

キーーーーン

「うわあーーーーー!!!」

「よし成功した!! 頑張れよ! 千次郎ー!!」

鬼六の励まし声を聞く暇もなく千次郎は飛んで行った。

??

「本当にあそこに落ちてしまったのか?」

「はい! 恐らく鬼六の庭に・・・」

蛇の道の真ん中で閻魔大王と見習い鬼が話していた。

「はあー何であるの “人喰いの鬼六” の庭に落ちてしまったのだ?」

「実は道の真ん中に石が落ちてしまって・・・そのまま荷台から落ちちゃって・・・」

「そ・・・う・・・か」

閻魔大王は千次郎が喰べられたと思うと思わず目を瞑った。その時だった。

「うわあーーーーー!!! どいてどいてー!」

「えっ!!」  
!!!

閻魔大王が目を開けるとそこには、

「せ、千次郎さん!!」

「うわあー!!!」

ドーンと大きな音を立てながら千次郎は蛇の道に戻った。

「ど、どうやって戻って来れたんだ?」

「実は鬼六さんが金棒でここまで飛ばしてくれたんです」

「鬼六が!？」

閻魔大王はびっくりした。あの鬼六が人を喰わなくて人を助けたのだ。

「じゃ俺界王の所に行ってくる!」

「ちよっと、おい!!」

呼び止めようとするもそのまま行ってしまった。

「何とあの鬼六が人を助けたなんて・・・」

「本当なのか信じられんがアイツを信じるとしよう・・・さてわしらは帰るぞ!」

「え!もうですか!」

「他に何かすることでもあるのか?」

「いえ何も・・・」

「だったら早く車のエンジンを掛けるんだ」

そう言わせて閻魔大王は車に乗って外を見つめて、

「千次郎・・・早く向かうのだ。お前しかもうこの世界を守られないのだ。頼むぞ」

そう言うとき目を瞑った

蛇の道終点くくく！界王との再会！千次郎の涙の申し入れ！

「ハアハアもつと速く！」

汗を流し、ただひたすらに走る千次郎。さすがにもう舞空術は使わないようだ。

「くそっ！まだ見えないのかよ!？」

だがどんなに走っても界王がいる界王星は全く見えない。

「よし！こうなったらもつと速く走ろう」

そう言つて足のリッチを上げた次の瞬間、

「あれ？行き止まり！」

何と界王星まで続いている蛇の道が何と尻尾だけになっていたのだ。

「嘘!?!もしかしてここで終わり!?!」

左右を見渡すが何も無くただ黄色の雲が広がっていただけだった。

「左も右も無かったら・・・上？」

そう言つて上を見上げると、

「ああ！あつた！あれが界王星か!？」

ピンクの空の中に一つ緑色の星があつたのだ。

「どのみち道が無いからもう舞空術で飛ぶしか無いな・・・」

そう言つと体中に気を溜めて、

「そーそーれ!!!」ビュン！

大きく体を弾めた。そのまま千次郎は界王星に段々近づいた。

「よし！成功した！」

そしてそのまま着地の準備をしようとした。が、その瞬間物凄い引力が千次郎を引っ張った。

「うわあ！何だものすごくなにかに引っ張られて・・・うわあ!!」

そしてそのまま着地ができず叩きつけられるように界王星に漂着した。

??

「ああ痛てて・・・何だよこの星！」

顎、胸を思い切り叩きつけられ悶絶している千次郎。そして何より驚いたのは、

「くっ！先から体が重い・・・何でだ？」

ただ横たわっているだけなのに起き上がるだけで汗水を垂らしていた。

「ふうーそんなことより早く界王を探すか・・・」

まるで錆びたブリキ人形のようにガチガチになった体を一生懸命動かした。しかしどんなに

探しても界王はどこにもいなかった。

「くそっ!!普通人を呼び出すんだから歓迎するのが当たり前だろうが！」

そう言つて近くに生えていた木を思い切り蹴った。その時、

「ウホッ！ウホッ！ウホッ！」

「!!」

声を上げながら胸を叩いて歩くゴリラがいた。しかもその行動は千次郎を見てやっていた。

「何だこのゴリラ!?俺をおちよくってるのか!」

「ウホッ！ウホッ！ウホッ！ウホッ！」

千次郎がギロつと睨みつけるがゴリラをやめずに胸を叩いていた。「そういうことね・・・。。。。。。。だったら今からお前ぶつ飛ばすぜ!!」

次の瞬間物凄い速さでゴリラに近づいた。

(よしそのまま大人しくしてろよ)

そしてゴリラを捕まえるため手を出した瞬間、

「ウホッ!!」

「何!!」

何と手を出した瞬間ゴリラはまるですり抜けたように千次郎の手



から避けたのだ。

「くそっ!!」

もう一度捕まえようとするもゴリラはまたかわした。

「ウホッ!・ウホッ!・ウホッ!・ウホッ!」

「あー!・腹が立つぜ!!」

今まさに千次郎は腹が煮えくり返そうな気持ちになっていた。捕まえるのが簡単なゴリラを

捕まえられずしかも茶化されてさらに嫌な気持ちになった。

「もういいや・・・・・殺したくなってきた・・・・・」

「ウホッ!ウホッ!ウホッ!・・・・・ウホッ?」

「恨むなよゴリラちゃん・・・・・殺くぜ!」ビュン!

「ウホッ!」

ゴリラは逃げようとするも恐怖で体が震えて動けなかった。そして自分の首に鋭い手刀が入ってきた。

「死ね!!」

もう逃げられない!ゴリラが目を閉じた瞬間、

「そこまでだ千次郎」

「!」

「やり過ぎだ。『バブルス君』が震えておる」

何と界王がいたのだ。あれだけ探してもいなかった界王が。

「界王・・・お前どこに居たんだ・・・・・あんなに探したのによー」

「すまんすまんちよつと呼び出しをくらってなハッハハハ」

「笑いながら誤魔化すんじゃねえーよ」

笑いながら誤魔化す界王に呆れる千次郎。どうやら界王は呼び出しをくらっていたらしい。

「それにしてもなぜもう一度わしの所に来たんだ?もう二度俺の目の前に現れるなど言っていた

のにも関わらず」

界王はもう二度と現れるなど言った千次郎がなぜもう一度現れたのか疑問に思っていた。

「それは……」

「わしの胸ぐらを掴んで言ったよな？」

「……」

「あんなに嫌そうに言っていたのに」

「……」

「なあなぜなんだ？」

界王が問い詰めて言うのと千次郎はゆっくりを深呼吸をし、

「確かにあの時は言った……でもアンタがいなくなった後サイヤ人っていうのがやってきた……」

無茶苦茶強かった。だけど死ぬっていう瞬間に何だか急に体中に何かが纏われてそれで戦ったら

勝った……でも完璧にコントロールできなくて死んで……そしてこうなって……だけどアンタが呼んで今こうなって……

頼むよ……界王様。俺前みたいに学園艦をバイクで走り回って、喧嘩して、

人に迷惑かけて生きたくないんだ。頼むよ俺に武術を教えてください。グス……ウツウツ」

涙を流しながら必死に界王に頼む千次郎。そんな千次郎を界王は見つめ、

「一つ問う」

「何……ですか？」

「わしの修行はちとキツイ……今ならやめとくがどうする？」

「嫌ぜってえーやめねえ……もうすぐサイヤ人が地球に来るんだ。止められるのは俺だけなんだ。キツイても絶対やめない！それは誓う」

手を差し出し界王に約束を誓った千次郎。

「分かった……今日からお前はわしの弟子だ千次郎！」

「っ！……押忍！」

「そうと決まればまずは……バブルス君を捕まえてみる！千次郎！」

「バブルス君を……って！えー！……」

かくして界王の弟子になった千次郎。まず最初の修行はバブルス

君を捕まえること。  
頑張れ千次郎！

逃げるバブルス君と、頑張る死人青田千次郎！

「バブルス君を捕まえるってあのゴリラを？」

「そうじゃ。ただ捕まえるだけじゃ」

界王の弟子になった千次郎はまず最初の修行ということでバブルス君を捕まえることが

課題になった。

「なんだー！意外に簡単じゃん」

「まあそう言えるのも今のうちだと思うがな」

首の骨を鳴らし、準備運動している時に界王が発破を掛けてくる。

「それにしても何でこの星はこんなにも体が重いんだ？」

千次郎は界王星に来た時に物凄い引力で引っ張られたため体がとても重たかった。

「それはそうだなあここは小さな星だが凄い重力でなあなんせ10倍くらいかなあ」

「じゅ、じゅじゅじゅじゅうばい?!?!?」

10倍と言われ腰がひけてしまった。

「だからお前の体重も10倍になるー」

「じゃ、じゃあ俺の体重は確か・・・62kgだったから・・・620kg?」

「ちよつとジャンプしてみろ。おもいつきりだ！」

「え！ジャンプ？わ、分かった」

急に素っ気なく言われたため気を溜め始める千次郎。

「やつ!!!」バンツ

そして弾けるような音を出してジャンプした。

千次郎は界王の頭ぐらいいまでジャンプしたら落ちてしまった。

「ぐつ!!!だ、だめだ!!あんなちよつとしかあがらない・・・!!」ドンツ

気を溜めても全然ジャンプ出来なかったため顔をしかめる千次郎。

「まあ普通ものならジャンプすらも出来んからお前はまだ上出来だ

！」

「これで上出来はなんか恥ずかしい・・・」

上出来と言われ顔を赤くする千次郎。

「では修行を始めてやるが千次郎。どれくらいの期間やるつもりだ？」

「俺蛇の道を何日ぐらい走ったか忘れちゃったからな……でもあまり時間は無いと思う……」

「確かサイヤ人がやってくると言っていたなあそれもまた厄介な奴に目を付けられたな」

「本当だよ全く……」

「どれ！サイヤ人がいつ来るのか調べてやろう」

そう言つて界王は帽子の触角を動かし始めた。

「ふむふむ確かにサイヤ人が乗っている宇宙船が近づいておる……地球にたどり着くのは

後158日つてとこか」

「凄い!!触角だけでそんなこと分かっちゃうの！界王様すげえ!!」

「そうか？こんなの当たり前に出来るぞ」

「しかし……たった158日しか無いと思うと……何か不安」

「な……に158日ありや充分じゃろ」

「そ……そうなのかなあ」

「この星でわしが158日も鍛えてやりやあお前が地球で数千年も修行した価値がある！」

「本当!?!」

「ただしじゃ修行をしてもサイヤ人に勝てるとは勝てるとは限らんぞ。それほど地球に

向かっている2人のサイヤ人は恐るべき強さなわけだ。はつきり言えばその強さは

このわしより上だ」

「ええ!!!!界王様よりも……!?!」

界王より強いと言われさらに不安になる千次郎。

「そういうことだ。ということとは少なくともこのわしを超えねばサイヤ人に勝つのは不可能という

ことだな」

「……うん……」

「では早速始めるかなおーいバブルスクーん！」

「ウツホツホウツホツホ」

「サイヤ人に勝つには厳しい修行を克服する他は無い……さあバブルス君を捕まえるのだ千次郎。」

とりあえずそれぐらい動けんことには話にもならんからな」

「わ、分かった……」

「それでは……始め!!」

界王の掛け声と共に千次郎の修行は始まった。

「ウツホウツホ」

バブルス君はウキウキとしながら足を動かしていく。しかしそれを追いかける千次郎は、

「ぐっ!!ま、待ちやがれっ!!」

ドンツドンツと足を鳴らしながらバブルス君を追いかける。まるで陸上選手を追いかける

ヨボヨボの老人が追いかけるみたいに。

「く、くそっ!!ほ、本当に体が重い……!!」

まだ10mしか歩いていないのにもう体中が汗だくだった。

「よ、よ……っし!見てろよ……」

突然自分の服に手をかけ、

「う……ん……!!」

「はあっはあっ!」ドスン

着ていたパーカーを脱ぎ、

「うんっうんっ!!絶対捕まえてやるからな……!!」

さらに靴と靴下まで脱いでしまった。

「フッフッフ……!これで少しマシになったぜ!!それっ!!!」

「ウツホ?」

パーカーも靴まで脱いだおかげか前より少し速くなっていた。

「ほう服を脱いでスピードを上げたか……しかし」

「よいしいたき!!」

バブルス君の近くまで行き手を差し出そうとした瞬間、

「ウツホ！」ギョーン！

「嘘!!」

自分がスピードを上げた分バブルス君もさらにスピードを出し遠のかせた。

「ウツホツホウツホツホ」

バブルス君は満面の笑みを浮かべながら千次郎を馬鹿にした。

「くそっ！あのゴリラ速すぎだ！あんなの捕まえられるかよ!!」

「出来なければとつとと帰れ」

「そんな酷いなー」

「甘ったれるな」

千次郎が少しでも甘い事を言えばすかさず界王の厳しい言葉が入る。

「ねえ界王様ー」

「何だ？」

「悪いけど俺さつきからとても腹が減ってるんだ。少しでもいいから何か食べさせてくれない？」

「.....まあよかろうしかしハングリーな死者は珍しいな」

腹が減っていたことに少し驚くも腹をすかしているのに修行をさせる訳にもいかないので

ちよつと待つてると言い家の中から焼き飯や肉まん、果糖など沢山のもの出してくれた。

「うひょー!!こんなに沢山！界王様ありがとう！では頂きます！」

そう言い始めると手が10本見えるかのように素早く手を動かした始めた。

「おい千次郎・・・」

「うん・・・何界王様？」ムシヤムシヤ

「お前は・・・遠慮という言葉を知っているか？」  
「え？」

「だから遠慮という言葉を知ってるかと聞いているんだ」

「うん。知ってるよ」ムシヤムシヤ

「・・・だつたら少し遠慮したらどうだ」

界王がやや呆れかけているのも当然だ。なんせあんなに沢山あつた食べ物がいじやすつからかんになっていたからだ。

「アムアムフガフガクチャゴジュゴジュ・・・う!!」

よく噛まなかつたのか喉を詰まらせ顔が赤くなっていた。

「ほれ!水」

「う!!」ゴクゴク

界王に渡された果糖を力一杯飲み始める千次郎。

「う!う・・・プハー!!助かった」

喉を詰まりが治つた後の顔はとても幸せそうな顔である。これは食べ過ぎだと

界王も叱りにくい。

「ああ!食つた食つた!!味はともかく腹はとても膨れたぜ」

「・・・きさまひよつとしてわしのこと尊敬しとらん・・・」

「でもさあ界王様こんな小さな星にいて退屈しないの?」

「フッフッフ・・・若いな・・・」

「???」

界王はニヤニヤしながら次のように喋り始めた。

「この星はなお前が思っている以上に楽しいことが沢山あるんだ。例えば草が何本増えているか

数えたり空を眺めたり遠くまでオシッコを飛ばしたりな

最近ハマっているのは

ドライブかな」

「うわあ!絶対どれもつまらなそう・・・」



「つまらんとするな！さあ早くバブルス君を捕まえるんだな。いつまで経つてもわしに武術を

教えてもらえんぞ」

「ああ頑張る！飯食ったからだいぶ楽だし」

ズボンの紐をきつく締めて準備する千次郎。

「そうだ千次郎。さつきから脱いだ服や靴もう一度つけて走るんだ。その方が効果的だからな」

「ええ!!あれ付けてるとさつきより走るのがキツイのに・・・」

「いい事を教えてやろう。サイヤ人がいた星はここと同じぐらいの重さだ。奴らはそこで体を

鍛えていた」

「?!?!」

「少しは分かったかな？サイヤ人の強さの秘密が・・・だがそれだけでは無いぞ・・・サイヤ人はもって生まれた闘いのセンスがあるのだ。そこがまた厄介な所だ」

界王は真剣な目つきで見つめる。それに対して千次郎は親指を立てて、

「大丈夫界王様！昔からこういうキツイことはガキの頃からやってるから」

ニコツと満面の笑みを見せ白い歯を出した。

「へ!」

「じゃ捕まえに行くとするか・・・」

そう言つて首の骨を鳴らしバブルス君を捕まえに走り始めた。



それから40日あまりの時間が過ぎたころ・・・

「うおーりやー!!!まーてー!!」

「ウホツウホツ」

あんなに歩くことすら難しかった千次郎は今では風のように走っていた。

「ウツホツホウツホツホ」

「よし!とおりやー!!」

ヘッドスライディングして捕まえようとするも、

「ウホツ」

ピョンとバブルス君がギリギリでジャンプしたため空振った。

「うわああ!!!ぶつかる!」

バブルス君に避けられたため木に思い切りぶつかった。

「くつそ!!もう少しだ!うおりやー!」

休む暇も無くもう一度バブルス君を追いかける。

「ハアハアハアハア」

「.....!!」

しかしバブルス君の速さに後少し届かなく疲れてしまいうずくまってしまった。

「くそ.....後もう少しなのに...待てよここ星だから...ふふふふ」

ほくそ笑みを浮かべるとバブルス君がいる方向とは逆に走り始めた。すると何ということか

バブルス君が千次郎に近づきに行ってるではないか。

「ウホツ!?!」

突然自分の目の前にいたことにびっくりしているバブルス君。

「よし!作戦成功!」

そう千次郎はこの星の小ささを利用して星の裏を利用したのだ。

「ウリヤリヤリヤ!!」

しかし早く出すぎたせいか急いで方向転換されてしまった。

「よし!次は」

もう一度裏を走って今度は家を盾にして身を隠した。するとさっきびっくりしてさらにスピードが速くなったバブルス君がやってき

た。

「来た………みいつけた!!」

そのままバブルス君の前に現れ通せんぼを図った。

「ウツホツホウツホツホ!!」

が、またも避けられてしまった。バブルス君は今度は捕まらないようにさらにスピードを上げて

いる。しかしある違和感に気づく。千次郎がいなかったのだ。辺りを探していると、

「たぁー!!!」

何と木の裏から千次郎が飛び込んで来た。余りにも突然だったため一歩踏み外してしまった。

「待てー!!!」

バブルス君にベツドスライディングし、そしてやっとなバブルス君を見事捕まえた。

「おー」

この行動を見ていた界王は捕まえたことに驚いていた。

「やったー!!!捕まえたぜ!」

千次郎は白い歯を出し、笑顔を見せた。

「よ、よろしい!」

界王は少し焦ったがちゃんと成功を確認した。

(うくくむなんて奴だ………早くもこの星の重力を自分のものにしてしまったか………あと118日も残っている……アイツなら極められるかもしれんか、〃界王拳〃を……!!こ……このわしが夢に描きながらもついに極められなかった界王拳を……!!そしてあの必殺技を……!!)

「だが……」

界王は考えていた。もう千次郎に自分直々に修行を教えるかと。

「嫌まだ早いな………もうワンステップ置いておこう……おい千次郎!」

「はーい!界王様!」

「まあまず第一は終了だ」

「そうか……ねえ界王様早く俺界王様から修行してほしんだけど」

「嫌お前にはまだ早いな……」

「そんな！界王様俺何でもするからさあーお願い！」

手を合わせておねだりする千次郎。

「そうか……何でもするか？」

「ああ！何でもする」

ピースサインを見せながら返事する千次郎。

「そうか……じゃ第二の修行を始めるか！」

「ええ！第二の修行！」

遂にバブルス君を捕まえこれで修行を教えてもらえると思った千次郎。しかし界王は千次郎に

第二の修行を言い渡したのである。

## 第二の修行開始！とサイヤ人の歴史！

「ええ！第二の修行!」

「そうだ。何か文句でもあるのか？」

「だって界王様！バブルス君捕まえたら教えてくれるって言ったじゃん」

前回40日かけて遂にバブルス君を捕まえた千次郎。しかし修行はまだ続きがあったのだ。

「確かにそう言ったが絶対とは誰も言ってないだろう」

「うわあー！界王様のケチ！」

「ふん！どうとでも言ってる」

「ねえ界王様俺早く修行しないとサイヤ人が……」

「ええい!!慌てるでない!」

修行をしたがる千次郎に一喝を入れる界王。

「まあこの修行が出来たら今度はわしが相手してやるから」

「言ったよ界王様！今言ったからね!」

指を指して界王に悪い笑みを浮かべる千次郎。

「よし！ふー」

「????」

突然息を吸い始めた界王。何のことかさっぱりな千次郎はただ見つめていた。そして次の瞬間、

「あああああー」

!!!!!!

突如物凄い叫び声を発した界王。耳の鼓膜が破れそう。

「な、何だ！急にデカイ声でして……」

「もう戻ってくる頃だ」

「戻ってくるどういうこと？」

界王が意味不明なことを言い始めたのできよんとしている。すると、

あああああー  
!!!!!!

「わっ！戻ってきた！」

先程の叫び声がぐるつと一周して戻ってきたのだ。

「なあ界王様本当にお前強いのか？さっきからデカイ声ばっか出してさー」

「何ですとー！」

「!？」

突如千次郎の顔に何かが当たった。

「痛っ！って何だお前！バツタみたいだな？」

「バ、バツタ!？」

「そんなバツタな！ゲフェフェフェエ！」

突如現れたバツタのような宇宙人に界王がまたシャレを言い始めた。

「界王様それ面白くないよ。それ」

「ふんどうせお前には分からんわい！」

それを千次郎が否定すると界王がいつも通りに不貞腐れる。

「全宇宙の頂点に立つー界王様にーお前本当に強いのか」となどと抜け抜けと無知にも程が

あります！笑っている場合ではございません界王様！」

「ああすまんすまん丁度いい千次郎。バブルス君次はその「グレゴリー」が相手だ」

「でも俺界王様にまだ武術教えてもらってな「お任せください！界王様！此奴の鼻柱を

へし折ってやろうと思えますがいかが!!」

千次郎の言葉を遮るかのようにグレゴリーは界王に千次郎の修行の相手を懇願した。

「よかろう。ほれ千次郎！」

グレゴリーの返答と共に界王は手からハンマーを取り出して千次郎に投げつけた。すると、

「あらよっと。っうわあー！」

何とこのハンマーとても重いではないか。何とか持ち上げようとするのがやつとのことだ。

「いいか千次郎。今度の修行はこのハンマーを使ってグレゴリーを叩き落とすのだ」

「よし！やってみるよ！」

「ふん君みたいなヘナチヨコに私が捕らえられるものですか！」

その瞬間グレゴリーは体を丸め千次郎に向かって行った。

「よっしゃ！向こうから来てくれたぜ！」

そう言いながらグレゴリーにハンマーを振り落とすが、

「ふん遅い」

「え！」

何とハンマーを振り落とす前にグレゴリーは千次郎の背中にいたのだ。

「うわあ何て速いやろーだ！そーれ」

もう一度ハンマーを振りかぶって落とすとした。

「ふん馬鹿が」

それに対してグレゴリーは千次郎に向かって掌を向け波動を飛ばした。

「わっ！」

波動をまともに喰らったため尻もちをついてしまった。

「さあどうしたのですか！早く私を捕まえない限り私は君を攻撃し続けますよ」

「く、くそつたれ!!」

グレゴリーの挑発に腹が立ち千次郎はハンマーを持ってもう一度立ち上がった。



それから約10日後……。

あんなに美しく綺麗だった界王星は今ではお世辞でも綺麗と言えないくらい穴や倒木が

落ちていた。それに、

「うおりゃー！」 ブンッ

パリンッ

「ぶふううう!!まさか!」

まるで噴水のようにコップに入っているお茶を噴き出した界王は急いで外に出ると車の窓に何と

大きな穴が空いていたのだ。

「くっ元気でよろしい・・・ううう」ツ

「ウホッ?」

本当なら今すぐにも袋叩きしたいが修行中なので口出しするところが出来なかった。折角大事に

している愛車を壊され涙を流しバブルス君の背中でその涙を拭く界王。

「うおりやー!」ブンッ

「うりやー!」ブンッ

「はっ!!」ブンッ

千次郎がハンマーを振るたび木が倒れ地面には穴が空き、その光景をただ見つめることしか

出来ないバブルス君。

「ええい!やめやめやめろー!!」

「え!?!」

「か、界王様?」

突然割って入れられびっくりしている千次郎とグレゴリー。界王はハアハア言いながら、

「休憩、休憩じゃ!」

つと二人に休憩を言い渡した。

「ヤッホー!休憩だー!」

拳を高々と天に上げ、喜びを出す千次郎。鼻歌を歌いながら家に入っていく千次郎を見て

グレゴリーはきよんとしていた。



「あむあむふがふがふーふーあむあむ!!」

「………あぁ」

「ウホー!」

「ハァー相変わらずよく食べる奴だ」

相変わらずの暴飲暴食に呆れている界王だがそれを初めて見るグレゴリーは驚きのあまり顔が

隠せなかった。

「千次郎。この星の重力は克服出来たが問題はスピードだな」

「あむあむ大丈夫大丈夫すぐに慣れるし……あむあむ」

「そんな調子だったらサイヤ人に敵わないぞ」

いつも通りに楽観的に考えていると界王が一喝した。

「そうだ!前から聞きたかったけど界王様ってサイヤ人の過去とか知ってるの?」

「ああ知ってるぞ」

すると持っていた箸をバンツと置いて、

「界王様!サイヤ人の過去知ってるの!」

「そうだが………知りたいのか?」

「ああ!何でサイヤ人が俺の地球にやってきて人類を死滅させるのかなァーと思つて……」

いつものへらへらしてる時の顔ではなく真剣な顔で界王を見つめる千次郎。界王は水が入っているコップを持ってグイツと一気に飲むとゆっくり語り出した。

「いいか……まずサイヤ人も昔住んでいた星があった。その名は『惑星ベジータ』。しかしその星には

二つの種族がいたのだ」

「二つの種族?」

「そうだ。一つはサイヤ人。二つは『ツフル人』という者達が惑星ベジータに住んでいたのだ……」

惑星ベジータはこの界王星と同じで強い重力がかかった星でツフ

ル人は体が半分サイヤ人の

ような奴らだった……一方サイヤ人は非常に少数な民族で  
なあ強くてとても好戦的で

原始的な戦士だった。その戦士達がある時牙を向いた。ツフル人は  
自分達が編み出した最先端の武器で対抗するがメチャクチャ強く  
て徐々にツフル人を制圧していったのだ。そして決定的に

なったのは惑星ベジータが八年に一度迎える満月でツフル人が最  
も多く脅威でなおかつダメ押しだったのだ。サイヤ人が怪物に変  
身するからだ。そしてサイヤ人は惑星ベジータの全てを制した  
のだ」

「え!?滅ぼしたの?」

「ツフル人を絶滅させてしまったため、それ以上の高度な文明を発達  
させるの遅らせて

しまったのだ。そして高度な文明を持つ宇宙人と手を組み大金を  
手に入れ、それが徐々に

エスカレートしていき何と赤ん坊まで色々な星に送り込んだのだ」  
「な、何て自分勝手な奴ら何だ!」

「しかし惑星ベジータはある者によって破壊されてしまったのだ。だ  
がサイヤ人の中でも唯一

生き残った者が三人居た。しかしお前がその内の一人を倒したか  
ら残り二人だ」

界王が話し終わると千次郎は握り拳を作って俯いていた。

「くっ、何て酷い奴らなんだ……界王様!俺絶対地球を守る!ぜつ  
てえー!」

おい!バツタ!修行再開だ!」

「ちよ、ちよっと!後私はバツタではありません!!」

千次郎はハンマーとグレゴリーを引きずって駆け出した。

「俺がやらないと……俺がやらないと……サイヤ人の  
好き勝手に何かさせて

たまるかってんだ！」

「おーいもういいかい！」

「あぁどつからでも来やがれ！」

ハンマーを強く握り締めいつでも振り下ろせる体勢に入っている。

「では……行きますよー！」ビューン

そう言うとグレゴリーは体を丸め千次郎に突進しに来た。すると  
たちまち千次郎の懐にまで

近づいた。しかし、

「遅せーよー！」ビッ！

「何ですと!?!」

何と瞬間移動の様に速く動きグレゴリーの背中へと回っていた。  
そしてハンマーを振り落とした。

「いっけーいっけーいっけー!!!」

するとコンクリート<sup>!!!</sup>を打ち砕くドリルのような音がたちまち界王  
星に響き始めた。グレゴリーは  
どうなっただろうか。

「ハア……ハア……危ない」

ギリギリ避けていた。それほど千次郎が速かったのか。すると千  
次郎はグレゴリーに目掛けて、

「うおりゃー!!」ブンッ

ハンマーを投げた。

「わぁー!何てことをするのです!」

グレゴリーは激怒するも千次郎は、

「うるせえー!!早くテメエの捕まえなきや次に進めねえんだよ!」

つと言い返した。サイヤ人が来るまで後108日後。それまでに

グレゴリーは捕らえられることが  
出来るのか。急げ！千次郎！！

ついに奴らがやって来た・・・!!

「おい！グレゴリー！そろそろ本気出せよ！」

「な、急に凄くなつてどうしたんだい！」

突然物凄いスピードでグレゴリーを圧倒する千次郎。グレゴリーは驚きのまた驚きである。

二週間前界王が千次郎にサイヤ人の歴史を話して以来前とは違い凄まじいスピードで

グレゴリーを追い詰めているのだ。

「うおりゃー！」ブンツ

「つつっ!？」

いつもギリギリまで追い詰めハンマーを振り下ろし、それをいつもグレゴリーに

避けられてしまう。

「ハアハア・・・何て凄い奴だ」

逃げても逃げても喰らいつく千次郎に肩で息をしながら逃げるグレゴリー。かなり体力を

消耗しているが千次郎も同じだ。

「早くアイツが来るまでに動かねば・・・」

呼吸も落ち着き千次郎がやって来るかもしれないので逃げようとしたその時、

ブンツブンツブンツブンツ!!

「!？」

まるで空気を切り裂くような音が聞こえて来たので思わず顔を上げるとなんと千次郎が持っていたハンマーが円を描きながら自分のすぐ近くまで迫って来ていたのだ。

「何ですと！また投げてきたのですか！ですが明らかに無謀です！」

しかし1回やられた戦法なのでいとも簡単に避けられてしまった。だがグレゴリーはまだ

千次郎の戦法に掛かっていた。

「バーカ！引っ掛かたな！」

「!?」

何と界王星の裏から千次郎が走って来たのだ。千次郎はグレゴリーに向けて投げたハンマーを受け取り、

「さあ覚悟しろ！グレゴリー！」

「わあ!!」

グレゴリーに目掛けてハンマーを振り落とした。



「うわああああ！痛い痛い……ってあれ？全然痛くないぞ？」

「やっぱり思い切りやったら痛いもんな」ペチンツ

本気でやったかと思ったが力を抜いてペチンツとグレゴリーの頭にハンマーを当てた千次郎。

「ふふ。君甘いのですね。私の体は岩よりも堅いのですよ」

「見栄を張るなってグレゴリー。頭にたんこぶが出来てるぞ」

「え！あ！痛ててて！」

「ハハハハハハ!!」

岩よりも堅いと言い見栄を張ったグレゴリーだが頭にたんこぶが出来ていて痛そうに手で

たんこぶを抑える。それを見ている千次郎は大きな声で爆笑している。

「おーい！界王様！約束通り修行してくれよ！な！」

「分かっておる。だが覚悟しておるだろうがわしの修行を想像以上に辛いぞっ!!!」

「耐えられるかっ!!!」

「何度も言ってるじゃん界王様。俺は絶対辛いことでも耐えられるっ

て」

「そうか．．．．相変わらず能天気な奴だ。だがどうせ目指すなら宇宙一じゃっ!!!」

天下一じゃっ!!!肉体も!!!そして心もだ!!!よいなっ!!!」

「分かった!!」

「その前にちよつと茶でも飲むか．．．」

「ズコーツ!」ズシーン!

遂に界王直々に修行を受ける千次郎。界王がお茶を飲んでいる間はとても長く感じた。

たった数十秒くらいの時間が数時間のよう。しかしサイヤ人は刻一刻と地球に向かっていった。



それから何日経ったのだろうか．．．。界王との修行も最初はボロボロにまでやられていた

千次郎だったが今では見間違えるかのように逞しく見える。今千次郎は庭に寝転び

ウトウトしていた。そしてウトウトしている時にボソツと何か呟いた。

「ああ。もし生きていたら今頃何してるんだろうなあ」

そう千次郎は死ぬ前にラディッツというサイヤ人と戦った。結果は勝利したが戦っていた時に重傷を負いそのまま死んでしまったのである。そしてそのまま魂だけになって天国に行くと思ったら界王が閻魔大王に頼み、肉体もろともくつついたままあの世にやって来た。そして半年もかけて進んだ蛇の道を辿るとそこには界王が住んでいる界王星があり涙を流しながら弟子入りを申し

数々の試練を乗り越えていった。そんなことを少しほくそ笑みながら考えていると、

「おーい！千次郎ー!!」

界王が大きな声で千次郎を呼んでいた。

「ほんと……相変わらず鼓膜が破れそうだぜ……よっこらせ」腕に体重をかけて立ち上がり、界王の方へと走り向かう。

「今日でお前との修行もこれで最後だな千次郎」

「そうだな……界王様」

「シヤレの勉強はちーつとも足らんかったが、だいだいのことは教えた筈じゃ」

「ああ」

「最後の修行は今までの復習だ。おーいバブルス君！」

「ウツホツホ」

「よしバブルス君。千次郎の隣に立ってくれ」

界王の言う通りにバブルス君は千次郎の隣に立った。バブルス君が立った事を確認すると

ストップウオッチを取り出した。恐らくタイムを測るのだろう。

「準備はいいか千次郎？」

「ああいいよ」

「そうか。それではよーい始めー！」

「ウホッ！」

界王の号令と共にバブルス君は勢いよく走り出した。が、



「たっ!!」

「ウギャ!?!」

まだ始まったばかりなのに千次郎はもうバブルス君の後ろにいる。そして素早く両手を広げ

バブルス君を捕まえた。

「タイムはっ!」

「れ、0.8秒!?!し、新記録じゃ!」

ストップウォッチは1秒も差さないまま止まってしまった。恐ろしい速さだ。

「っ、次グレゴリー!」

「ウツホツホ」

グレゴリーの修行ではハンマーを使っていたためバブルス君は千次郎にハンマーを渡した。

「ありがとうバブルス。いいよ界王様」

「いくぞ・・・よーい!始め!」

「よしっ!行くぞー!」

グレゴリーもバブルス君と同じで勢いよく飛んだ。が、

ビッ!

「え!」

「捕まえた」ペチンツ

千次郎は瞬間移動ですぐグレゴリーの後ろに着きグレゴリーの頭を前回と同様ペチンツと叩いた。

「タイムは?」

「い、1.2秒!?!信じられん!」

またもや新記録を叩き出し界王は千次郎の成長に驚きが隠せなかった。

「では最後に“元氣玉”のチェックと行こうか」

「オツケー界王様」

元氣玉とは何だろうか。千次郎は手を力一杯天に上げた。

「はあああああああ．．．．．!!」

すると界王星が少しずつ揺れ始めた。そして千次郎の体中に白い気が纏わりつき始めた。

「はあああああああ!!」ブーン

白い気はやがて指先、足先まで行き渡っていった。

「よしーいいよ界王様」

「うむ。ではゆくぞ。この大レンガの超スピードを見事捉えてみろ！」

「うんっ！」

「そりゃっ!!!」ブンッ

界王は念力で動かしていたレンガを千次郎に向けて投げた。もし当たれば即死は間違いない

だろう。しかし千次郎はゆっくりと体を動かして避けた。

「はいーっ!!!超スピード!!!」

そして超スピードが出た。肉眼ではもう捉えることは出来ない。耳に聞こえるのもうキーンとしか聞こえない。千次郎は目を瞑りながら集中し耳鳴りが少し小さくなった瞬間目を開き、

「やっ!!!」キューーン

レンガに向けて元気玉を飛ばした。元気玉はそのままレンガに見事的中し、

ズアド．．．ン!!

まるでダイナマイトが爆発したような音を出して粉々に砕け散った。

「よっしやっ!!」

「おお．．．．．!!あ．．．あっさりとまあ．．．」

界王は口をぽかーんとおもちやを取られた子供のようにはしゃいでいた。

「見事だ千次郎!ここまで見事に元気玉を使いこなせるとは正直思わなかったぞ」

「そ、そうかなあ……まあ苦勞したもんなあ」

界王に初めて褒められたので頬を赤くし、照れていた千次郎。

「何度もくどくいうようだが元氣玉は草や木、人間や動物……はては物や大氣に至るまでの

あらゆるエネルギーをほんの少しずつ分けてもらいそれを集中して放つ技……こんな小さな

星の元氣玉ですらあの破壊力じゃ……」

「お前が闘う地球は……ことは比べもんにならないほどの大ききじやそして巨大なエネルギーをもつ

太陽をも味方に出来る……とんでもないパワーをもつ元氣玉じゃ……へタをすれば守るべき

自分の星ですら破壊してしまいかねん……出来ることなら使うな！どうしようもなくなった時に

のみ1発だけ使うことを許す……よいな……」

「うん！分かった。大丈夫界王拳だけできつとなんとかしてみせるよ」

「さあていよいよ決戦の日が近づいて来たぞサイヤ人たちはあす地球に降り立つ……あっ!!しっ!!!しまったあゝ!!!」

「っ!?!どうしたんだよ界王様!デカイ声なんか出して」

突然また界王が耳の鼓膜が破れそうな声を出したので耳を抑える。

界王は慌てながら千次郎に

こう言った。

「お……お前が蛇の道を通って帰る時間を計算に入れていなかった……」

「そうなの……ってええー!!かつ界王様なら俺のことビューンって下界まで飛ばせるん

じゃないのっ!?!お、俺またあの道を通って帰るわけ!?!く、来る時半年も

かかったんだぜ!!」

「い、いまのお前なら2日も有れば着く!!地球の神に向かえに来るように伝えておいて

やるから!」

「そ、それだつて1日オーバーだ!!!みつ、みんな殺されちゃうよ!!!」  
「ガタガタいうなっ!!わしだつてたまにはミスぐらいあるわい!!さあ  
!早く地球の仲間に」

ドラゴンボールを使って生き返らせてもらえるように伝えろ!!!」

「ま、待って!界王様……」

「な、何じゃ!!早くしろ!時間が無いぞ!」

「俺……友達なんていないんだけど……」

「……へ?」

突然の告白に……となつてしまった界王。しかし千次郎は続けて  
言う。

「嫌だから俺……友達なんていないんだつて……昔少しヤンチャだつ  
たから。それに俺達がいる

地球にはドラゴンボールという物は存在していないんだ」

頭を掻きながらいつもとは違うオドオドした感じで喋る千次郎。

それを聞いた界王は最早

呆れてしまい、

「……もういい。後でそれは考えよう。その前にまずそのダサ  
くてボロボロの服を何とか  
してやろう」

「わ、分かった」

そう言うとき王は帽子の触覚を動かし始めた。

「ほれ」ピッ

すると千次郎が着ていたボロボロのパーカーとズボンそして靴が  
全部変わり山吹色の道着と

その下に濃紺色のアンダーシャツと道着を結ぶ時に使う帯そして  
ブーツ。両手首には青色の

リストバンド。道着の胸には「青」と書かれている。

「あっ!!すっげえ何だかとても軽くなった!!!それに道着なんて初めて  
着るや」

「軽いだけではないぞ。素晴らしく丈夫な布で作つてある。少しぐら

いの攻撃など

跳ね返してしまう」

「サンキュー界王様！」

道着や靴まで用意してくれたので千次郎は感謝の気持ちで一杯だった。

「あれ？こんな所にマークが付いているぞ？なにになに・・・」青？ああ！俺の青田からか！」

胸に付けられているマークを見ているだけで笑顔満開である。でももしかしここで余計な事を

言うのが千次郎である。

「俺もし界王様のような服だったらかっこわりーなーなんて心配しちゃたよ」

「・・・悪かったな・・・」

ほら。界王が不機嫌になったでしょう。こういう人間なんです。この作品の主人公青田千次郎は。

「あー何で生き返れないのかなあ〜！」

早く生き返りたくてたまらなく駄々をこね始めていた千次郎を界王は後ろから

ニタニタ笑っていた。

「お前にとつちやカツコ悪いかもしれんがわしにとつてはカツコいいのだ」

そう界王が後ろから見ているのは千次郎が着ている道着のマークだった。胸には「青」と

描かれているが後ろの背中には「界王」と描かれている。界王が後ろからニタニタ笑っていたのはこれだったのだ。そんないざこざをしているとハツと気づき、

「おい千次郎!!もう服を直したからそのまま急いでゆけ!!!」

「あっ!!本当だ!はいっ!!!」

珍しく丁寧な返事をする千次郎。

「よいな敵は想像以上に強力な悪人たちだ!!一瞬の油断も許されんぞっ!!それにまた

生き返れるさなどと思うんじゃないぞ!!」

「大丈夫! 例えドラゴンボールがあつても生き返れるのは1回きりだしまあ目一杯

やってやるよ!!」

準備体操も済んだしそろそろ行こうかと考えて足を動かそうとしたがふと足を動かすのをやめて

界王の方へ振り向き、

「いろいろありがとう界王様。もし死んじゃったらその時はまた会いに来るよ!」

感謝の言葉を述べた後足に力を入れてパンつと大きく跳ね上がった。

「じゃあなーっ!!」

その瞬間界王星から大きく飛び跳ね蛇の道まで飛んで行った。その光景を見ていた界王は

頬を緩ませ、

「なんとまあ底知れぬ強さを持つ奴じゃ……しかも心は前とは違い水晶より透き通って

おる……あんな奴が下界におったとはもう……かしわしのユーモアのセンスは

全然じゃったな……そのところはまた来たら教授してやろうか……千次郎……

地球を……未来を……頼んだぞ……」

手を交わらせ果てしない北にお祈りを捧げる界王。どうか千次郎がこの地球の未来を

救ってくれるようにと。

「あいつ界王様よりも強くなりましたね界王様?」

「ああそうだなグレゴリー」

「ウツホツホウツホツホ」

またこの日の間2人の仲間も千次郎の成長をちゃんと理解した。そして2人もまた界王と同じく

果てしない北にお祈りを捧げた。

「うひゃー！ー軽い軽い!!身体が綿毛のように軽いぜーっ!!!」

一方千次郎は身体が前より凄く軽くなっているので感激していた。  
「つてー感激してる場合じゃねえな!!急がねえと!!!」

つい感激していたので思わず足を遅くしていたので千次郎は舞空術でぐんぐんと蛇の道を  
飛んで行った。

■  
ここは大洗町である。今大洗町は活気に溢れていた。

「頑張れー!大洗!」

「俺の所に戦車をぶつけてくれー!補償金で建て替えたんだ!」

観客席から聞こえる歓声はモニター越しに伝えられていた。今大洗町では戦車道の練習試合が

行われていた。相手は四強の一つ聖グローリアナ女学院である。  
ルールは殲滅戦で両車後一両と

いう状態だった。

「うわあ!?後残っているの私たちだけだよ」

「ここでケリをつけるであります!」

「みほさんどうしますか?」

「……早くしろ時間が無いぞ」

「そうだね。麻子さん今からエンジン全開で相手戦車の後ろに回って

下さい。華さんは回った

後に速やかに攻撃して下さい」

あんこうチームの皆は作戦を取り合っていた。あんこうチームの戦車はIV号戦車で車長は

西住みほ。通信手はコミユカがお化けの武部沙織。砲手は華道を嗜んでいた五十鈴華。

装填手は戦車マニアの秋山優花里。運転手は朝に弱い優等生冷泉麻子で組んでいた。

大洗女子学園にとっては唯一まともなチームがあんこうチームだけなので期待が寄せられていた。みほは作戦を伝え終わると咽喉マイクを離し、

「では作戦を開始します。戦車前進!!」

みほの合図と共にIV号戦車が動いた。IV号戦車はみるみるスピードを上げていく。

「麻子さん。そこぞー!」

そして麻子がブレーキをかけてカーブした。IV号戦車は見事に聖グロのチャーチルの装甲に

近づいた。戦車にとって装甲を狙われると非常に厄介である。そして向こうもそれは理解して

いるため砲身をこちらに向けてきた。

「撃て!!」

みほの合図と共に砲弾が発砲される。チャーチルもほぼ同時に発砲したため煙に包まれる。

果たして結果がどうなったか。煙が無くなって見えたのはIV号戦車からの白旗がだった。

ということは大洗女子学園は負けが決定したのである。あんこうチームのは負けたことが

分かった瞬間全員が顔を俯いた。『悔しい』。この言葉だけが自分達の頭に響いていた。でも

このまま俯いても仕方ないのでみほが戦車のハッチを開けようとしたその瞬間、



ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

!!!!!!!!!!!!!!

突然地面が揺れ始めたのだ。しかもかなり揺れている。

「きゃあ！何！地震?！」

沙織は突然の出来事にパニックになっていた。

「落ち着いて沙織さん！動いたら危ないから」

「そうです武部殿落ち着いて下さい！外に出たら危ないであります！」

「落ち着いて沙織さん」

パニックになつて外に出ようとする沙織をなんとか必死に止めているみほと優花里と華。でも

この恐怖から逃げ出したいという意志を諦められない沙織はどうとう3人の手を薙ぎ払って

ハッチを開けてしまった。

「沙織さん！」

みほが止めようとするも沙織は外に出てしまった。みほは沙織をパニック状態なので外に出たら

どこかに行くかもしれないと思い自分も外に出てしまった。

「ま、待って下さい！西住殿！」

「みほさん待って！」

そんなみほを放つて置けないと優花里と華も外に出て行った。



「沙織さん！待って!!」

みほは外に出て沙織を追いかけてしようとした。だが沙織は何と目の前にぼつんと立っていた。

「沙織さん！大丈夫!？」

みほは急いで駆け寄り沙織の様子を伺った。すると沙織はみほの

方を見るとゆっくりとこう呟いた。

「みぽりん。空から何か降って来てる」  
「????」

沙織はゆっくりと手を空に上げて指を差した。何かかと思いきほも顔を沙織から空へとゆっくりと向ける。すると思いがけない光景を目に映した。何と空から2つの流れ星の様なものが

こちらに向かって降って着ているのだ。後から来た優花里と華も沙織が手を空に上げていたので

2人も空を見上げた。そしてその2つの流れ星は段々次第に見えてきて丸い形の様な物に

見えてきた。すると沙織とみほは顔を見合わせて、

「ここから離れよう」

「うんそうしよう」

ここから離れようと考え優花里と華に避難を知らせた。優花里と華も素直にこれを受け入れて

IV号戦車に乗っていた麻子にすぐエンジンをかけてと言い移動を試みようとした。しかし

2つの丸い物はみほ達が避難しようとした瞬間物凄く着陸音を鳴らして漂着した。みほは急いでハッチを開けて双眼鏡で漂着した丸い物を確認した。しかし煙が凄くてよく見えない。

そしてようやく煙が上がったのでもう一度双眼鏡を除くと信じられない光景が目映った。

「え!?人が出て来た・・・」

何と2つの丸い物から人間が出て来たのだ。

午前11時43分ついに地球は2人のサイヤ人の侵入を許してしまつた!!!!

次回!!サイヤ人編開幕!!!!

## サイヤ人襲来編!!

### STAGE 1 サイヤ人大洗に来たる!!

「え!?人が出てきた・・・」

みほは双眼鏡で漂着した2つの丸い物体を確認していたら何と中から人が出て来たのだ。それを見たみほは更に焦り急いで地図を出した。地図を広げて丸い物体が漂着した場所を探すと

大洗磯前神社近くだということが分かった。自分達は 大洗町役場前にいるのでひとまず安心した。しかし距離は遠いという訳では無いのもつとスピードを上げるよう操縦手の麻子に伝えた。

そして自チームの皆と聖グロのメンバーにここから離れるようにと通信手の沙織に伝えた。突然降ってきた丸い物体を見たみほは何故か背筋が凍った。もしかすると何か大洗に危機が迫っているのかと思ひ固唾を飲んだ。

「急いで・・・急いでここから離れないと・・・何か起きる・・・」  
不運にもこの思い込みが現実になるとはまだ知らないみほであった・・・。



一方ここは慎也とナツパが乗っていた宇宙船が漂着した大洗磯前神社近くである。突然空から

変な物が降ってきたので近くに住んでいる住人達は何事かと思ひ外に出て漂着した物を見に行っていた。

「な・・・何だ・・・あの丸いのは・・・」

「もしかして宇宙船なのかも知れないぞ?」

「そうだとしたら確認してみよう」

その中腕を組みながら話している3人組の男達は面白半分で漂着した場所へ降りていった。

男達は急いで宇宙船が降ってきた所に来ると2つの大きな穴が開

いていた。

「や、やっぱりだ・・・!!この丸いのは宇宙船だぞ!!」

「ほ、本当だ!しかも俺達より大きいぞ・・・!」

「お、おい!!こつちにもあるぞ!!」

男達は宇宙船が2個あることにとても驚いていた。もう一つの宇宙船を見に行こうとその場を

離れようとした瞬間、

ギイ・・・

「!?」

物音がしたので目を向けると宇宙船のドアが半開きになっていた。2人はドキツとしながらも

度胸試しだと言い宇宙船から離れようとしなかった。宇宙船のドアは段々開いていきすると中から地球人が出て来た。

「おい!!ひ・・・人だっ!!」

「人が出て来たっ!!」

「おいっ!!こつちにも出て来たぞ!!」

「何だっ!!」

1人だけだと思っていたがもう1人も居ると聞きようやく自分達が今とてつもない危機が迫って

いると気づいた3人組の男達は体をガタガタ震え始めさせた。一方ようやく地球に着いた慎也とナツパは宇宙船から出て外の光景を目の当たりにした。

「ふう・・・地球っていったな・・・まあまあな星じゃないか」

「そうだな・・・まあまずは目の前にいるこのぴーぴー五月蠅いひよ子共に挨拶してやろうかな・・・」

「ふん・・・優しくしろよあまり派手にやらかすところの星が高値で売れなくなるからな」

「へいへい分かってますよ」

そう言うとナツパは舞空術で空を飛び大洗町を見下ろした。しかし何故か煙で覆われて

よく見えない。

「何だこの星は？俺達が来るまで内戦でもしていたのか？」  
戦車道の練習試合とは絶対分らないのでどうやら内戦と勘違いしている様だ。

「だったら俺が戦争をしやすくしてやるっよ!!」  
そう言った瞬間ナツパはクイツと指を動かした。

ズアオ!!!

すると眩い光が大洗町を埋め尽くした。

「うわあ！眩しい！」

「おい！何か溶けてきてないかお前の・・・服!？」

「何言ってるんだ！お前の服もだ!!」

3人はグダグダ言ってるうちに自分の体も溶け始めていたことに気づいていなかった。そして段々光は更に眩しくなり辺りの家やアパートまでもが溶け始めた。周りの人々は突然の熱さに水を

かけたり海に飛び込んだりした。が、熱さは一向に冷まない。唯一熱さから免れていたのは戦車に

乗っていた大洗と聖グロの戦車隊だけだった。しかし彼女達も光からは逃げることは

出来なかった。

「何よーこの暑さは！一体外で何が起きてるの!？」

「恐らくさつき私達が見たあの丸いのが原因だと思えます」

「・・・・・・だとしたら早くここから離れないといけないな」

「みほさん大丈夫ですか？さつきからとても顔色が悪いですけど」

「ううん大丈夫だよ華さん・・・」

あんこうチームもまたナツパが出した光に苦しんでいた。しかしみほだけは違う何かに

苦しんでいた。

「大丈夫な訳ないじゃんみほりん！凄く顔色悪いもん！」

「そうですよ私でもよければ相談して下さい!!」

「もしかして……さつき双眼鏡で覗いていた時に何か見たのですか?」  
「!?」

華の質問にビクツと肩を震わせるみほ。すると震わせながら声を出した。

「み、み、見ちゃったの……」

「何をですか?」

「あ、あの丸いの中から……人が……出て来たの……」

「?!?!?!」

沙織と華と優花里は口を抑えて驚いた。普段あまりそう言うのに興味がない麻子も体を震わせた。

「じゃ……もしかして今この変な光を出してるのってそのみぽりんが見た人達じゃないの……」

「な、何人いたのですかその人達は?」

「全部で……2人だった」

「2人……ですか?」

「……だとしてもここから離れないことは変わらないぞ」

「でも大洗の皆は……」

自分達だけ助かってても大洗町の人達を見捨てる事が出来ないみほであった。一方謎の光を

出し続けていたナツパは苦しんでいる大洗町の人達を見て笑っていた。しかしあまり続けては

慎也の言う通り高値で売れなくなる為、

「もうここらでいいだろう……くたばれー!!!」

グツと手を握り締めて光を潰した瞬間とてつもない音が大洗町に響いた。

ダウン

!!!!!!!

「うわあ!何……だ」

「体が……溶けて……きた……」

「俺……た……ち……死にたく……な……い」  
3人組の男は光が潰れた瞬間まるでサイコロステーキのように肉  
体諸共砕け散った。

大洗磯前神社は鳥居ごと溶け、周りの建物は吹き飛ばされ、大洗町  
立大洗小学校を囲むポールは

四方八方に飛び辺りに飛び散った。あまりにも突然の出来事なの  
で周り人々はろうそくのろうの

ように溶け、断末魔を上げもがき苦しんでいた。それはまさに阿鼻  
地獄だった。戦車に乗っていた大洗チームも戦車の装甲が溶け砲身  
がダラーんと溶けてしまっている。そして光は更に眩しく

なつた所でドカーンつと大きな音を出し爆発した。

「きゃあ!!」

大洗海岸病院まで逃げていたあんこうチームの所に凄まじい風が  
IV号戦車諸共跳ね飛ばした。

ナツパが光を潰した理由は簡単ただ闘う場所を作りたかった。た  
だそれだけだった。

「ふははははははっ!!ちよつと挨拶が少し丁寧になりすぎちまったか  
な!!」

ナツパは大きな声を出し、笑いながら荒れ果てた大洗町を見てい  
た。等々地球に着いてしまった

サイヤ人……。このままでは大洗町に住んでいる人々は死滅して  
しまう。早く逃げ!千次郎!!



けー  
ここは蛇の道。

普段は道路整備が見習い鬼達の仕事の通学にしか使わない道に1人の青年が物凄い速さで

飛んでいた。

「くそっ！まだ着かないのか!」ビューン

そう界王の修行を終えて今地球に向かっている千次郎である。千次郎は10年前に神の救いで

タイムリープしてしまった青年である。以前は一般人だったが千魔という10年後に世界に災いを

もたらす怪物に血を与えられたため超人的な力を手に入れたのである。今千次郎は地球に向かっているのだがまだ死人なので神に生き返らせてもらわないと下界に降りることが出来ない。だから

まずは神と会わないといけない。

「地球の神か・・・どんな人なんだろうなあ・・・俺と同じ頭に輪っかが付いていたりして!

フフフ・・・ハハハハ!!」

もし神が地球人でも人間でもないと思ったらどう思うだろうか。多分幽体離脱するほどびつくり

するだろう。しかし千次郎はもうサイヤ人が地球に来ていることはまだ知らない。

「はっ！そんなこと考えてないで早く地球に向かわないと!!」

一旦違うことを考えると目的が変わってしまう性格なのでさつきより早く進み始めた。

何としてでもこの地球を救わなければならない！急げ！千次郎!

「堪えてくれ・・・地球の皆・・・!」

STAGE 2 仲間《友》は助ける！あんこうチー  
ムの決意と多田修平の後悔その1

「この馬鹿者が！」バキッ  
「くっ！」

突然ナツパの頬に慎也の鋭いパンチが入った。

「優しくしろと言った筈だ。なのに何故俺が目を離れた隙に街を半壊させているんだ！」

「そ、それは……」

「言い訳するな！」パンツ

言い訳を始めようとしたナツパに平手打ちをした慎也。

「つたく……貴様のせいでの星の値段が下がれば…… // 殺すからな」

「わ、わかった!!今度から気を付ける!本当に!」

頭を地べたに付け詫びを入れるナツパ。その行動を見ていて慎也はため息をついた。

「お前が派手なことをするからまた何か来たじゃないか……」

目を向けるとかなりの数の武装集団が自分達に向かって来ていた。

「フッフ……地球人の奴らは馬鹿の集まりが多いようだな……」

「ナツパ……今度はちゃんと優しくしてやれよ」

「おうよ!!」

そう言うとな両手の拳をくっつけて骨を鳴らすナツパであった……



「うーうん……ここは……?」

私が目を覚ました場所はベッドの上で何かと周りかうるさかった。何処にいるのかと思わず

体を動かそうとすると足にビリッと痛みが走った。よく見ると足に沢山の包帯が巻かれていた。

沙織さん達はどうしたのだろう。そう思いながら隣にあるナースコールを押した。押した数分後

1人の看護師さんが来てくれた。

「大丈夫ですか!？」

看護師さんは慌てた様子で私の容態を聞いてくれた。大丈夫と言うとようやく落ち着いていた様子でハッと息をした。先生を呼んで来てくれた。私は先生に一体何が起きているのか聞いてみると

先生は顔を真っ青にしてこう言った。

「怪物《バケモノ》がやってきた」

そう言う私はハッと思い出した。そう双眼鏡で覗いた時に見たあの人間だと。そう思いながら

私は一緒に戦車に乗っていた人達はと聞いてみると先生は看護師さんに呼んで来てくれと言い

看護師さんは何処かへ行った。数分後ダツダツとかなり大きい足音を鳴らしながらドアが

開かれた。

「みぼりんー!!」

「みほさん!!」

「西住殿!!!」

「……大丈夫か?」

皆があんこうチームの皆が来てくれた。生きていたんだ。そう思うと私は思わず涙が溢れた。

そして沙織さんと抱き合って声を上げてしまった。そして落ち着いて皆の顔を見ると皆顔に絆創膏や包帯が巻かれていた。私よりは軽傷だと看護師さんが言った。そう聞いた途端胸を撫で

下ろした。皆が重傷を覆っていなかったのだと。でも私は病院に

運ばれるまでは全く覚えて

いなかったのでその事を沙織さんに聞いて見た。すると沙織さんは次の様に伝えてくれた。

あの人達が出した光が消えた瞬間どうやら私達は戦車諸共飛ばされたらしい。そして皆はすぐに

目を覚ましたらしいけど私はピクリとも動かずにグツタリしていたらしい……。皆恐る恐る体を触った時に足から血が噴水の様に出ていて皆慌てて私を担いで病院まで運んで今ここに居ると

私は何故病院にいるのかだいたい理解した。でも何故こんな様に外がうるさいのだろうか。

他の皆は大丈夫なのだろうか。これだけはどうしても頭から離れることが出来なかった。

皆にそれを聞こうとした瞬間、

「おーい西住ちゃんー！」

「!?」

「か、会長ー！」

何とあの会長がいたのだ。頭に包帯を巻いていて腕には添え木が巻かれている。そして後から

河嶋さんと小山さんそれにカバさんチーム、アヒルさんチームがやってきた。皆顔に絆創膏が

貼られていた。特に河嶋さんなんて眼鏡が割れている。本人は大丈夫だと言っているが心配だ。

だけど私はここで違和感を覚えた。ウサギさんチームがいない……。沙織さんがウサギさんチームは？と聞くが誰も見ていないと言っている。もしかしてまだあの怪物《バケモノ》達の所に

いるのでは！そう思った私は足が痛むがベッドから起き上がり、病院の外へと走り始めた。

看護師さんには手を握られかけたがその手を振り解き走り続けた。そして病院の外に出た私は肩で息をしながらもウサギさんチームの皆のために足をもう一度動かそうとしたその時、

「待ってみぱりん!!」

「みほさん待って下さい！」

「お待ち下さい！西住殿!!」

「・・・待てと言ってるだろ」

後ろからあんこうチームの皆が来てくれた。何で来たの？私は皆に言った。そしたら、

「だってみほりん！1年生の皆を助けに行こうとしてるでしょう!？」

「それだったら私も協力しますよ！」

「私も西住殿とお供するであります!!」

「そんな足じゃ走れないだろう、ほら肩に腕を置け」

「皆・・・」ポロツ

私は思わず涙が止まらなかった。目から雫の様に溢れて私は手で拭ったけどまだ溢れる。

皆は泣かない泣かないと肩を摩ってくれた。やっと涙が止まり、私は皆と顔を合わせて

こう言った。

「絶対皆死なずにここに帰ろう！」

そう。あの時10時連覇を逃して絶望していた私に希望の光を与えてくれた人のように・・・。

「はあ・・・はあ・・・はあ」

俺の名前は多田修平《ただ しゅうへい》。今さつき空から降ってやってきた宇宙人に喧嘩を

売っている所だ。俺は生まれてからずっと大洗町で過ごし普通の生活を送っていた。もちろん地元の仲間も皆一緒だ。そしてある日

朝からゲームをしていると友人から電話が掛かってきた。

「どうやら今年うちの学園艦が戦車道を再開したらしい・・・だから一緒に観に行かない？」と友人はそう言った。もちろん答えは決まっている。OKだ！そして今俺は、会場で観戦していた。

なんせ数十年ぶりだと聞いたので気分が高揚した。そして、いよいよ両校1台ずつとなり先に

うちが攻めた。うちのIV号戦車は綺麗に相手戦車の装甲に近づき攻撃した。

「行けー!!」

俺の普段では滅多に出さない大声が会場全体に響いた。果たして勝敗どうなのか。すると

審判席からアナウンスが聞こえた。

『大洗女子学園！全戦車行動不能！よって聖グロリアーナ女子学園の勝利！』

負けてしまった。観客はアーだグーだ言ってるがほとんどの人が試合を褒め称えた。俺は試合が

終わったので地元仲間と一緒に帰ろうとし荷物まとめていたその時、

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ  
!!!!!!

突然とてつもなく大きな地震が大洗町を襲った。俺はすかさず頭を背負っているリュクサックで守った。地震はすぐ止み揺れもすぐおさまった。

「何なんだ。さっきの地震は・・・」

リュクサックを頭から離し、俺は辺りを見回した。あんなにさつきまで活気溢れていた会場は

シーンとして辺り一面ぐじゃぐじゃだった。俺は後から混乱に巻き込まれない様すぐに離れようとしたその時、

「あれ？辻本達がいらない！」

今日一緒に来ていた辻本とその友達が居なかった。俺と辻本は昔からの友達でSFがとにかく

めちやくちや好きな男でUFOとかになると風の様になると何処か行ってしまうが約束事なのはしつかりと守る俺にとって数少ない親友だ。そんな辻本が俺に黙ってここから離れるなんて絶対有り得ない。俺はすぐ辻本に電話を掛けようとした。しかし辻本に電話は繋がらない。あいつ電源切って

やがる……。仕方なく俺は聞き込みをすることにした。聞き込みをして2人目の時突如誰かが

大きな声で叫んだ。

「おい!!空から何か降って来ているぞ!!」

「え!?!」

慌てて目を向けるとそこには二つの流れ星の様な物がこつちに向かって降って来ていた。その瞬間俺の頭のアンテナが何かを的中させた。

「アイツ……もしかしたらあの流れ星を見に行きやがったな……」

SF好きで好奇心旺盛の辻本なら必ずそこへ向かうはず……。そう思った俺はすぐ流れ星がここから落ちるのに最もの中する大洗磯前神社に向かうことにした。それから10分後……。何とか俺は、

大洗磯前神社に来ることが出来た。神社に向かうとやはり辻本達が出た。早く辻本達を連れて

ここから離れようとしたが妙に辻本達様子がおかしい……。何かあったのか?そう思い辻本の何処へ向かうとしたその時、

「おい!!ひ……。人だっ!!」

「え!?!」

辻本の友達が大きな声で何か叫んだ。え!人?おいおい笑わせるなよ。けどどそいつは叫んだ瞬間急に怯え始めた。もしかして本当にいるのか。

「お、おいっ!!こつちにも出て来たぞ!!」

もう1人の友達がまた別の流れ星から人が出てきたと言いだ始めた。俺はその言葉を聞いた瞬間

ここから離れようと思った。頭が命令してるじゃないんだけど体が逃げろと言っている。

ゆっくりとゆっくりとここから離れよう……。そう思った俺はゆっくりと足を動かした。辻本達にバレないよう。が、2，3ぐらい動いた瞬間何故か足が止まった。やっぱり友達を見捨てることが

出来なかった。自分だけ助かるなんてかっこ悪い。救助には自助・公助・共助があるが俺は共助を特に気にしていた。友達を見捨てることができない！やっぱり助けよう！そう思ったと同時に体が辻本達がいる方へ向かっていった。

(待ってるよ辻本！今そっちに向かうからな!!)

だけどこの行動が次の瞬間辻本達と自分の身がとんでもないことになるとその時は

思いもしなかった……。《続く!》



STAGE 3 え!? あんたが神様!? 千次郎、暁に散る!!

(待ってるよ辻本!今そっちに向かうからな!!)

そう思っているうちに俺は段々と流れ星が墜ちた穴であろう所に近づいていた。そして穴に入る

寸前大きく息を吸って俺は出来る限り力強く叫んだ。

「辻本ー!!!助けに来「五月蠅いぞ。ヒヨ子野郎」

「え!?.....」

すぐ振り返るとそこにはやけに髪の毛の先端がツンツンしていて鎧を着ていた少年が立っていた。見た目からすれば俺とほとんど歳が変わらないのにとても凶々しい気を放っている。俺は細い声を出しながら少年に聞いてみた。

「君は.....何者だ?」

「貴様ら地球人共にこの俺が名前を気安く教えると思っているのか?」

その少年は、やけに態度がデカく俺のことは見て鼻で笑っていた。少しムカつくが少年が続け様にこう言う。

「何しに俺達に近づいた。言え!」

「と、友達を助けに来たんだ。お、お前らが乗ってきた宇宙船を見にやってきた友達を.....」

俺は足が震えながらも勇気を出して聞いた。すると少年の顔からニヤつきが見え、

「あああのカプセル船に近づいた奴らか...そいつらなら俺が少し羨しておいてやった。ほれ」

そう言うとはやたら大きな塊を俺の方へ投げしてきた。咄嗟に受け取るとやけに重い。よく見ると

手には信じられない物が抱えられていた。

「つ、辻本!!」

「しゅ.....修平.....」

何と辻本が自分の手に丁度収まるように抱えていた。どうやらあの少年に痛めつけられたのか顔が凄く腫れている。

「どうして何もしていないのに暴力を浴びさせたんだ!!」

俺は顔を真っ赤にしながら少年に向かって叫んだ。すると、

「何そいつらは俺の質問に答える前に逃げたからだ。ほらよく見ろ。そいつの仲間が貴様の近くに

いるだろ?」

「あ!?!」

周りに目を向けるとそこには辻本の友達が辻本以上にメツタ打ちにされていた。2人共意識は

あったがすぐに動けるような体じゃなかった。そして俺はようやく理解した。この少年の質問にちゃんと答えないと・・・『殺されると。』そう思い俺は辻本を両手からゆっくり下ろし、手を挙げた。

「分かった。君の質問にちゃんと答えなかった辻本達に代わって俺が質問を答える。だからもうこいつらには手出ししないでくれ」

そう俺の行動を理解したのか少年はさっきのニヤつきからふと真剣な目つきでこう言った。

「そうか・・・なら俺の質問を聞いてもらおうか。貴様らが住んでいるこの地球に『青田千次郎』と

いう者がどこにいるか知らないか?」

「あ、青田千次郎?」

少年から語られた言葉に俺は全く理解が出来なかった。だって聞いた事のない名前なのだから。

「嫌知らない・・・初めて聞いた名前だから・・・悪いが他を当たってくれ。辻本。

担ぐから動くなよ」

「すまねえ・・・修平・・・」

辻本をおんぶしながら俺はここから離れようと足を動かした。辻本の友達も力合わせて立ち上がり肩を組みながら俺を後ろからついてき始めた。これで大丈夫だ。もう安心しろ。辻本達を

励ましながら俺は急いで病院に行こうとしたその時だった。

「誰がもういいって言った……!!」ビュン  
「!!?」

バキッ

「かはああ!!」バタッ

突如俺の腹に強烈なパンチが入った。しかもただのパンチじゃない。鈍い音と口から血が出た。

こんなパンチ今まで喰らったこともない……。あまりにも突然の出来事辻本達は啞然としていた。

「何でこんなことを……。ちゃんと質問に答えたじゃないか!?!」

俺は少年の意味の分からない行動に声を上げた。しかし少年はまるでゴミのような目で

俺を見つめ、

「確かに質問に答えてもらった……。だが何も知らないのなら貴様はもう……用無しだ」

「せっかく助かるチャンスが与えられたのに……。もういい。おいナツパ!」

「何ですか?」

少年が呼んだと同時に体が大きくて頭がスキンヘッドの野蛮人が出てきた。

「ここには青田という奴は居ないようだ。しかもし奴がここに来た時のためにちよつと

ここら辺を綺麗にしておけ。優しくな……。!」

「分かりました!」フワッ

そう言うとなツパと呼ばれていた野蛮人の体がフワッと浮き、瞬く間に一つの点になるまで

飛んで行った。

「一体何をするつもりだ!!」

「そうだそうだ。何するつもりなんだよ!!」

俺達は少年の肩を掴んで見て激しく問い詰めた。しかし、

「黙って見ているがいい」パンツ

「くっー」バタツ

少年はゴミを見るような目で俺達を見つめながらパンツと俺達を跳ね飛ばした。そして俺達は

跳ね飛ばされおんぶしていた辻本を離してしまった。

「辻本ー!!………っ………」ビリッ

俺は慌てて立ち上がろうとしたその時肩に物凄い熱さを感じた。よく見ると少年の指から光線が

出ていて俺の肩に貫通していた。俺は意識が朦朧とし、辻本の名前を何度も呟きながらそこで

俺の意識がシャツトダウンしてしまった……。



一方その頃蛇の道をただひたすら飛び続ける少年が居た。蛇の道の道路整備をしている者や

通学している者たち驚いていた。そして今閻魔大王が居る宮殿に

1人の見習い鬼がドアを乱暴に

開け入って来た。

「閻魔大王様ー!閻魔大王様ー!!………ハアハア」

「ど、どうしたんだ!そんなに焦りおつて……!」

いつもは余り焦らない見習い鬼が息を切らすぐらい焦っているの  
で驚いているようだ。

落ち着かせる為ソファーに座るように言うがこのままでいいと  
言った為言うのをやめた。

次第に落ち着いていくと突然パンツと机を叩きこう述べた。

「帰ってきたんですよ閻魔大王様!!アイツが!あの少年が!」  
「少年?」

「ほら!去年ラディッツというサイヤ人闘って一緒に死んだあの少年ですよ!」

「ラディッツ・・・?あ!あ!アイツか!確か・・・青田千次郎!!」

「そうです!その少年がさっき私の知り合いが蛇の道を通ってここに向かっていると

聞いたんですよ!!」

「そうか・・・千次郎の奴本当に界王星まで行ったんだなあ・・・  
だとしたら界王様にも

会っているは『失礼しまーす!!』!?!」

突如ドアが大きく開かれもう1人の見習い鬼が入って来た。こちらはまだ落ち着いていた。

「閻魔大王様。先程話していた青田千次郎が到着致しました」

「本当なのか『本当か!!!』!?!?」

閻魔大王は飛び上がるように椅子から立ち上がり大きな声を出してしまった。隣にいた鬼が

耳を抑える程ぐらい。

「はい。私が案内するので着いてきてください」

「おお!そうか・・・あの野郎どんだけ変わったか見てみるとするか・・・  
おい!お前も着いてこい!」

「は、はくくいくくっ耳が痛いよ!」

耳を抑えながら閻魔大王の後ろについて行く見習い鬼。



「・・・たった俺はこんな所で道草食ってる場合じゃないのになあー」

「まあまあそんなこと言わないで待っていて下さい。もう時期閻魔大王様が

いらつしやいますから」

一方ここは宮殿内のロビーのソファ―にちよこんと座っていた者がいた。

「あーもう！閻魔のオッサンはどこ行ってるんだよ閻魔のオッサンに会わないと俺は神様に

生き返らせてもくれないのに・・・」

そう千次郎である。界王星から無事宮殿まで戻ってこれたのである。何故今閻魔大王を待っている訳は千次郎はまだ死人なので一度神と会い生き返らなければならなかったため今こうしてロビーで

閻魔大王を待っているのだ。しかし1時間経っても閻魔大王は現れずただ一刻と時間が進んで

いくだけだった。そして流石に痺れを切らしたのかソファ―から立ち上がり閻魔大王が居る

大王室に向かおうとし始めた。

「もう我慢出来ねえ・・・俺から直接行って生き返らせてもらおうわ」

「ちよ、青田さん！もう少しお待ちくださいませ！」

「うるせえ!!一体こっちはいつまで待ってると思ってるんだ！流石にもう無理なんだよ！

こっちは!!」

何が何でも行こうとする千次郎を必死に止める見習い鬼達。しかしやはり界王の所で修行したためかどんどん押されていく。そしてとうとう最初に止めてくれた鬼も払いのけ、大王室に向かい

始めた。

「待ってください！青田さん!!」

見習い鬼の言葉を無視しそのまま歩いて行く千次郎。見習い鬼は千次郎の後ろ姿を見て

もう無理だと思い諦めたその時、

「お！前より遅しくなってるじゃないか千次郎!!」

「!?」

「え!!本当にあの青田千次郎様ですか!?!」

「やっと来たのかよ。閻魔大王のオッサン」

何と1時間経つても来なかった閻魔大王がようやくやって来たのだ。

「まったくアンタ待つのに俺だけ待ってたと思ってたよ・・・」  
「悪い悪い。少し手間取っていてなww。しかし千次郎・・・遅しくなったな」

「馬鹿言わないでくれよ閻魔大王のオッサン。こんな体になったのはあの地獄のような修行を

界王星で耐え抜いたからなんだぜ！もし何も効果が無かったら無意味じゃん」

「しかし千次郎様前より肉肉しくなってますか？その筋肉？」

「だろー！界王様には感謝しきれねえーよ！」

そう言つてグツと二の腕に力を入れて、どう！と言いながら見習い鬼に触らせている千次郎。

その光景を見ていた閻魔大王は2人にゴホンツと咳を入れる。

「お楽しみ所悪いが千次郎。お前に会つて欲しい人がいる」

「会つて欲しい人？」

「そうだ。お前を生き返らせてもらう為に最も重要な人物だ」

「あ！もしかして・・・！！！」

「そう。そのもしかしてだ。〃神〃だ」

「~~~~~~~~しゃっあ~~~~~!!!神様が来るのかー!!!」

何と神がわざわざ自分の為に!やって来てくれているのだ。そう思うと腕を思い切り天に

ガッツポーズが出てしまう。

「っ!!千次郎様も閻魔大王様と変わらないくらい声が大きい・・・」

その喜びの絶叫は隣にいた見習い鬼が耳を抑えるくらいだ。

「さあそんなこと言っている内にいらっしやっただぞ」

「え!?マジー!本当!!」

「おーい!此処だぞー!!」

腕を振りながら呼びかけている閻魔大王。その後ろでニコニコ止まらない千次郎。

そして閻魔大王が腕を振って呼びかける程約2分後、

カツカツカ

杖を突いてこちらに向かつて来る人が千次郎達の方へやって来た。

「お！あれが神様か!!」

「しっ！声を慎め」

そして杖の音は段々近くなり目の前にびよこんとおでこに触覚が付いている緑色の皮膚を持つ

老爺が歩いて来た。

「何だ！あの変な宇宙人は？」

ボカツ

「っ!!何すんだよ!」

突然閻魔大王に頭を叩かれた千次郎。意味が分からずただ首を傾けることしか出来なかった。

そして老爺は自分達の前に立ち止まった。するとか細い声で、

「どなたが・・・青田千次郎か？」

「え!?あ！はい僕です!」

突然喋りかけられたので驚くもちゃんと挨拶をした。隣には閻魔大王が帽子を取って

お辞儀していた。一体何が起きているか分からない千次郎。すると今度は閻魔大王が口を開き

次の瞬間飛び上がるような事を言った。

「お久しぶりでございませぬ・・・・・・・・地球の神”よ」

「!?」

「本当にお久しぶりです。閻魔大王様」

「え!?ちよっどどういう事!?!」

「五月蠅いぞ千次郎!この人がさつきから話していたお前が最も会いたがっていた

地球の神じゃないか!」

「え・・・・・・・・本当なの?」



「何故私がお前に嘘をつかなくてはいいけんのだ」

「フツ落ち着きが無いですなこの青田千次郎という少年は」

「あのー……あなたが神様ですか？」

「そうだが何か？」

「おい千次郎失礼だぞ！さつきから黙っていれば」

閻魔大王の怒気がこもった声に千次郎は急に怯え始めた。一体何があつたのかと隣にいた

見習い鬼が肩を叩こうとした瞬間物凄い悲鳴が宮殿一杯に響き渡った。

「う、うぎゃあああああ……」  
「バタツ」  
!!!!!!!

突如宮殿に響き渡った悲鳴は近くにいた者達全員が耳を塞いでしやがみ込むぐらいの

大きさだつた。そしてしばらくすると収まり皆耳を塞ぐのをやめた。閻魔大王は顔を真っ赤に

しながら先程失礼な発言について怒ろうとした。しかし千次郎は床に倒れてきり一向に起きない。何度も何度も声を掛けるが全く反応しない。心配した1人の見習い鬼が千次郎の首元を触った。

すると大変な事が起きてしまった。

「閻魔大王様……千次郎様……気絶しております……」

「な、何だと!!」

そう言っただけで千次郎に近寄り、千次郎の両肩を持ち揺さぶった。しかし一向に反応が無い。

千次郎の口から泡が出ていた。

「まずいですよ閻魔大王様!せっかく地球を救ってくれる戦士が界王星からたったの1日で戻って

来ているのに何が何でも起こさない!!」

そう言うと言習い鬼は仲間を集めて何やら話し合っていた。すると突然何処かへと走り去って

行った。だがこの出来事に1番傷ついた者がいた。

「わ、私の顔はそんなに怖いのですか……?初対面で人を気絶させるぐらい……」

「いえいえ!!全然怖くありませんよ神よ!なあ!」

どんなに閻魔大王がたしなめようとするも神の心には完璧に突き刺さっていた。

せっかく早くやって来たのにも関わらず神の姿が地球人でも人間でも無かったので千次郎の思惑を遥かに超えるショックは予想以上に酷かった。だがもう地球に侵入しているサイヤ人から地球を

守る為に何が何でも起きなければならぬ。さあ早く目を覚ませ!!千次郎!!

## STAGE 4 それぞれの目的と行動

「駄目だ。これも失敗だ」

「ああー！もう！何で起きてくれないのですか!？」

頬を抓つても、ハンマーで頭を叩いても、金的を喰らわすも千次郎は、一向に起きない。

何故このようになったのかというと、千次郎は生き返らせてもらうため神と会わなければ

いけなかったのだが初対面で神の顔を見て口から泡を噴いて絶叫しながら気絶してしまったのである。

「おい！後何かないのか？」

「これとかどうだろうか？」

「おい！何だそれ？」

「ドライノーズスプレー」

「それは鼻がムズムズする時に使うやつだろ！ふざけている時間なんて無いんだぞ」

「でも試してみる価値はあるぞ」

「そうでしょうか閻魔大王様？」

1人の見習い鬼が持ってきたドライノーズスプレーを千次郎の鼻に目掛けて使おうとしている

閻魔大王。もう1人の見習い鬼は止めようとしたが、何が何でも起こさないとイケないのだから

多少のデメリットは仕方がない”と言い、

「目を覚ましてくれ・・・千次郎！」プシュ

千次郎の鼻にドライノーズスプレーを発射した。すると、  
ピクピク

かすかに千次郎の鼻がヒクヒクと動いたのだ。

「おお！動いたぞ！」

「何とドライノーズスプレーで・・・」

「な！俺のが役に立っただろう!？」

「おいお前たち。そんなことする暇があるなら宮殿にあるスプレーを集めてくるんだ」

「は、はい!!」

まさかのドライノーズスプレーが活躍するとは思わなかった2人の鬼達。閻魔大王は千次郎の

気絶から目覚めさせる為にドライノーズスプレーを千次郎の鼻に発射し続けている。

「さあ俺達も千次郎様を起こさせる為にスプレーを探しに行こうぜ」

「そうだなそうしよう」

2人の鬼達はそう言うのとドライノーズスプレーを探しに辺りをうろつき始めた。



「う……ここは……」

次の時俺が覚めた場所は瓦礫の山だった。俺の名前は多田修平。友人を助けようとしたら

とんでもないことに巻き込まれた男だ。確か俺は辻本を肩から落としてしまった……。

早く辻本を探さないと……。そう思いながら立ち上がろうとした時肩にビリツと電流が流れた。

「……痛っ!」

慌てて見ると肩にはぽっくりと穴が空いていた。そうだ。確か俺は辻本を助けようとした時に

謎の少年が俺にビームを放って攻撃されたんだ。だとしたら傷口に菌が入らないように

何か探さなくてはならない。俺はなるべく肩に力を入れずにゆつくりと立ち上がった。

よく辺りを見渡すとある異変に気が付いた。

「何だ．．．．．何でこんなに周りの建物がぐにやぐにやなんだ？」  
周りの家やアパートなどがまるでろうそくのろうの様に溶けていたのだ。

まさかあの少年達がやったのか。そう思い俺は周りの異様な光景に固唾を飲んだ。

しかしあの少年達は何が目的でこんな事をしているんだ。俺は必死に脳みそをフル回転させながら考えていた。しばらく考えていると後ろの方から物音がした。咄嗟に振り向いたが誰もいない。

空耳だと思ってもう一度足を動かした。

ガサツ

流石に今度は音が大きかった。もうこれは空耳じゃ無いと俺は理解し、そつと音がした方へ

近づいた。そして音がした場所に到着しそつと顔を覗かせた。するとそこにいたのは

肩を震わせながら抱き合っている5人の女子高生達だった。

「君達。そこで何してるんだ？」

俺はすぐに女子高生達の所に向かい様子を伺った。すると誰かと思い1人が俺の方へ顔を向いた。

「きゃあーえ!?人?」

「嘘．．．人だ．．．人だよ!」

「あーい!やった!助かった!!」

「でも何で助かってるの?この人?」

「確かに火傷が1つも無いよ!」

1人の女子高生が俺を振り向いたと同時に残り4人も俺の方へ向き皆それぞれの感情を

声に出しながら俺に近づいてきた。すると1人の女子高生が俺に近づいきいきなり抱きつき始めた。

「ちよつとどうしたの?」

俺はすぐに離そうとするも女子高生に離そうとせず俺に抱きつきながら声を上げて泣いていた。

「うわあーん！良かった！良かった！助けが来てくれた！」

「ちよ、桂利奈ちゃん！困ってるよお兄さんが！」

「すみません！桂利奈ちゃん離れよう一旦！」

「うわあーん！離してー！」

桂利奈ちゃんと呼ばれている女子高生は俺から離れても涙はまだ出ていた。その様子を見た俺は

桂利奈ちゃんと呼ばれる少女の髪をゆつくりと撫でた。

「もう大丈夫。心配ないから。俺はここから離れないから」

そう言っていると桂利奈ちゃんの涙が段々治った。残りの女子高生達は俺に近づき

自分の名前を名乗り始めた。

「あ、あの私“澤梓”って言います！」

「私は“山郷あゆみ”です！」

「“宇津木優季”と言います」

「“大野あや”です！」

「私は桂利奈！“坂口桂利奈”!!」

「分かった・・・俺の名前は多田修平だ。皆は服装から見ると大洗女子学園の」

「はい・・・試合中に逃走した者です」

梓という少女は顔を赤らめながら俺にここまでの出来事を話してくれた。

梓達は、戦車道の練習試合中にも関わらず戦車を捨てて何処かへ行ったのは

俺も知っているでも問題はそこからだ。

「あの後試合が終了してから地震が来たのは知ってますよね？」

「ええもちろん。体験したからね」

「その後に空から宇宙船みたいな物が飛んで来たのも分かりますよね？」

「うん。だってその近くにいたから」

「はい。でもそこから変な宇宙人が謎の光を出したのは知っていますか?」

「え!?謎の光?」

「はい・・・その光のせいで大洗が半壊して住人も焼け焦げてしまったんです。」

まるで原爆のようでした」

「本当なのかい?・・・」

「はい。ここにいる私達全員で見ましたから」

「本当に怖かったんですよー!」

「私達もろうそくのろうみたいに溶けるかもって思ったから」

「その時に丁度崩れていた家があったからそこに身を隠していたの!」

「でもその際に・・・」 紗希 が何処かに行っちゃった・・・」

「本当・・・ 紗希」 どこにいるんだろ?」

「もしかして死んだんじゃない?」

「物騒なこと言わないでよ!!」

「あの悪いけど 紗希」とは一体・・・」

「あ!そうだった。多田さんは知らないですもんね」

「桂利奈と同じチームの女の子!」

「とても大人しい人なんです」

「そうか・・・」

俺は腕を組みながら考えていた。恐らくその謎の光によって死んでしまっているか

何処か彷徨っているか。そんな事を思っているとあゆみさんが口を開いてこんな提案を出した。

「どうせなら探しに行きませんか? 紗希を」

「え!?!」

「何言ってるの! そんなことしてたらあの宇宙人に殺されるじゃない!!」

「じゃずっとここにいるの! こんな所にいたっていつかバレるよ!!」

「桂利奈もあゆみについて行く!!」

「桂利奈・・・あなたまで・・・」

「梓・・・確かに命を守るのが一番大事だよ。でも私は紗希を助けずに生きるの嫌だ。」

「ごめんだけど私も紗希を助けに行くよ」

「・・・」

「修平お兄ちゃんは どうする？ 柱利奈と一緒に行く？」

「・・・ちよつと待ってね」

俺は桂利奈さんの所に行く前に梓さんの所に行った。

「梓さん。確かに宇宙人は怖いね」

「・・・」

「でも俺もその紗希さんという人を助けたいと思う。本当は梓さんも助けに行きたいよね？」

「・・・はい」

「だったらここから動いてここより安全な病院で身を隠したらいい・・・そこだったら安全だから」

「だから梓さん俺達と一緒にいこう」

俺は肩を掴んで梓さんに問いかけた。すると梓さんの目から涙が溢れて、

「ありがとうございます。多田さん・・・皆・・・私も行っていいかなあ？」

「「もちろんだよ!! 隊長!!」」

「よしこれで決まりだね。さあ行こう紗希さんを探しに」

梓さんの方へ手を出した。梓さんはしっかりと俺の手を握って立ち上がった。

そして俺は梓さんを手で握りながら柱利奈ちゃん達がいる所まで走った。

(辻本・・・お前を助ける前にまずはこの娘達の仲間を助けに行くよ。)

その間まで待っていてくれ・・・！)

そう心で念じながらも「死んでいる」とは知らずに・・・。



「みぽりんー！こつち手伝ってくれない？」

「はーい」

「すまんの……お姉さん方」

「はい。大丈夫ですよ。さあお肩を」

「すまんの……本当にすまんの」

「沙織こつちにも人がいるぞ」

「本当！」

一方こちらはあんこうチーム。あんこうチームは今逃げ遅れてしまった人や家具により

挟まっている人達を救出している最中だった。一度は病院に避難していたが

ウサギさんチームのメンバーがまだ病院まで避難していなかったため、ウサギさんチームが

まだ彷徨っていると思い今現在探していたのである。が、沙織の提案で大洗の住人も逃げ遅れて

いる人もいるから助けようと言ったため今現在1人の老翁を瓦礫から救った所である。

どうやら病院の近くは被害はまだ神社周辺よりはまだ随分とマシのようだ。

(ウサギさんチームの方は大丈夫なのかな？神社近くにいたから……) そんなことを考えていると沙織から声が聞こえた。

「みぽりん？足の方大丈夫？無理だったら休んでいいからね？」

「いや大丈夫だよ。それに私から行くって言ったのにそれはおかしいし……」

「そう……でも無理だったら休んでいいからね?」

「うん。ありがとう沙織さん」

沙織へ感謝の言葉を言って足をやや引きずるように足を動かした。「何としてでもウサギさんチームの皆は助けないと……うん?あれは……!」

ふと足を止めて自分の目の前にいる人を見た。服装は大洗女子学園の服装である。

「もしかして……ウサギさんチームにいた子。確か……装填手の丸山紗希さん!」

そう思った瞬間みほは痛めた足なんか気にせず紗希のどこまで走った。すると向こうも

何者だと思いいちらに目を向けた。

「丸山さん!」

そう言うときみほは紗希の肩を掴んで顔を見た。その瞬間紗希の口から言葉が溢れた。

「……先輩?」

「そうだよ!!良かった!生きてたんだ!」ツ

紗希が死んでいなかったことに喜びが湧き、目から涙が溢れ始めた。その光景を見ていた

沙織と華と優花里と麻子も紗希の所へやってきた。

「紗希ちゃん生きてたのね!!」

「良かったであります!」

「丸山さん本当に良かった……」

「……これで1人は助かったな」

「1人?え!?!紗希ちゃん1年生の皆はどうしたの?」

もしかして死んだのだろうか。そう思った沙織は紗希に聞いた。しかしその答えは予想外だった。

「……皆とはぐれた。」

「え!?!」

「じゃ、今までずっと1人でいたのでありますか!?!」

「うん……」

優花里の大きな声にビクツと体を震わせるも首を縦に振った。

「・・・困ったな・・・」

「どうすればいいんでしょうか？」

「こうなったら危険だけど神社周辺を探してみよう・・・！」

「本気なのか？」

「うん」

「紗希ちゃん1年生の皆は生きてることは確かなんだよね？」

「うん・・・皆生きてる。絶対・・・」

「そっか・・・そうと決まればみぽりん行こう。1年生の皆の所へ」

「うん。これより1年生救出作戦を開始します。パンツアーフオー

！」

「「「オーーー!!!」」」

「・・・オーー」

かくしてみほ達あんこうチームと紗希による1年生救出作戦が始まった。



一方こちらは磯前神社。この場所は宇宙船が漂着した場所であり  
そして死体の山が

気持ち悪いぐらい沢山ある所である。

「ひい、誰か助けてくれー!!」

「嫌だ!!死にたくない!!」

「なんなんだよ!あの変な緑の化け物は!」

「フフフフ。栽培マンなんか手こずるとは大したこともない奴らだぜ」

「確かにそうだが栽培マンは星の土地質によるからな・・・どうやらこの星は

栽培マンに適した場所みたいだなあ」

そしてその光景を神社の階段に溜まっている死体に座りながら不敵な笑みを浮かべながら見ている2人がいた。そうサイヤ人の阿散井慎也とナツパである。2人は同じサイヤ人のラディッツが

地球に侵入した際地球人の今作品の主人公青田千次郎によって倒された為、千次郎を抹殺しようとして地球にやって来たのである。しかし彼らが来たのは茨城県大洗町。千次郎がいる場所は熊本県

なので一向に探してもいないのである。仕方なくこの場所を離れようとした際この町の住人達が

束になつて2人を襲撃してきたのである。が、やはり大洗町の半分を破壊した2人にとっては

正に住人達など蟻んこ程度。到底敵うはずじゃなかった。

「ぎゃあああー!!!」グシヤ

そしてまた1人!!また1人と栽培マンの餌食になって先程最後の住人が死んだのである。

「ふー・・・・・・・・やっとなつたか」

退屈そうに欠伸をする慎也。すると隣にいるナツパから話しかけられた。

「なあ慎也。ふとさつき思ったんだが俺達はまだ半分しか壊していないよな?」

「そうだがそれがどうした?」

不意にナツパの質問に疑問を浮かべる慎也。

「だったらよ・・・いつそのことこの町全員に青田って奴の聞き込みをしたらいんじゃないか?」

「確かに。そうしたら効率が良いな・・・」

「そうと決まれば早くもう半分の所へ行こうぜ！」

「まあそう急がせるな」

死体の山から立ち上がりゆつくりと死体を踏んで降りて行く2人。  
ふと空を見上げて

ぶつぶつと何かを口に出した。

「青田千次郎・・・早く来た方が身の為だぞ。今からこの町のゴミ共に  
カーネイジ《大虐殺》を

始めようと思うのだからな・・・ハッハッハッハッハ！！！！」

心の底から笑う慎也の顔は正に悪魔の笑みそのものだった。

それぞれの目的と行動に動き出すみほ達と修平達とサイヤ人。

果たして誰が最初に目的を達成するのか・・・。《続く》

STAGE 5 到着大洗！気絶から目覚めた戦士  
青田千次郎の静かな激しい怒り！！

プシュ

「しまった！もうこれで最後なのに・・・！」

「もう宮廷には無いですよ！！」

「そんなにや！もうおしまいだ！」

とうとう最後のスプレーを使い切り焦りに焦りまくる閻魔大王と見習い鬼達。千次郎がもう少しで気絶から起きる所だったのに最早これまでである。しかし、そもそも千次郎が神の顔を見て気絶してしまったことがいけないのだが。

「うえーんうえーん！！起きて下さいよ！千次郎様！！」

「そうだそうだ！早く起きて闘いに行って下さいよ！」

肩を揺らしながら問いかけるもピクリともしない。

「このーこのー！」パンツ

閻魔大王の平手打ちをまともに喰らうもただ頬が真紅のように赤くなっただけである。

そんな3人の様子を見て神が杖をついてやって来た。

「大王様。私に考えがあるのですが・・・」

「何！！本当か!？」

「ええ・・・」

「何だ。言ってみろ」

やけに珍しく黙り込んでいる神。しかしどんな事しても千次郎を起こさなくてはならない。

すると神の重い口から言葉が出た。

「・・・ヨー」

「え！何だって!!」

「〃カンチョー〃・・・」

「〃カンチョー〃?」

「・・・」

「ほらあれですよ！肛門に指をぶつ刺す……あ、失礼しました」  
「で、それで千次郎を起こさすということか？神」

「ええ……そういうことです」  
顔を真っ赤にしながらカンチョーを提案する神。デリカシーがと  
ても強いのだろう。

「そうか……よし！お前達千次郎の体を持って！」

「えー！！やるんですかー！！」

「やるに決まってるだろ！！」

「へーい」

2人の見習い鬼は千次郎の体を持ち無理矢理起こした。そして1  
人1人が別の場所を持ち始めた。

1人は両肩。もう1人は腰を支えた。閻魔大王は、ラグビーでコー  
ナーキックをしようとしているキッカーの様に人差し指をピンと伸  
ばし息を吹きかけていた。

「いいか……もうそろそろ始めるぞ！」

「え！もうですか!?!」

「こっちは大丈夫っす」

「よーし！行くぞー!!!」

閻魔大王は掛け声と共に人差し指を千次郎の肛門に向けて放った。

思い切り放った指は段々千次郎の肛門に向かっていき、

「目を覚ますんだー!!!千次郎!!!」

ブスツ

見事に千次郎の肛門に鋭い指がブスツと刺さった。指はメリメリ  
と音を立てて肛門にめり込む。  
すると、

「い……い……痛ってー!!!!!!」

「おおー」

「千次郎様が……起きた……」

「よっしやー！起きてくれたー!!」

何と千次郎が気絶から目を覚ましたのだ。千次郎は肛門に激しい

痛みが襲った為か飛び跳ねて

目を覚ました。

「痛てて一体何が起きてんだ……って閻魔大王のオッサン何やっとなじやー！」

「よっ！お前起こす為にカンチョーをしてやったのだ」

「嫌だー！よりによって閻魔大王のオッサンにカンチョーされるのは嫌だー！」

「嘆いている暇は無いぞ千次郎！！早く神と一緒に下界に降りるのだ」

後ろには自分の肛門に指をめり込ませていた閻魔大王がいた。閻魔大王は指を肛門から外して、

ハンカチで拭いていた。すると今度は自分を慕ってくれている2人の見習い鬼が飛びついて来た。

「千次郎様ー！！」 ガシッ

「起きてくれて超良嬉しいっすよー！！」 ガシッ

「ちよお前ら苦しいってー！」

抱きつかれて息が出来なく薙ぎ払ってしまい、2人は泣いてしまった。泣くな泣くなと

たしなめようとしていると神が千次郎達のいる方へ向かってきた。その瞬間千次郎は咄嗟に

身構えた。何故なら自分は神の顔を見て気絶してしまったのだから。神は千次郎の顔を見つめるとゆっくりと手を差し出した。千次郎は仲直りの握手と思ったのか手を握った。すると神が指を

動かしてグリグリし始めた。

「痛い痛い！！やめて下さいい神様！」

「よくも……よくも私の顔を見て気絶したな……」

「その件は失礼致しま『謝っても許すもんか！』」

そう言うのと更に指をグリグリし始めた。

「あー！ごめんなさいごめんなさい！！二度と神様の顔を見て気絶しませんー！」

絶対誓います！だからー！」

「だから？」



「だからもう指をグリグリするのをやめて下さい！」

必死に頼んだ。もう苦しいので許して下さいと。もう二度と神様を見て気絶しないと。

そう必死に頼み続けると神はゆっくり手を離れた。

「……今回だけは許してやる。だが今度やればその更に痛いやり方でお前を痛めつける。分かったな？」

「は、はい!!もう二度と神様を見て気絶なんてしません!!」

「よう言うた。よし!閻魔大王様。千次郎を連れて私共は下界へ行き  
ます」

「分かった!いいか千次郎!サイヤ人の奴らなど痛めつけてやれい  
!!」

「ああ!任しといてくれ!」

「雑談はよろしいかな?」

「あ!ごめんなさい!じゃ行ってくる閻魔大王のオツサン!!じゃあ  
な……」

お前ら何て名前だっけ?」

「コオロギ」です!」

「マツムシ」っす!」

「そうか……じゃコオロギ!ゴキブリ!お前ら分まで頑張ってくるわ  
!」

「はい!」

「俺はゴキブリじゃ無いっすよ!」

「そうか悪い。じゃバイバ」ビツ!

別れを告げようとした瞬間神が瞬間移動を使った為神と千次郎は  
消えてしまった。

「千次郎様が消えちゃった!」

「何でだ!?!」

「何……瞬間移動を使ったんだよ神が」

慌て惚ける2人の見習い鬼にそつと教える閻魔大王であった。

(千次郎……頼んだぞ。)

そう心で思いながら……。

■  
一方ここはアフリカにあるカリンの塔の上の神殿。普段はマサイ族や色々な原住民達によって

守られていてその神殿に1人の人物がいた。彼の名はミスターポ。普段は神の右腕として神殿に住んでいる皮膚が真っ黒でぽっちやりの男である。そんなポポは、神の帰りを待っていた。

しかし神はどんなに時間が過ぎても一向に戻って来ない。心配になっただけでも自分も行くとした

その時、

「よしっ着いたぞっ!!」ビッ

「え!?もう着いちやったの!?!スゲエや神様!」ビッ

突如神と何者かが神殿に瞬間移動してやって来たのである。これにはポポもびっくりした。

「神様。誰そいつ?」

「うわあー!!!真っ黒じゃねえーか!!」

「すまんのポポ。こいつは、今日本で厄災をもたらしているサイヤ人に対抗できる青田千次郎だ」

「よう!俺千次郎って言うんだ。よろしくな!ポポ」

「え、ええ・・・」

「おい!もたもたするな早く向かうんだ!!」

「あ!そうだった!!で、場所は何処なの神様!」

「えー確か日本の茨城で・・・大洗」という町だ!!」

「OK!要するに大洗っていう町へ向かえばいいんだな」

「そうだ!分かったのならとつとへ行けえ!」

「待つて!靴紐が・・・」

靴紐がとけ、大慌てで紐を結ぶ千次郎。

「よし！じゃあ行つてくる！！修行はバツチリだ！！」

「頼んだぞ！！千次郎！」

「まあ一応……頑張れ青田千次郎！！」

「おう！じゃあな！」ギヤウツ

そう言った瞬間まるで電気のようなスピードで神殿を駆け抜けて、

「とうっ！！」バンツ

バンツと大きく跳ねて神殿から落ちた。

「大丈夫かなあ？あんな能天気だけど？」

「安心しろポポ。簡単にはやられんぞ千次郎は」

少し心配するも神の言葉を信じて千次郎にもう一度エールを送るポポだった。

「よしっ！！やつともう一度ここに戻れたぜ」

約1年ぶりの下界に感激するもそんなことをする暇が無いので更にスピードを出す千次郎。

しかし、

「くそっ！やっぱり体力が……」

ここまで来るのに1日も掛けてやって来た為体力がもう限界だった。

でも休んでいる暇など無いので気力で振り絞ろうとしたその時、

「おー！ーい！！お前が青田千次郎かー！！」

「え？！は、はい！！そうですが！！」

神殿の下にある塔から誰かの声が聞こえてきた。よく見るとそこには神と同じ杖をついている

猫がいた。

「わしは、この塔に住んでおる『カリン』という者じゃ！！きぞここまで来るのに疲れた

じゃろう！！この『仙豆』を持ってゆけ！！それーっ！！」

「あ！！とつとと！！」パシツパシツ

カリンと名乗られる者に何かを投げられ思わず反射的に取った。よく見ると2粒の「豆」だった。

「あのーこれは!?」

「それは仙豆と言って回復作用があるものじゃ!!それを食べてゆけー!!」

「なるほど・・・わざわざありがとうございます!!」

「お礼などよい!!早く向かうのだーっ!!」

「はーい!!!」

カリンという仙猫に仙豆を渡され感謝する千次郎。

「本当に回復するのかなあ?まあ食べてみようつと」ボリボリ

本当に回復するのかと疑いながらもボリボリと音を立てて飲み込んだ。すると、

「あれ!何か分かんないけどスゲエ元気になってきた!」

まるで朝の背伸びぐらいの安らぎを感じるのだ。

あのカリンが言っていたことは本当だったのだ。

「よっしゃー!!!元気全快だぜ!!!」

ここまで来るのに疲れた身体が仙豆のおかげで界王星から出発した時と同じぐらい回復した。

「さて、サイヤ人は大洗っていう所にいるんだったよな・・・」

一度動くのを止めアフリカから気を感じし始める。

(えーと・・・違うな・・・ここか?嫌違う・・・あれ?ここにはやけに気が少ない。ここだな)

「よしっ!!ここだな!!それじゃぶっ飛ばすぜー!!!」

そう言うともう肉眼では捉えることが出来ないスピードで大洗へと向かって行った。

「このスピードだと後3時間ちよいかなあ・・・その時まで皆くたばらないでくれ」

■  
一方ここは大洗町。大洗町の人々は平穏な生活を毎日過ごしていたが突如現れた謎の戦闘民族

サイヤ人の来襲によって今正に地獄そのものである。この大洗に住んでいる4割は焼け死に、

残る6割は負傷者の数である。しかしその中で動き出している者達が合わせて3ついる。1つは、

「おい！皆ー!!」

「いるのでしたら返事をお願いしまーす!!」

「梓ちゃん！あゆみちゃん！」

「1年生の皆さん生きていますでしようか!!!」

「………いるのだったら返事をしろ」

「………皆ー」

西住みほ達あんこうチームと1年生の丸山紗希である。そしてもう1つは、

「紗希ー!!」

「いるなら返事してー!!」

「紗希ー!!」

「紗希さんー!!」

「桂里奈はここにいるよー!!!」

「丸山さんー!!!」

友を救おうと動き出した為とんでもないことに巻き込まれた青年多田修平と同級生丸山紗希と

離れ離れになってしまったウサギさんチーム。そして最後の1つは、

「青田千次郎を知っているか？」

「し、知らない……」

「そうか………なら『死ね』」キユイーン

「や、やめて」

バキュン

「ぎゃあああ!!!」バタツ

「ちっ！本当にやわい奴らだな地球人は」

「本当だ全く・・・」

サイヤ人の阿散井慎也とナツパである。慎也とナツパは、この大洗ごと使い、

千次郎の聞き込みをしている。もちろん知らないと言えば死である。今このサイヤ人に

一番近いのが修平達とウサギさんチームである。

「丸山さーん!!」

しかしそんな脅威が迫っていることを知らず大声をだして紗希を探す修平とウサギさんチーム。

もうあれこれ探し続けてもう何時間も過ぎている。早くこの地獄から助かることは出来ないの

だろうか。誰もがそう思っていた。

「た、多田さん・・・少し休みませんか？」ゼエゼエ

「私もう足が動かないよー!」

「そうだね・・・少し休もうか」ハアハア

梓は指を差した瓦礫の山に一同は体を休めた。しかし修平だけは座ろうとせず立っていた。彼には彼だけの事情があった。

(辻本達・・・生きてるのかなあ・・・)

そう友人の辻本の生死がとても心に引つかかっていた。今はウサギさんチームの皆と行動を

しているも本当は単独行動をとっていたのでいつ離れるべきか考えていた。そんなことを考えて

いると皆じつと見つめていた。

「どうかしたんですか？さっきから黙り込んでいますけど」

「何かあるなら私達相談に乗りますよ」

「そうだよ！だって修平さんこんな私達と一緒にいてくれるですし」

「桂里奈に教えてよ修平お兄ちゃん!」

「嫌大丈夫だよ。ちよっとボーっとしていただけだよ」

何とか誤魔化そうとするも、

「嘘つかないでよ!!お兄ちゃん絶対何か隠してるもん!」

桂里奈には分かるのか誤魔化しを貫き通そうとしている修平に突っかかる。これ以上誤魔化しても無駄だと思ったのか修平は意を決して皆を見た。

「分かった。話すよ」

そう言つて皆にここまで話を話した。大洗の試合を見ている最中地震が起きたことは全員知っているのでそこは飛ばした。辻本という友達のこと。助けようとしたらサイヤ人という宇宙人に

襲われたこと。友を助けようと起き上がろうとした時肩に光線を喰らつてしまったこと。全てを話した後皆涙を流していた。修平が心から友を大切にしている思いに感動したと皆言っている。すると涙を拭いて梓が立つて修平にこう言った。

「多田さんありがとう。私達と一緒に行動してくれて私達は私達で紗希を探しますからどうか

友達の所へ向かつてあげてください」

皆じつと修平を見てそう伝えた。でも修平には何故か心の何処か引つかかった。

本当に行つていいのかと。断つた方がいいんじゃないかと。黙り込みながら考え出した答えを

伝えようとした瞬間、

「いたっ!!皆ー!!!」

「え!?!先輩!!」

「良かった!!皆生きていますよ!!」

「……………皆」

「え!?!?!紗希!!」

「え!?!」

「嘘でしょ!」

「生きてたんだ……うわあーん紗希ー!!」

「……………ちよつと苦しい」

何とあれほど探しても見つからなかった紗希が生きていたのだ。それにみほ達あんこうチームも

来てくれたのだ。そう思うと言葉より行動が体に出てしまい皆声

を上げて泣いていた。

「先輩ー!!怖かったですよー!!」

「本当に本当に!!」

「そっか・・・怖かったんだね。でももう大丈夫だよ」

「先輩!!紗希とは何処で会ったんですか!?!」

「私達が地域の人達を助けていた時に瓦礫にぽつんと座っていたの」

「理由を聞いてみるとはぐれちゃったと聞きましたから」

「だから一瞬大丈夫かなあと思ったけど皆何処も怪我してなくて良かったよー!」

「早く病院に向かいましょう」

「了解しました。あ!待って下さい先輩実は!・・・あれ?」

「どうしたの?」

「修平お兄ちゃん!お兄ちゃんってば!!」

「・・・」

少し目を離している隙に修平がみほ達から黙って何処かに行こうとしていた。もう彼女達の目的はもう果たしたのだ。だから今度は自分の番なのだ。そう思い梓達の声をわざと無視してここから

立ち去ろうとした。ゆっくり、ゆっくりと。その時自分の服をガシツと誰かが掴んできた。

一体誰かと思いい後ろを振り返ると、

「待ってくれませんか?1年生の皆さんがあなたに話したいと言っているのです」

そこには修平の服をガシツと掴みながら必死に伝えているみほがいた。すると後ろから目に涙を

溜めながらこつちに走ってくる桂里奈がやって来た。

「待ってよ・・・お兄ちゃん・・・!」

「桂里奈ちゃん・・・」

「行かないですよ・・・私と一緒にいてよ!」ガシツ

「ちよ、桂里奈ちゃん!」

桂里奈は修平の服に顔を埋めて抱きついてばかり少しも動かない。修平はオドオドしながらも



離してもらおうとするも一向に離れない。そうイザコザをしていると背中に冷たい者を感じた。

すぐ後ろを振り返ると、

「うん？ 貴様はあの時の……」

「え!?!何!?!宇宙人?」

「嘘……見つかっちゃた……」

「もしかしてあれが西住殿が見た宇宙人……」

「私達とそっくりですね」

何とサイヤ人の2人が自分達の後ろにいたのだ。それを見た修平は急いで声を上げた。

「皆さん！早くここから離れるんだ!!コイツらから……グワアツツ!!!!  
バタツ

「お兄ちゃん!!」

「俺達に向かってコイツらとはいい度胸してんなお前」バキツ  
「くっ!!」

頭を踏まれ、身動きを取れなくされてしまった。

「お兄ちゃんから離れろ!!」

「うん？何だ?」

「駄目！桂里奈ちゃん！」

「駄目だ……桂里奈ちゃん……こつち来たら駄目だ……」  
「うおおおー!!!!」

桂里奈は皆の言葉を無視して修平を踏むナツパに向かって走ってタツクルしようとした。が、

「こんなチビやったっていい気にもなりやしねえ」

そう言うどデコピンの構えをして、

「ほらよ」バンツ

「きゃあっ!!!」

「桂里奈ちゃん!!」

「ハハハハハッ!!!」

ナツパのデコピンをまともに喰らった為、額に血が出ている桂里奈。

その光景を見て沙織達が叫んだ。

「あんた達一体何なのよっ!!! 私達が何をしたって言うのよっ!!!」

「そうです私達が何をしたんですか!？」

「フフフフ………恨むんだったら青田という奴を恨め」

「青田？」

「そうだ。俺達がこんなことをするのは『青田千次郎』という奴を探しているのに

やっているだけだ」

「だからって……何で私達の大洗をこんな風にされなきや行けないんですか?」

「そうよ! そんなの矛盾してるわよっ!!」

「話せば長くなるな……まあ聞いておくとするか………おいそこの小娘」

「ふえっ、はっはい!」

「お前青田という奴を知っているか?」

慎也はみほに向かってそう問いかけた。もちろんこの町に千次郎のことを知っている奴

何ていない。分からないと答えた瞬間殺そうと考えている慎也。

しかし、みほの答えは

予想外だった。

「青田さんですか……その人なら『知っています』」

「そうか………え!? 今何て言った!!」

「青田という奴を知ってるだと……」

「はい。知ってます」

「何処だ! 何処にいる! 早く教えろ!!」

何と自分達が殺そうと探している千次郎を知っていると答えたみほ。そう言うと、早く教えろと

言わんばかりナツパが詰め寄った。しかしみほは冷静だった。

「だったら……『3時間』の猶予を下さい」

「何!？」

「もういっぺん言ってみろアマ……」

3時間の猶予。そう提案した。これには普段冷静な慎也も驚いたが、

ナツパには逆効果だったらしい。

「3時間の猶予を下さい。そうしてくれたら教えます」

「ふざけるなー!!!」

「!?」

みほの提案に痺れを切らしたのかみほに攻撃しようと思っ込んだナツパ。

もう頭の中ではぐちゃぐちゃにしようと考えていた。そう思って右拳を振り上げようとした瞬間、

「やめろナツパ」

「何?」

慎也が後ろからボツツとやめろと言った。

「何故だ! 3時間も待って何をしろっんだ!! これまでズーッと寝てたから

俺は体がウズウズしてんだぜ!!」

「このアマはぶっ殺す!!」

しかしナツパの中は火がついていて、慎也の忠告を無視してみほの顔を殴ろうとした瞬間、

「ナツパ!!!俺の言うことが聞けんのかーっっっ!!!」

「!?」ビクッ

「す、すまねえ慎也……つい調子に乗っち待って……」

「ハアハアハアハア」

「ふんこのゴミが……おい小娘!」

「はいっ!!」

「確か3時間だったな」

「はい……」

「良からう。3時間だけ待ってやる。ただしそれ以上繰上げは無しだからな」

そう言うと慎也はナツパを連れて瓦礫の山に座り込んだ。その際急いで修平を助けようとした時に桂里奈が飛び出して修平の肩を

持ってやってきた。

「みぼりん・・・本当に知ってるの！」

「ううん知らない」

「え!? どう言うことですか!？」

「多分あの時に本当のことを言っていたら・・・殺されてた」

「だからあの時咄嗟に嘘をついたんですね」

「でももし嘘をついたということがバレたらお終いですよ！」

「その時は・・・私達も大洗の人達・・・皆諸共殺されちゃう」

「・・・」

「みぼりんどうするの？」

「このままだとバレるのも時間の問題だぞ」

「うん・・・どうしようこのままだと皆殺されちゃう・・・」

「あのー・・・ゴホッ！僕に提案があるんだけど・・・」

「え!？」

「僕が〃囧〃になるから皆さんは逃げて下さい」

「!？」

突然修平と提案に一同は驚いた。

「駄目だよ！そんなことしたらお兄ちゃんが・・・」

「いいんだよ桂里奈ちゃん。まだ桂里奈ちゃん達はまだ高校生だ。大人は今僕しかいない・・・」

だから大人である僕が君達を守らなきゃいけない。アイツらの注意を引くよ。

だから桂里奈ちゃん達はここから病院まで走るんだ。分かった？」

「・・・お兄ちゃん」

「分かった。そうしよう」

「ま、麻子!!」

「沙織・・・誰かが生きる為には誰かが犠牲になれない時だつてある。今それをこの人がやろうとしてるんだ」

「で、でもー!」

「・・・分かりました。囧をお願いします」

「ちよつと！みぼりんまで!」

修平が囹になるという作戦に段々皆も賛成していった。最終的には沙織も折れて賛成

することにした。一方の修平は落ち着いていた。

「いいかい？もし僕がアイツらの囹になってすぐ死んだらバラバラに逃げるんだ。そうすれば

アイツらも誰から殺そうか少し考えるはずだ」

そう言い、残りの時間皆静かにして逃げる時の体力を回復していた。

一方こちらは慎也とナツパ。何故慎也が提案を飲んだのか疑問に思ったのかナツパが慎也に

話しかけていた。

「で、でもよう慎也・・・な・・・何であんな地球人共の提案なんか飲んだんだ？」

「何・・・あの小娘の目を見ると嘘をついてるなと思つてな」

「何!？」

「だからわざと信じて提案を飲んだんだ」

「あのアマ・・・やっぱり殺しておいたら良かったぜ」

「まあ待てその前に青田を待つんだ」

「何青田はここにはいないんだぜ」

「だからだ。この小娘共を殺す前か殺した後かどっちに来るか俺は考えてるんだ」

「もし殺す前にやってきたらまず奴の目の前で小娘共を殺して、その後で奴もじっくり料理する・・・」

おのれの無力さを分かせもだえ苦しませてやる・・・。。。。そして今日はあと3、4時間もすれば・・・

くくく・・・素晴らしい地獄ショーも見せてやれるはずだ」

「なるほどそう言うことか！そりゃあいいぜ慎也」

「この3時間のうちに奴が来れば話だがな・・・」

「青田って野郎は慎也に譲るがあの残りは俺にやらせてくれよ！」

「スキにしろ。ただしあの中にいるあの男は生かせておけ」  
「な、何でだ！」

「あの男は俺達をコイツと呼んだからな青田と同じ苦しませてやる」  
「そうか：ハハハハハッ!!!くるといいなあ青田っていう奴：：：：」

しかし、千次郎はやってこないままとうとう3時間が過ぎてしまっ  
た：：：：：。

■  
「時間だ：：：：どうやら待つても無駄だったようだな：：：：  
おい小娘!!もう時間だ！」

慎也はスカウターを付け直して、みほ達の所へと向かう。その際向  
かっている時の顔が

ニヤついていて悪魔の形相の様だ。

「さて青田千次郎という奴について聞かせてもらおうか」

そしてみほの前に立ち顔を覗かせる。みほが必死に睨んでいる顔  
が面白いのか半笑いで

見つめている。

「じゃ教えます。でもその前に：：：」

「何だ？」

するとみほは自分に背を向けて、

「私を捕まえてからにして下さい！」ダッ

「よし！皆早く逃げて!!」

「急いで!!」

「うわあー！早くしないと！」

「修平さん！頼みます!!」

「ああ任せてくれ」

何と自分達から逃げようとしたのである。それを理解した瞬間笑

いながらナツパが  
突っ込んできた。

「ハハハハハッ!!!」何て無能な奴らだ。この俺達から逃げられると思っ  
ているのか!」

そう言いながら一番最初に逃げた沙織に狙いにつけた。が、

「やめろー!!!」

「うん?」

「うおおおー!!!」バキッ

「グハア!」

突如自分の脇に入った修平に頭を角材で殴られた。頭を触ると何  
と血がついていた。

その血を見てナツパの顔に血管が溜まった。

「貴様ーっ!!!」ビュン

「くっ!」

「ぶっ殺してやる!!!」バキューン

狙いを修平に変え修平に向かって気弾をぶつけた。

「うわあ!!!」ヒョイ

しかし運良く左に避けたためかろうじて気弾にぶつからなかった。

後ろを振り返ると建物が粉碎していた。そう後ろを振り返ってい  
た際腹に鋭い一撃が入った。

「ガハアッ!!!」

今まで感じたこともない鋭い一撃。口からは血が出ていた。する  
と、今度は頭を思い切り

地面に擦り付けられた。何とか反抗しようとするも余りにも物凄  
い力の差により

何も出来なかった。するとナツパの口から侮辱の言葉が溢れた。

「ふん!たかが知れたことをしても俺様にやあ敵わなえぜ!」

「くっ!!!」

「何故逃げようとしなかった。もう友達は『死んでる』のにな」

「!？」

「ど、どういう事だ!」

修平は焦りながらナツパに聞く。辻本が死んだ？嘘だ。アイツは死なない。

昔から体が人一倍頑丈な奴だ。死ぬはずない。死ぬはずが……。  
「だったら証拠を見せてやろうか？」

「証拠？」

「そうだ。ほらこれだ！」

そう言うのと修平に何かを投げつけた。よく見ると何かが焼け焦げている。

「持つと近くで見せてやろうか？」

すると何かを足で引きずりながら修平に見せた。するとようやく何かの正体が分かった。

それは焼け焦げた辻本の首だった。

「嘘……これって辻本の……」ブルブル

「そうだ。お前のお友達の頭だ」

「嘘だ……嘘だ……嘘だ……」

そう言うのと修平は声を上げて涙を流した。するとナツパは修平に向かって

気弾を飛ばそうとしていた。

「フフフフ……テメエはちよつとの間そこで寝てろ」

「……」

「でも今まで闘った奴の中でお前が一番『弱かった』ぜハハハハハッ  
!!!!

「何……だと」

「お前みたいに中途半端な奴で何にも守れねえ奴は初めて見たって  
言ったんだよ！」

まあお前のお友達を少しおかしかったがな」

「ふざけるんじゃねえ!!」バンツ

「うん？」

「うおおおー!!!」

修平は叫びながらナツパにしがみついた。

「つたくそんなに苦しんで死にたいのかよ」



そう言つて修平を払い除けようとした瞬間、  
ガブツ

「っ！痛つてー!!!何すんだテメエ!!」

何とナツパの脇にかぶりついたのだ。不意をつかれたためか顔を真つ赤にして怒るナツパ。

「俺の・・・ことは・・・侮辱していいけど・・・辻本のこととは侮辱するな!!!」

だが、それがどうしたと言わんばかりナツパを鼻で笑っている修平。

そんな修平の顔を見るとナツパは更に顔を赤くし、

「もう我慢出来ねえーッ!!!」バツ

「うん?」

「テメエの前でこの女を殺してやるよ!!」

そう言い逃げている桂里奈に気弾を飛ばそうとした。それに気づいた修平は

止めようと足を動かした。

「やめろー!!!」

「へへッ!!もう遅せんだよっ!」バキューン

そして桂里奈に向かつて気弾を飛ばした。何としてでも止めようとすも

足がつかえて動かない。自分の目の前で人が死ぬ。嫌だ。そんなの見たくない。

「桂里奈ちゃん!!避けッゴホッゴホッ」

声が掠れて声が出ない。もうおしまいだ。修平はもう無理だと思いい、顔を下げた瞬間、

キーン

「うん?何だありゃ」

ナツパの前方に何かがちらに飛んできているのだ。それも物凄い速さで。

その何かはナツパ達に気づくと猛スピードで突っ込んできナツパが桂里奈に対して

飛ばした気弾を弾き返した。

「何!?弾き返しただと!!」

ナツパは突然の出来事に目を白黒させた。すると慎也のスカウターが反応した。

ピピピピ!

「スカウターが反応した・・・戦闘力は・・・〃5000〃!」

「何!?!」

「!?いかん!ナツパ!避ける!!」

「え!?!」

慎也が突然叫んだので後ろを振り返ると、

ドンツ!!

「グハアツ!!!」バタツ

突然ナツパの顔に重い蹴りが入った。そしてナツパはゴロゴロと転がりながら動かなくなった。

その場にいた修平や逃げていた皆何が起きたか分からなかった。すると煙が上がって様子を

見ると、そこには桂里奈をお姫様抱っこしながら慎也とナツパを睨みつけるオレンジ道着を着た

少年が現れた。

「…………お前らか?サイヤ人つてのは?」ギロツ

そうその少年は我らが主人公青田千次郎だったのである。

STAGE 6 千次郎の謝罪と成長!

「す、凄い……」

最初は何が起きたか全く分からなかった。覚えているのはもう間に合わないと思つて顔を下げた

途端謎の物体がこちらに向かつて飛んで来たまでだ。するとその物体が俺をボコボコにした

木偶の棒の顔面にキックをお見舞いした所までは知らなかった。そして今桂里奈ちゃんを

お姫様抱っこして少年がゆっくりと降りていった。よく見るとオレンジ色の道着を着ている。

一体何者だ? 謎の少年はゆっくりと着地すると桂里奈ちゃんを下ろした。

「大丈夫か?」

「あ、あい!」

「あいつて……変な返事するなあお前」

桂里奈ちゃんの返事の仕方にクスツと笑っている。そう少年の笑顔を見ているとあの木偶の棒が

立ち上がった。よく見ると鼻息を鳴らしながら少年を睨みつけている。

「デメエ……何しやがる」

「うつせえ。それにお前らか? サイヤ人つてのは?」ギロツ

木偶の棒に向かつて少年は物凄いガンを飛ばす。ここにいる俺や梓さん達も怖くて震えるぐらい。

「そ、それが何だつてんだい!」

「そうか……」

「待て!……もしかしてお前は……」

「ああ俺の名前は皆が探しているアイドルの……『青田千次郎』だ」  
「!!!!!!!!!!!!!!」

「な、何だと!?!」

何と少年は青田千次郎という者だった。奴らが探していたその男

が今自分達の前に

立っているのだ。しかし木偶の棒は嘘だと思っっているらしい。

「おいおい・・・お前があのでイツツをやった青田千次郎？ふざけるな！」

まだ尻も青そうながキじゃないか！」

「尻が青いガキにやられてるお前が偉そうに言ってるじゃねえよ」

「何だと!？」

「だってそうじゃないか。やられてるんだぜ。『尻の青いガキ』にな」

千次郎はからかいながら木偶の棒に近づく。

「お!!な、何だ!!もう死ぬつもりか!え!!」

「・・・」

「言つとくがさつきは油断していたからな!」

「いいから早くこいよ」

「!!」

そう千次郎がからかっていると木偶の棒が拳を振りかざした。

「喰らえつ!!こいつは挨拶がわりだつ!!」ブンツ

「いけないっ!早く避ける!!」

俺は必死に声を上げて千次郎を守ろうとした。しかし、

「まあ待てよ。しっかりと相手してやるから」

「!？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・？・・・・・・・・え・・・・・・・・・・・・・・・・!？」

(・・・早い・・・)

何と木偶の棒の拳はハエが止まるかのようなスピードしか見えな  
いくらい千次郎に

当たっていなかった。それに木偶の棒が拳を振り翳している最中  
に俺を片手で抱いている

ぐらいだったから。

「お兄さん大丈夫ですか?」

「え!?!あ、はい・・・」

急に聞かれたため思わず間抜けな返事をしてしまった。木偶の棒

はキョトンとしていて、

もう1人の少年は無言で千次郎を睨みつけていた。

「皆さん。ちよつとこつちに・・・」

「えーはいっ!!」

千次郎の言葉に誘われる様に俺達は勝手に足が動いていた。止めようと思つても勝手に動く。

この時俺はこう思った。やつと助けに来てくれたと。特にみほと呼ばれていた少女は千次郎を見てびっくりしている。千次郎は木偶の棒達から少し離れたところに来ると突然、

「すみませんでしたっ!!」

「!?」

!!!!!!

「え!?!」

「何!?!」

「どうしたんだ?」

それは謝罪だった。千次郎は頭を下げたまま続けて言う。

「すみませんでしたっ!!俺の・・・俺のせいでこの大洗がめちゃくちゃになって!!」

「本当にごめんなさいっ!!」

「・・・」

梓さん達は黙つて千次郎を見ていた。

「だからさ!!この大洗をめちゃくちゃにしたアイツらは俺が責任を持って闘う!」

「だから皆はここから離れてくれないか!!」

「そう言い終えると千次郎は顔を上げた。皆少しの間何も言わずにただ見つめていた。」

するとオレンジのロングヘアの少女が口を開いた。

「今私・・・ハッキリ言つてあなたを信用していいか分からない」

「・・・」

「正直あなたのせいで私達は、大洗の人達は無差別に殺された・・・」

「・・・」

「本当なら今すぐぶん殴つてやりたいけど・・・あなたがあの変

な化け物を

やっつけつてくれるんだったら」

「……くれるんだったら?」

「私達はあなたを許します」

少女は真剣な目つきで千次郎に思いをぶつけた。後ろには皆が無言で頭を下げた。

そんな様子を見ていた千次郎はニコツと笑い親指を立て少女にこう言った。

「……任せる! ぜってえー負けねえから!!」

そう言っている所を見て俺は思った。この少年青田千次郎に懸けてみよう。

千次郎はニコツと笑った後俺の方に顔を向けた。一体何をされるんだろうと思ひ

身構えてしまった。しかし千次郎は俺に向かって歩いてきてポケットから何やらさら豆のような

豆を渡した。

「これは仙豆って言って、これを食べたら傷が回復するんです。お兄さんは肩に穴が

空いているからこれを食べて下さい」

そう言つて俺の口に仙豆を入れてくれた。正直顎を動かすのもしんどいが治ると言われたので

必死に噛む。ポリポリと音を立てて飲み込むと突如体が少し膨らんだ。

「うわあ!! 膨らんだ!」

「大丈夫。すぐ戻るから」

少し膨らんだ後体がまるで空気が抜けたボールの様に抜けて言つて穴が空いていた肩が

みるみる塞いでいき、俺の体は試合観戦の時みたいに傷一つも無く綺麗に治った。

慌てて肩を触るとちゃんと塞いでいた。塞いだことを理解すると俺はますます千次郎のことが

不思議に思った。

「本当に治ってる・・・」

「でしょ！凄いですよね仙豆の力って!!」ニコツ

とてもニコニコしながら俺の方を見つめてくる。今から闘うっていうのに緊張なんかしないのか？そうイザコザしていると突然みほと言われていた少女が千次郎に向かって話しかけた。

「あ、あの!?!」

「うん?」

「私のこと覚えてますか?」

「え?えーつと・・・あ!!あなたは!!」

「はい。西住みほです」ニコツ

「みほさーん!!!」

千次郎は大きな声を上げてみほの手を握ってブンブン上下に揺らした。どうやら顔見知りらしい。

「みほりん。この青田って人知ってるの?」

「うん!だってこの人が私の戦車道を素晴らしいって言ってくれて人だもん」

「そうなのってええーん!!!」

「そ、そうだったんですか」

「西住殿の戦車道を最初に褒めた人・・・」

「意外だ・・・」

「いやーみほさんとここで再会とは運が良いなあーへへ」

そう千次郎が笑っていると、

「もうそろそろいいか?死ぬ前の会談は」

「!?!」

「ああもう充分だ。もう行くから先に待っててくれよ」

「そう言ってもなあナツパの野郎が早く呼べと言ってるんだ」

何と木偶の棒と一緒にいた少年が自分達の上をフワフワと空中を浮きながら俺達を

見下ろしていた。それにも驚いたが俺が一番驚いたのは千次郎の態度だった。

嫌千次郎は分からないのだろう。コイツらが沢山の人を無差別に殺しているだなんて。

「さて……じゃ俺行ってくるわ!! あ! そうだ! お兄さん!!」

「な、なんだい?」

「みほさん達のこと……頼んだよ」

「え!?! ちよ、ちよつと」

「大丈夫。お兄さんならちゃんと守れる」

まだわかつたつと言つてもいないのにそそくさと千次郎は少年と何処かへ行つた。でも……

「……よし!! 皆さん今からここを離れましょう! 俺について来て下さい!」

こんな俺を信じてくれてるんだ。だから今度は必ず守ってみるよ。  
千次郎。辻本。



「悪いな。遅れちまつてよ」

「き、貴様……」

一方慎也に連れられてやって来た千次郎はナツパに対して発破をかけていた。

そしてニヤニヤと笑っている。

「なんだあそのツラは……ますます気に入らねえな……」

ナツパはその笑みに怒りが込み上がっている。そう感じているのだと思うと

千次郎はニヤニヤを止められなかった。

「へっへっへっ……そんなにあっさり殺してほしいのか?」

少し大きく高笑いしながら千次郎を脅すナツパ。すると千次郎の



顔からニヤニヤが消え、

眉を顰めた。千次郎はナツパから視線をずらして辺りを見回した。そしてゆっくりと喋り始めた。

「大洗の町を・・・こんな蠟燭のろうが溶けたみたいにしたのは・・・どっちだ?」

「あーそれか。俺がやったんだ。お前を殺す為にわざわざな」

「わざわざか・・・どうやったんだ?」

「何。空から火球を落としただけさ」

「そうか・・・」

そう言うと突如千次郎の髪が揺れ始めた。そしてそれに便乗すると言わんばかり

千次郎の周りの地面にヒビが入り、石などが地面に逆らって浮き始めた。

「許さねえぞ・・・!!きさまら~~~~!!」ゴゴゴゴゴゴ

「ぬ・・・ぬぬ・・・!!」

「戦闘力7000・・・8000・・・!!馬鹿な・・・!!!」

「何!地震?」

「違うあの青田って人から物凄い気が・・・」

「凄い・・・」

「一体何者何だ。彼は・・・一体・・・」

その余りにも千次郎から出ている物凄い気が慎也とナツパそして逃がっている

最中の修平達を驚かせていた。

「し、慎也・・・青田の戦闘力はいくつになった!!」

「8000以上だ・・・!」グシヤ

「は・・・8000以上・・・!?!」

スカウターを壊し、汗を一滴流して伝える慎也。それを聞いたナツパは口を大きく開けて

千次郎の戦闘力に驚愕していた。一方戦闘力などという物など知らない千次郎は慎也の方を

向いているナツパを睨みつけている。

「心配するなデブ野郎。テメエには界王拳は使わねえよ……」  
「カイオウケン!?!」

何だそれとは思ひ千次郎に聞こうとした慎也を遮る様にナツパが千次郎に突っ込んでいった。

「テメエみたいな尻の青いガキにこのナツパ様が敵うわけがないんだ!!!」グアアアア……

大きな声を上げて千次郎にタツクルを喰らわそうとした。それを予測した千次郎は、

ズン!

目にも止まらない速さでナツパの後ろに動き、頭に蹴りを入れた。

(なにっ!!!?)

「グワアアアア!!!」ズダダッ

「え………」キョトン

「う……うぐつ……!!!い……いつのまにう……後ろへ……!?!」

一体何が起こったのかナツパは分からなかった。すると千次郎がナツパを見て鼻で笑いながら、

「威張ってるわりには大したことないな。おデブちゃん」

ナツパを馬鹿にしていた。遂に大洗に到着した千次郎。界王星の修行の成果は

正にサイヤ人もびつくりするぐらいの凄さ。このままの勢いでま  
ずはナツパを倒そう!

行け!! 千次郎!!

「来いよ……おデブちゃん」

## STAGE 7 ナツパ手も足も出さず!!

「来いよ。『おデブちゃん』」

「き……きさまあ……!!!」

ナツパに手の甲を向けクイクイと指を動かし、挑発する千次郎。そんな対応にナツパは眉間に血管を溜めて沸騰寸前だった。

「威張ってるわりにはよーもつと本気出してくれないか?」

「な……!!!なんだとお……!!!」

「一体どうやったんだ……?いま……!!!」

「凄……」

(妙だラディッツと闘ったときとはまるで戦闘力が違う……!)

千次郎の急成長に唯一気づいている慎也以外は皆驚いている。修平達は口をポカーンと

開けていて、ナツパは馬鹿にされたことをきっかけに更に眉間に血管を溜めていた。

「こつこの俺様がたいしたことないだ……!!!」

「そうだ。今の攻撃で分かった」

「ふ……ふひひひ……俺様がたいしたことないのがわかった……!?!」

「何だよ。急に気持ち悪い笑い方すんなよ」

「どうわかったのかじっくり教えてもらおうか……!」ブウウウーン

そう言うとナツパの体中に気が纏わりついた。いかにも凶々しいと言わんばかりの気が。

そんな気を見て千次郎はボーっとしていた。そんな態度が鼻についたのか次の瞬間

物凄い勢いで突っ込んできた。

「ウオオオオオ!!」グワァ

突っ込んだと同時に蹴りを2発千次郎にぶつけた。しかし、

千次郎はナツパと目線を変えずにゆっくりと避ける。

「くっ!!!」ブオオオオツ

ナツパは必ず当ててやろうとパンチや蹴りなどをさらに早く入れ

始めた。が、千次郎は先程一向

変わらず片足を上げて避けたり、ジャンプしたりして平然と避けている。その行動がますます

ナツパの癩に触っていると知らずに。

「かあああー！ー！！」ブンツ

最後に右のストレートを出し、どうだと思いい様子伺うと、

「何?！」

何とそこには誰もいなかった。慌てて周りを見回すと、

「おい。こつちだ」

何とナツパから少し離れた所にポケットに手を突っ込んで立っていた。

それを見たナツパは口をポカーンと大きく開けていた。

「み……見えましたか……?千次郎さんの動き……」

「い……いや全然だよ……」

そつと瓦礫の後ろから覗いてみほと修平も驚きを隠せなかった。

こうして3人が驚いているにも関わらず、異様に落ち着いていた者がただ1人だけいた。

(どういうことだ……青田の奴どうして短期間のうちにこうも力をつけた……)

腕を組みながら真剣な目つきで見ているのはナツパと共に地球にやって来た戦闘民族サイヤ人の

阿散井慎也だった。慎也は何故千次郎がこの短期間でこうも力をつけたことに違和感を

感じていた。そう慎也が思っていた時千次郎がナツパに向かって超スピードで近づいた。

ナツパは来ると思い両手でガードしようとした。しかし一向に殴ってこない。

一体何だったのかと思いいゆつくり両手を下ろすと、

「あのさーお前いい加減にしろよ。こつちは久々に本気でしたいんだけど?」

「な!!!」

何とナツパの頭の上に千次郎がつまらなさそうな目つきで立っていたのだ。

これに対してナツパの堪忍袋の緒はとうとう完璧に切れてしまった。そして次の瞬間、

「ぬおおーっ!!!」パンツ

頭の上に乗っっている千次郎を両手で攻撃した。しかし、ズンツ!

簡単に避けられ、拳句にはボディブローを1発喰らってしまった。

「おぐぐぐぐぐぐ．．．．．!!!」

「今の1発は、亡くなった大洗の人達の恨みだ!」

よろめかけているナツパに低い怒声を出しながら伝える千次郎。

「ずああっ!!!」ブンツ  
バカッ!!

「これは自分の家を無差別に壊された人達の恨み!!!」

ナツパの蹴りを避け今度は顔面にストレートをお見舞いした。ストレートをモロに喰らった

ナツパは一気に遠く離れた大洗マリントワーまで飛ばされた。が、直ぐに体勢を整え直して

突っ込んで来た。

「このくそガキイイゝゝゝ．．．．．!!!」

たった1人の少年に、しかも地球人にコテンパンにされたナツパの顔は最早痺ましかった。

千次郎に目に物をくれてやろうと左手に気弾を作っていた。

「それでも喰らいやがれっ!!!」ドン!

そして集めた気弾を千次郎にぶつけた。しかし千次郎は逃げずに立ち止まっていた。

段々と近づいてくる気弾に向かって仁王立ちになり、

「こんなの避けるまでもねえ!!」

「かああっ!!!」ボツ

大きな叫び声を出して何と気弾を気合いだけで弾き返したのだ。

「な……なにいく……!!?」

「気合だけで消し飛ばしやがった」

これにはナツパも、普段あまり感情を出さない慎也でさえ驚きが隠せなかった。それに、

「凄い！さっきのアレを弾き返しましたよ!!」

「みぽりんの知り合い……物凄い人だね！」

「凄い……本当に……」

「こんな人が地球に存在していたのか……!?!」

遠く様子を伺っていた修平達も心を震わせていた。そんな周りの態度を全く気にしていなかった

千次郎は、今度は自分から突っ込んでいった。ナツパは身構えていたがもう自分の背後に

回っていた。そして両手の指を交わらせて1つの拳にし、

「こいつは、みほさん達の恨みだ!!」ドゴツ

ナツパの頭に思い切りぶつけた。ナツパは重力に従うように下に落ちていく。

しかしそれよりも早く千次郎は動き待ち構えていた。

「そしてこれは、お兄さんの恨み!!」バキッ

そう言いナツパにドロップキックをかました。ナツパはくるくる回りながら

ビルにぶつかってしまった。ビルから出てくると、体中に硝子が刺さっていた。

それにまた気づくとさらに怒りを覚えた。

「ちつくしよおおお……!!!!ちつくしよおおお……!!!!

!!!!」  
「ツ！なるほど。とんでもねえタフなのは流石だな！」

「うるせえ!!俺は名門出のエリート戦士だ!!貴様みたいな

ガキなんかには舐められてたまるかつ!!!!」

「おいおい……肩書きで勝負なんかすんなよ」ハァー

余程自分に押されているのが悔しいのか肩書きで勝負してきた。

それに額に手をつけて呆れている。まあ本当は自分も言えないの

だが。

(未来ではフリーターだから。)

「す、凄い!!!本当に凄いぞ千次郎!!!」

「この勢いだっいたら勝てるかもしれない・・・!!」

「行つけーっ!!!」

「千次郎さん・・・本当に凄い・・・!」

一方呆れている千次郎を引き替えて、喜んでいる修平達。このままいけばナツパを

やつつけられる。千次郎ならやつてくれる。そう皆思い始めたのだ。

そんな声援が聞こえてくると、ナツパはさらに眉間に血管が溜まってきた。

そんなナツパを見て慎也が一喝した。

「愚か者め!!!頭を冷やせナツパ!!!冷静に判断すれば捉えられん様な

相手ではないだろう!!!落ち着くんだった!!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・!!」

「そ、そうかありがとよ慎也・・・お・・・おかげで目がさめたぜ・・・」

慎也の一喝に何か閃いたのか千次郎を見て少しニヤつきを覚えたナツパ。

一方の千次郎はナツパをじつと見ていた。

(ちっ!単細胞の馬鹿めが・・・!この調子では俺の出番が回ってきてきそうだぜ・・・・・・・・)

ナツパの調子を見て自分の出番が回ってくることに苛立ちを覚えている慎也だった。

徐々に徐々にナツパを追い詰めていく千次郎。しかし慎也の一喝で何か閃いたナツパに

さつきと同じ様に攻撃して慎也を戦いの場から引きずり込むことが果たして出来るのか。

さあどう動く千次郎!!そして界王拳はいつ出す!?《続く》

STAGE 8 界王拳の謎

「確かに俺は頭に血がのぼっていた……これからが本当発揮の時だ……  
覚悟はいいか……?」

「そうこなくちや男じやないぜ。おデブちゃん」。期待してるよ……」  
「へへっ強がりいいやがって……」

(強がりなどではない……。奴は余裕と絶対の自信を持っている……)  
ナツパの掛ける言葉にやや少し笑顔を見せる千次郎。それを強がり  
りだと思つてニヤついている

ナツパと千次郎の力を少し気づいている慎也。そしてその3人を  
瓦礫に隠れながら密かに

応援している修平とみほ達。

「そうやって言えるのはもう終わりだ。はああああああ……!!!!」ズ  
ゴゴツ

ナツパは掛け声と共に気を溜め始め、ナツパの体はすぐさま気に纏  
われた。千次郎は、

ナツパとの視線を変えずただじっと見つめていた。そんな千次郎  
を見てナツパはニヤツとして

指を天に上げてクイツとした。

「いけない!!あれは!!」

「!!」

ズオアツ!!

突如千次郎に向かって大きな爆発が起きた。でも、千次郎はいち早  
く爆発を理解し上に

飛んでいた。しかし、それをナツパに見られてしまった。

「見えたぞつ!!!」ボンツ

そう言うとナツパはジャンプし千次郎に近づいた。そして千次郎  
に近づいた際大きく腕を振って

パンチして来た。しかし千次郎に簡単に避けられ、千次郎の右足か  
ら蹴りが飛んできた。

「くつ!!」シャツ



何とか避けようと動き、蹴りを交わした。そこからは2人の激しい組み手が始まった。

それを腕を組みながら見ている慎也と、目と首を使って懸命に見ている修平達だった。

そう観ている者達を知らずに一旦2人は打ち合いを終えた。ナツパは息切れているが、

千次郎は顔色一つも変えていなかった。

「へ〜〜！随分とマシになったじゃないか！」

「くつくつくつ・・・マシになっただと・・・？」

「その・・・忌々しいへらず口を叩けなくしてやるぜ・・・！」

「これで終わりだ・・・！」カパッ

そう言うとナツパは大きく口を開けた。一体何をするのかと思いいじつと見ていると、

ズボツ！

ギャーン！！

「な！！」

何と口から光線を出したのだ。これには千次郎もびっくりしてしまった。

千次郎はすぐに光線を弾き返す為手を前に出して、

「波つ！！」バツ

手から凄まじい気弾を出して、ナツパの光線を蹴散らしてしまった。

ズアウオツ!!!

そして大きな爆発音を鳴らした後、途轍もなく強い風が吹いた。

「わあっ!!!」

「きやあっ!!!」

「なんという奴だ・・・!!あんなに近い距離から一撃で切り返しやがった・・・!!」

修平達が声を出している中慎也だけが千次郎を少しばかり称賛していた。

「ふうっ・・・今のはまともに喰らったらヤバかったな・・・!!」

「……………」

「うん？どうした。そんな変な顔をして？」

「今度こそは一泡吹かせてやったと思っていたが押しつけられた為、ナツパはあんぐりしていた。」

「バ……馬鹿な……!!!オ……俺の……俺の最高の技だぞ……」

!!!

それを……簡単に……お……押しつけやがった……」

!!

「本当にタフな野郎だ……！気弾は少しは喰らったはずなのに……」

!!

「このままじゃラチがあかねえ……」

「もういい!!降りてこいナツパ!!!貴様ではラチがあかん!!俺が片付け

てやる!!」

「し、慎也……」

「情けない奴だ……まさか地球人のガキ相手にこの俺がわざわざ動くことになるとはな……」

「何だアイツ？ちよつと生意気だな」

「遂に慎也が痺れを切らし動くと言ったナツパは物凄い力で歯を噛み締めた。なぜなら自分で片付けると言ったのに押されているからだ。それに対して千次郎は、慎也の言動に生意気だと思

ったのか少し眉を顰めている。

「い……いよいよあの少年が……」

「え？多田さんは知ってるんですか？」

「ああ。なんせ千次郎が治してくれる前まで肩に穴を開けたのはあの少年だからね」

「そうだったんですか……」

「ですが私達とほとんど歳が変わらなく見えるのですが」

「駄目だよ。そんな風に見ちゃ……あの木偶の棒でさえあの少年に怯えていたんだからね」

一方修平は、慎也が動くと言った瞬間背中が冷え始めた。なんせ千

次郎が治してくれる前までは、肩に光線を喰らっていたからである。最初は皆歳が変わらなそうに見ていたが、修平の話を聞いていくうちに段々と恐怖を覚え始めた。

「ち……………ちくしょう……………き……………貴様ごときに……………し……………慎也に貴様の処刑を譲るとは……………」

ナツパは、眉間に血管が溜まりに溜まり溜まっていたが次の瞬間顔にまたニヤつきを覚えた。

そして千次郎にその顔を見せながらこう述べ始めた。

「覚悟しておけ……………慎也にかかれれば貴様など一瞬の命に……………」

「アイツに俺がか？嘘言うなよ」

「ふ……………奴は惑星ベジータの中でも唯一の『地球人』だった  
が天才戦士だからな」

「へー地球人なんだなあ……………って、え……………」

「何だって……………」

慎也が地球人と聞いた瞬間千次郎の顔から驚きが出た。修平も慎也が地球人だと聞いた瞬間

驚きが隠せなかった。それには近くにいたみほ達も驚愕していた。

「命令だから貴様は慎也に任せる……………だが俺様もただ引っ込ん  
じゃ気がすまん……………」チラッ

「？」

「何だ？俺達の方を見て……………」

「最後にコイツらだけは殺しておく……………」ギユン

「しまった……………お兄さん達を……………」

気がついた時にはもう遅かった。ナツパは物凄いスピードで修平達に近づいていた。

それを止める為に追いかけていくも、間に合わなかった。

「死ね……………」カパッ

「うわああ……………」

ナツパは口を大きく開けて、修平達に光線を飛ばそうとしていた。

千次郎は、何としてでも

止めようとする技を発動しようとしていた。

「ちつ！あんなに格好つけて言ったけど、仕方ねえ………《界王拳》!!!」

そう言った瞬間千次郎の体中がとても赤いオーラに包まれた。すると、さつきまで遠く離れていたのがみるみる近づき、

「うおりやー!!!」ドンッ

「グハアッ!!」

何とそのまま体当たりしてしまった。突然の出来事にナツパはなす術もなくクルクル回りながら

重力に逆らって落ちてくる。しかし千次郎は、赤いオーラを出しながらナツパが落ちるよりも

早く地上に着きナツパの背中を両手で持ちキャッチした。

「ふうー助かった」

「あ……ぐ……う……!!!」

「へ!？」

「た、助かったのか………」

「凄いです!」

「何だったのあの赤いのは?」

これには死を覚悟していたみほ達もびっくりしていた。

中でも優花里は、大きく手を上げて喜んでいる。

「ほらよ」バッ

ドス……ン

「あ……あうう……!!!し……慎也……!!!」

「もう闘えない筈だ。おデブちゃん連れてとつと地球から消えろ!!」

さつきまであんなにニヤついていたナツパが今ではもうボロボロの雑巾になってしまった。

それを見た慎也は、少し焦った。

(な……なんだ今のは……い……一瞬にしてスピードもパワーも急激に伸びやがった!!)

慎也は、千次郎の一瞬の急激な変化に対して驚いていた。そして疑問も浮いてきた。

何故地球人なのにこれほどまでに「強い」のかと。

「さあ次は、お前だ。『生意気ヤロー』」

キリツとした目で慎也に言った千次郎。その顔は自信満ち溢れた顔だった。

ナツパを倒しとうとう慎也を闘いの場に引き摺り落とした千次郎。

しかし、今度はナツパの様に上手く行く気がしないが、界王拳があれば無双できる！

さあ次は慎也だ！行け！！千次郎！！

STAGE 9 動き始めた帝王・・・!

「あ……うう……ち……ちくしょう……」  
(な……なんだ今は……い……一瞬にしてスピードもパワーも急激に伸びやがった!!)

突如千次郎が発動した界王拳に驚きを隠せない慎也。

そしてその驚きに乗るかの様にボロボロのようになって横たわるナツパ。

「さあ次はお前だ。『生意気ヤロー』」ギロツ

鋭い目つきで手をクイクイと動かし、来いと伝える千次郎。その顔は自信に満ち溢れていた。

「せ……千次郎さん……さつきのは一体……?」

「さつきのは《界王拳》っていうやつだよ」

「《界王拳》?」

「体中の全ての気をコントロールして瞬間的に増幅させるんだ。

上手くいけば力もスピードも破壊力も防御力も全て何倍にもなる……!」

「凄いですね!それは誰から教わったのですか!」

「ああそれは界王様って人から教わったんだ」

「界王様とは誰ですか?」

「俺のまあ……師匠っていう関係の人かな」

「す……凄い……!!あ……あんなに強いのにまだ何倍も強くなれるのか……!!」

「さつきから一体何を言ってるんだ……?」

わちやわちやしている千次郎達を見て少し苛立っている慎也。

そんなことを知らない千次郎は、自信に満ち溢れている顔で界王拳のことを

修平とみほ達に教えている。

「千次郎……その《界王拳》というのがあったら何故最初から出さなかつたんだ?」

「そうですね!そんなとっておきがあるなら始めつからやれば良かった

たじゃないですか!？」

「へへごめんねみほさん。確かに最初から使ってたら楽に勝てたかもしれない……」

でもそういうわけにはいかないんだ」

「えっ？」

「もし上手く気を抑えながらコントロールしないと俺自身がまいっちゃうんだ……」

「どういうことだい？」

修平は、目を丸くしながら千次郎の発言に質問した。

「つまり……」

そう言うと千次郎は、修平にゆっくりと次のことを伝え始めた。



「よっしゃー!!遂に出来たぞ!!」

「ウホッ!!!」

「……とうとうやりよった」

遂に界王拳を会得し喜びに満ち溢れている千次郎。バブルス君と一緒に手を繋いで踊っている。

周りから見れば千次郎がバブルス君を振り回しているように見えるが。

「千次郎」

そう2人が踊っている際、界王は、そっと千次郎に声を掛けた。

「うん？何界王様！」

ニコニコしながら界王を見つめる千次郎。どうやら褒めてくれると思っっているのだろう。

「この私ですら成しえなかった界王拳をよくぞここまでものにしたな……素晴らしいぞ千次郎……」

「だろー!やっぱり努力つてのは大事なんだな界王様!!」

「その通りだ。しかし・・・」

「しかし?」

「くれぐれも言うが今のレベルでは界王拳をあまり多用してはならんぞ」

「え!?なんでどうして!?!」

「せっかく無理をしてまで会得した界王拳を多用すると言われて、驚いている千次郎。」

「まあまあ話を最後まで聞け。何も使ってはならんと言ってはいない・・・」

「ただ使い過ぎるなど言っただけだ」

「界王様はコントロールを誤れば己の身も壊すことになるからだ」

「そうなの・・・?」

「そうだ。だからせいぜい2倍までのパワーに今は抑えておけいな」

「・・・」

「それを超える界王拳はお前のカラダに負担が大きすぎるのだ……つまり界王拳にカラダがついていけずしつぺ返しをくらうことになる……分かったな千次郎」

「・・・うん。よく分かった!」

こうして千次郎と界王の間にこの様な約束が出来ることとなった。



「・・・ってわけ。分かった?」

「・・・要するにその界王拳というものは、パワーアップするというメリットがあるが

その分肉体に負担がかかるデメリットがあるということだな」

「そういうこと!えつと・・・名前は・・・」



「麻子だ」

「あー！ありがとう麻子さん!!」

「麻子が自分から名前を教えるなんて・・・」

「え？珍しいのですか？」

「うん・・・」

「でも冷泉さんのおかげで大体のことは分かったよ」

麻子の解説のおかげで大体の者達が界王拳について分かった様だ。

「し・・・慎也・・・た・・・助けてくれ・・・!」  
「・・・」

一方少し賑やかな千次郎達とは対照に暗い気持ちが続いている者達がいた。そう慎也とナツパだ。慎也はまだ何も被害を受けていないがナツパは先程千次郎に界王拳をまともに喰らってしまった

ため横たわっている。そして今ナツパは慎也に助けを求めている。そんなナツパを見て可哀想だと思ったのかゆっくりと手を差し出した。

「す・・・すまねえな・・・慎也・・・」

「なあに・・・」

ガシツと慎也の手を掴み感謝の気持ちを出すナツパ。その感謝の笑みを見ながらニヤツと顔を

歪ませる慎也。まるで何かを企んでいるかの様に。だが、そんな風に考えていないナツパは

慎也の手をガシツと掴んでいる。しかし、次の瞬間、

「覚えているか？俺が言ったこと・・・」

「・・・何だ？」

「同じ誤ちを犯したら『殺す』と言ったことをな!!!」ブアツ

「え!!!」

何と慎也がナツパを掴みながら、高く空中に投げたのだ。

「え!!!」

「は・・・!？」

「何!？」

これには千次郎達もびつくりしていた。吹き飛ばされたナツパは

空高く吹き飛ばされていた。

「わあああーっ!!! なつなを．．．!!! 慎也!!! 慎也ーっ!!!」

「動けないサイヤ人など必要ない!!! はあああーっ!!!」 ブウーン

そう言うのと慎也の体中からとてつもなく凶々しいオーラが纏わりついていた。

「なつなんて気だ．．．!!!」 ビリビリ

この凶々しいオーラに千次郎は、冷や汗を一粒流した。そして、これから起こる出来事に

一人だけ勘づき、そつとみほ達と修平の服を握った。

「死ね!!!」 ビツ!!

「待っ．．．待って!! し．．．慎．．．!!!」

カツ!!

「くっ!!」

「ふぐウおおお!!!」

ドズウーン!

遺言を残せぬままナツパは肉体諸共砕け散った。

ズアオツ!!!

「ふっ．．．!!!」 ニヤツ

ナツパを殺した後凄まじい爆風が慎也に響き渡った。

慎也によって引き起こされた爆撃により先程までであった瓦礫の山やドロドロに溶けた家などが

まるで消えた様に跡形も無くなってしまった。

「さて．．．」

何にも無くなった土地からぽつんと一人だけ立っていた慎也は、キリツとした目つきで千次郎を

睨んだ。まるで次殺すのはお前だと言わんばかりに。一方の千次郎は、いち早く勘づいた為

みほ達と修平の服を握って空に飛んでいた。

「な．．．．．なな．．．．．何て奴だ．．．．．じ．．．．．自分の仲間まで．．．．．殺すだなんて．．．．．」

「おお・・・大洗の町が・・・」

「どうしようどうしよう!!次は次は・・・!!」

「どうするんだ千次郎・・・!次に殺されるのは・・・多分僕達だぞ・・・!!」

「・・・」

周りが焦っている中1人だけ冷静を保っていた千次郎は、このままではマズイと思ったのか

1番最初に抱き抱えていたみほにそつと耳元で話した。

「みほさん・・・」

「ふえ?な、何ですか!」

「ここよりずーっと安全な場所ってどこにあるか分からないかな・・・?」

「安全な所ですか・・・ここからだつたら病院かな・・・」

「そっか・・・」

そう言うと千次郎は、一息ついた後もう一度みほに話しかけた。

「みほさん・・・お兄さん達と一緒に今すぐ病院に向かつてくれ!」

「え!」

「もしこのままずっと俺と一緒にいたらみほさんの命が危ない。

だからお兄さん達と一緒に病院に行つてくれ!頼む!!」

「・・・」

千次郎の必死の頼みが伝わったのか理解してくれた様だ。

「そうと決まれば・・・皆!!聞いてくれ!!」

「え!」

「何!」

「何だ!」

「・・・何だ」

突然大きな声を出したせいかみほ以外びつくりしていた。

「皆!!これから言うことをしっかり聞いてくれ!!」

「皆今すぐここから離れて病院に向かつてくれ!」

「!!「え!」」

「・・・そういうことか」

千次郎の発言に皆曖昧の様子だが修平だけは理解した様だ。

「何ですか!?!あなたがいないと大洗町が．．!!」

「違うよ。武部さん．．逆にそれが危ないんだ」

「え!?!」

「逆にこのまま千次郎といれば僕達の命が危ないんだ。なんせ千次郎は今からあの少年と．．」

だから僕達は、千次郎と離れなければならない．．．．．そう言いたいんだよね千次郎?」

「そういう事だよお兄さん」

修平の解説に皆段々と分かってきた。でも沙織だけはまだ分かっていなかった。

「でも．．．でも．．．」

「武部さん．．あの少年は凄過ぎるんだよ!!僕達と一緒に居ても何の役にも立たない!」

かえって千次郎の邪魔になるだけなんだ!!」

「すまない武部さん．．．．．アイツの強さは思ってた以上なんだ．．．．．でも絶対皆の約束は守る!」

だからここは俺に任せてくれ!!」

「は．．．はい．．．．．分かりました．．．．．」

なんとか沙織を宥めることは出来た様だ。

「そうだ千次郎!!どうせなら場所を変えて闘ってくれないか!」

「え!?!」

「僕達が逃げている間にもし攻撃が飛んできたら元もこうもないからさ．．．」

「それもそうだな．．．．．」

「．．．．．!お．．．お兄さん．．．．．ひよつとして．．．．．」

「な、何だ!?!」

「何。詳しいことは後で話すから．．．．．!も、もし千次郎が

あの少年に勝つ事が出来たら．．．．．!」

何かを隠している修平にみほは気づくも修平は誤魔化し通した。

「勝てたら……か……そうだなとかくまず勝たなきやな……何としても……」

「……千次郎さん」

「何をしている!!さつきまでの勢いはどうした!!怖気付いて逃げ出す相談か!？」

中々降りてこない千次郎達に発破をかける慎也。どうやら彼は、早く千次郎と闘いたいらしい。

「くそっ!!好き勝手言いやがって……」

「お兄さん気にしなくていい……俺が絶対勝つから……!」

「さーてとじや場所を変えて闘う前に……」

そう言うのと修平とみほ達を空中から下ろす千次郎。

皆全員下ろすと、後ろから1年生達がやって来た。

「先輩!!」

「皆!!生きてたの!？」

「はい!!何とか……」

「良かった!!」

1年生達が安否を知った途端に沙織はわんわん泣き始めた。

それを見た千次郎はグツと拳に力を入れた。それを見ていた修平は、そつと手を差し出した。

「千次郎……正直君が来た時ぶん殴ってやりたいと思ったよ……でも君は僕達の前に」

謝罪してくれて闘ってくれている……これで辻本も少し浮かばれるよ……

君1人に運命を任せるのは正直悪いと思っっているけど君に全てを託すよ。

絶対死ぬなよ千次郎……!」

そう言うとき少し瞳から涙がポロポロで始めた。その様子を見た千次郎は、自分が来るのが

遅かったことを改めて後悔した。だが、ここで落ち込んでも仕方ないと思ひ、差し出されて

修平の手を思い切り握った。修平との熱い握手を終えた後みほの方へ視線を変えた。

みほも視線に気づいたのかじつと見つめている。

「みほさん．．．生きて帰ってきたらまた一杯話そうな．．．！」

「は、はい！」

そう言うと千次郎はみほ達に手を振り慎也に近づいた。

「すまなかつたな」トントン

「ふつどうやら逃げてても無駄なのが知っている様だな」

「今からタイマンだ。場所を変えるぜ．．．」

「好きにしろお前が負けることには変わらないからな」

「タイマンで12戦全勝していてもか？」

「さあどうかなあ」

ビツ!!ビツ!!

そう言うと2人は、舞空術を使いながら大洗を離れていった。

その様子を修平とみほ達はまじまじと見ていた。

「．．．．．」

「．．．．．千次郎さん．．．．．」

「大丈夫だよみほりん!あの人ならやってくれる!」

「．．．．．うん．．．」

沙織の励ましの言葉に少しだけ自信なく答えたみほであった。

■  
一方の2人は、大洗町を抜け、隣のひたちなか市付近までやってきた。

「さすがだぜ。余裕でついてきやがる．．．!!」ギユウウン!

後ろからついてくる慎也に少し賞賛するも、これから闘う相手にはそんなのはいらなと思うたのか首を横に振り回した。

(そんなことより人も動物もいない所は・・・!!)

早く闘う場所を探そうと首を動かしていると、1つだけ何も無い荒地を見つけた。

それに気づいた瞬間顔を少し和ませた。

「よし!!あそこには人も動物もいない!!降りるぞ!!」

そう言うと2人はまるで消えたかの様にシヤッと動いた後それぞれの場合に足を下ろした。

千次郎は、キリツとした目つきで睨む中、慎也はニヤニヤしながら、「なるほど。ここを貴様の墓場に選んだ訳か・・・くつくつく・・・」

そしてこれから茨城県ひたちなか市獅子前で一騎討ちが始まろうとしていた! 《続く》

# STAGE 10 一騎打ち!!千次郎VS慎也!!!

「くつくつく……喜ぶがいい。貴様の様な下級戦士が

スライパー超 エリートに遊んで貰えるんだからな……」

「へへっ生意気な野郎だ……遊ばれるのはどっちか教えてやるよ」

慎也の言葉に少しイラツと来たのか目つきが段々悪くなっていく千次郎。

しかし、慎也は続けて言う。

「なあ……天は人の上に人を造らずという言葉を知っているか？」

「ああ、知ってる」

「確かあれは、人間は生まれながらに平等であって、貴賤・上下の差別はないという

意味があつたな……」

「……」

「だがあれは嘘だ。何が生まれながら平等だ……何が上下の差別が無いだ……」

俺はその言葉を知った途端に怒りを覚えた」

「……」

慎也の謎の発言に千次郎は黙って聞いていた。

「俺がいた惑星ベジータは、生まれてすぐガキの素質を検査される……その時数値が低く、

何も出来ないゴミ共は殺されるのだ。要するに貴様もそのゴミ共と同じで

いわゆる落ちこぼれという奴だ……」

「ああ落ちこぼれだ。昔から勉強も運動も出来なかった……いつも弟と比べられた……だから毎日

この世が憎くて、喧嘩ばかりしていた……あの家の憎い気持ちを全部ぶつけて……でもよ、

こんなどうしようもない俺を応援してくれた奴がいたんだ……今そいつは……」

「おいおい……貴様の昔話など聞く気なんてないぞ。そんな話は大嫌



いななのだからな」

「そうかよ。でもこれだけは聞かせてくれ・・・！」

「何だ？」

「さっきテメエが殺したあの『おデブちゃん』が言っていたことは本当なのか？」

どうやら千次郎は、これだけは聞きたかった様だ。

千次郎が言ったことに対し、慎也は少し眉を顰めた。

「あああれか・・・。」

「テメエ・・・本当に地球人なのか？」

「まあそう焦るな・・・簡潔に言えば『元』地球人だな」

「『元』だと？」

慎也の答えに少し首を傾げる千次郎。しかし次の瞬間、慎也は千次郎に衝撃の言葉を放った。

「どうせ信じぬとおもうが俺は・・・。『タイムリーパー』だ」

「何!!!」

今何と言っただろうか。タイムリーパー。まさか自分以外にタイムリープしている者がいるのか。千次郎の頭の中はぐちゃぐちゃだった。

「どうした？まさか信じているのか？」

「い、嫌別に信じてなんかいねえよ！」

「ふん・・・。誤魔化すのが下手だな。正直に言ったらどうだ」

「だから信じてなんかいないって言ってるだろうが!!!」

何が何でも慎也に自身もタイムリーパーということがバレたくない千次郎。

「まあいい・・・。ここからは貴様も信じるか信じないか好きにするがいい・・・。」

俺はこの世界にタイムリープしたのは20年前だ」

(俺よりも倍だ・・・)

「当時7歳だった俺は、身体こそは変わってしまったが

精神だけは20年前と変わらなかった・・・。」

(今の俺とそのまんまじゃないか・・・!)

今の自分と同じ状況に驚きが隠せなくなっている千次郎。

「そして、この世界にタイムリープしてから3年経ったある日俺は、ある宇宙人に連れて行かれた。そいつの名は今は亡き『ベジータ王』と呼ばれた男だ」

「ベジータ王?」

「そう奴は惑星ベジータの王であり、力も頂点に立つ男だった。そしてその日から俺は、

死と隣り合わせの訓練を受けた・・・本当なら逃げ出したかった・・・

でも『アイツ』を殺す為だと思い、全て耐えた」

「アイツ?」

「そうだ・・・俺は20年前にタイムリープする前に・・・妹を殺された・・・」

「殺されただど!?」

「そうだ・・・!どれも全部『アイツ』のせいで妹が・・・!!凛菜が・・・!!!」

段々と言葉を述べるうちに慎也の顔はまるで不動明王になっていた。これにはかつてラディッツと闘った際覚えた恐怖心を越えてしまったのか冷や汗が溢れ出ている千次郎。

これほどまでかと思いながら。しかし、収まったのか前と同じクルの表情に戻った。

「すまなかったな・・・あの日を思い出すと、こうやって我をたまに忘れてしまうんだ・・・!」

「・・・そうかよ」

「さてお互いの昔話はそこまでしておいてお前を・・・『殺す』か・・・!!」

そう言うのと左手を額まで上げ、右手には拳を作って構え始めた慎也。すると千次郎も、

「ハハッ『殺す』か・・・落ちこぼれが必死に努力すればどんだけ恐ろしいか見せてやるよ!」

そう言いながら右足を前に出して、やや屈みながら構えた。

「くつくつく・・・面白い冗談だ・・・では努力だけではどうやっても超えられぬ壁を見せてやるか・・・」

嘲笑いながら千次郎を見るも、直ぐに元に戻し睨み返した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

お互いが黙り込む中、ただ風だけ吹き続けていた。しかし、このままじっとしているはずもなく、

「行くぞー!!!シャバ僧!!」ビツ!!

「来い!!青田!!!」

千次郎が動いたことで、一騎討ちが始まった。



「うおりゃー!!!だだだだ!!!」ブンツ!

開始から早々左ジャブを打ち慎也の懐に入っていく千次郎。しかし、

「遅い!!」ブンツ!

「わ!!」

最初のジャブは簡単に避けられ、お返しにカウンターが飛んで来た。あまりの拳の速さに驚くも、自身の中にある野生の勘がいち早く動いてくれた。

「この野郎ー!!」バキツ!!

「う!!」バキツ!!

絶対に殴られてたまるかと飛んでくる慎也の拳に先程放った左ジャブをぶつけた。

「やるな・・・」

「テメエもな・・・!」

お互い少し賞賛した後、激しい激しい打ち合いが始まった。一方は攻めては一方は防御しての

繰り返してどちらも互角だった。

「りゃっ!!」ブンツ

打ち合いの中千次郎は、回し蹴りをするも慎也は後ろにジャンプして避けた。ジャンプした後、

近くにあった木を反動にしながらも一度飛び出していった。千次郎もそれに気づき、自身も飛び出していった。

「喰らえー!!!!」

慎也が近づいた瞬間、喰れてやろうと拳を作った。だが、

「遅いんだっよ!!」バキッ!!

「グハアツツ!!」

予想以上に早かった慎也の肘打ちがモロに入った。モロに受けてしまった千次郎は、

そのままぐるぐる回りながら木にぶつかりそうになったが、すぐさま体制を立て直し、

くるとジャンプしながら高く飛んだ。

「あの野郎ーどこ居るんだ・・・?」

高く飛んだ後、お返しに1発かましてやろうと思ったが慎也がいなかった。

どこに居るのかと思いきょろきょろ回りを見渡していると、

「!!!」

突如背中は何者かが居るのを感じ、すぐさま頭を下げた。誰だと思いい、後ろを見ると、

「ちっ!!避けやがった・・・」

何と先程まで姿を眩ましていた慎也がいたのだ。これには千次郎の堪忍袋が少し破れた。

嫌、元々完全に破けているのだが。

「っ!!テメエ!!後ろから攻めるなんて卑怯だぞ!!」

「おいおい・・・鬨いに卑怯もこうも無いだろう・・・こっちはお前を殺すつもりで

鬨ってるんだからな・・・」

「くそっ!!ああ言えばこう言いやがって・・・!!」

「喰らえっ!!!」フュンツ!!

そう言うと、慎也にハイキックを喰らわせるも、またかんだによけられてしまった。

そして、今度は、慎也のハイキックを受けそうになりギリギリで避けた。慎也のハイキックを

避けた後は、また激しい打ち合いが始まった。しかし、今回は慎也が押していた。慎也は、

打ち合いを続けながら千次郎に発破を掛け始めた。

「どうした!青田!!そんな程度じゃないだろう!!」

千次郎の攻撃を交わしつつ、言葉を述べた後、強烈な膝蹴りを御見舞いした。

「カハアツツ!!!?」

「ナツパの奴を倒した時はこんなもんじゃなかった筈だ!!」

「見せてみるっ!!!青田!!!」バキッ

そう言うと両手を一つの拳にして千次郎にぶつけた。そのままくるくる回りながら落下すると

思ったが、また直ぐ体制を立て直して田畑に着地した。自分が田畑に着地した後、

慎也も田畑に着地した。

「流石だ……奴はまだ全然本気じゃねえのにスピードも技も俺を超えてやがる……」

「……………」

明らかに自分との差があるのを理解した千次郎は、

ニヤニヤと顔を歪ませている慎也の気に応えて、

「おい!!テメエの言うことはわかったよ!見せてやるよ……!」

そう言うと千次郎の腕から白い気が纏わり付き始めた。次は足、次はお腹など体全体に気が

纏わり付くと、少し前屈みになった。少しの間前屈みになった後その時、

ギャーーン!!!!

とてつもなく眩しい光が千次郎を包み込んだ後、赤いオーラが千次

郎の周りを包んでいた。

体の至る所が赤くなっていて髪の毛も赤く染まっていた。

「これが《界王拳》だ……!!!」

「そうそれだ……俺が言っていたのは……!」

「まあそら焦んなよ……じっくり見せてやつから」

「つえい!!!」ブツ!!

そう言つて慎也に向けてバツと手を出した瞬間、

バゴツ!!

「!!」

何と慎也がいた田畑が爆発したかのように空中に舞い上がった。慎也はいち早く勘づき、

上へ飛んでいた。しかし、千次郎は、それを見逃さず光の様なスピードで慎也に向かった。

やがては慎也に追いつき、その勢いで右のフックを入れた。

「ううう……!!!」

「もう一丁!!」

ドガガガツ!!

少しよろめいている慎也を容赦せず、左ジャブを連続に打ち込む。もしここで手を止めて終えれば

どうなるか分からない為、千次郎はやめなかった。

「これでも喰らえ!!!」バカツ!

そして、渾身の蹴りをお見舞いすると、慎也はくるくると回りながら飛んで行く。

「まだまだぜ!!」ギャウン!!

勢いのまま千次郎は、絶好のタイミングを狙って突っ込んで行く。しかし、

「随分と殴りやがって……!」グツ!!

口から出た血を拭いた後、一瞬消えたかのように千次郎の間合いに入った。

「何!?!」

「ほらっよ!!」ドカツ

「ぐっ!!!」

突如顎に猛烈な蹴りを浴びた千次郎。その瞬間界王拳もフツと消えてしまった。

「か……ぐ……!!」

「くつくつく……今のが限界だとしたらとんだ期待ハズレだぜ……青田……!!」

余程効いたのか声も出ない千次郎。しかし、心の中では、

(な……なんて野郎だ……!へへ……でもよ……こんなヤバい時だつてのに

なんだかわくわくしてきたぜ……!)

そう心思いながらほくそ笑む千次郎であった。

遂に始まった一騎討ちは、最初はどちらも互角だったが現在は慎也が優勢だ。

果たして千次郎は慎也に勝つことが出来るのか!? 《続く》

## STAGE 1 天下分け目の超決戦!!

前回までのあらすじ

慎也の強さは千次郎の読みを更に超えていた……! そのパワーは戦闘力は2倍にした界王拳ですら

!!  
優位に立てるものでは無かったのだ……! どうする!? 千次郎

(へへッ……! こんなヤバい時だつてのになんだかわくわくしてきたぜ……! ニヤッ

「笑ってやがる……諦めて開き直ったのか……! それとも更に戦闘力をアップする余裕でもあるのか!？」

自分は追い込まれているのにも関わらず、慎也を見て笑っている千次郎。

そんな千次郎を見て慎也は、少し違和感を抱くも千次郎に戦闘好きなサイヤ人の血が

入っていないのを思い出すと、やっぱり諦めて開き直ったと感じた。

「そこまでが限界らしいな……ではこの俺が貴様の死に土産に見せてやろう……」

スーパー  
超 エリートサイヤ人の圧倒的パワーを……!」  
「見せてみるよ……!」

「くつくつく……その薄ら笑いもたちまち消え去るぞ……」  
は……!」  
ブウーン

次の瞬間、慎也の体中にバチバチと稲妻が起こり始めた。そして、辺りの光も閉じ始めた。

ヒュウウー

「!!」



荒々しい風が吹き、千次郎は少し動揺し始めた。辺りはすっかり真っ暗になり、

空からは稲妻が一向に止まらなかつた。それに加えて慎也の気は更に溜まっていく。

「な．．．なんて気だ．．．．．!!!ま．．．まるで地球全体が揺れてるみてえだ．．．．．!!!」

ゴアアアア

そして、凄まじい風が木をバラバラにし、千次郎の所にその破片を飛ばしてくる。

「これじゃ台風だなまるつきり．．．．．!!!」

そう言いながら、腕を出して顔を守る千次郎。

「はーはーはーはー!!!」

しかし、慎也が雄叫びを上げた瞬間、さつきまで荒々しく変わった空が雲一つも無い

快晴になっており、荒々しい風によって飛ばされていた木もゆつくりと重力に従って落ちていった。

「大気の震えが止まった．．．．．!!く．．．．．雲も全部吹き飛んじまった．．．!」

「ハッ!!」

!!ズズズズズ!!

振り返るとそこにはさつきまでとは違うオーラを持つ慎也がいた。そのオーラは段々と悍ましくなり、千次郎の緊張感を高めていった。

「終わりだ．．．．．青田．．．．．!!!」ギヤウ!!

「!!」

バギツ!!

突如物凄い勢いで、慎也が千次郎に頭突きを喰らわした。

「くっ!!」

突然の事だったので千次郎は動く事も出来なかつた。

鼻からは鼻血が出ている。しかし、それだけじゃなかつた。

ドスツ!!

「うっ!!」

頭突きを喰らって倒れたと同時に腹にエルボーを喰らってしまった千次郎。

ただ何も出来ずゆっくりと地面に落ちていく。

「糞っ!!!」ダッ!

しかし、やられたままは悔しいのかくるりっと一回転して

反撃しようと思いを睨み付けたが慎也は居なかった。

「フツ馬鹿め・・・後ろだっ!!!」ドカツ!!

「っ!!!」

何とあり得ない速さで千次郎の後ろに回っていたのだ。鋭い蹴りを喰らいぐるぐると

回りながら何処かへと飛ばされていく千次郎。何とか体勢を立て直し瓦礫の山に着地した。

「ちくしょー後ろから攻撃なんかしやがって・・・!!」

「どこにいるんだ・・・あ!!」

上を見るとそこには慎也がいた。何やら左手に気を溜めていた。

「喰らえっ!!!」ボツ

「!!」

左手に溜めていた気を全て千次郎にぶつけた慎也。

気弾は物凄い速さで千次郎に近づき、最早当たってもおかしく無かった。しかし、

「界王拳2倍!!!」

界王拳を出して何とか避けることが出来た。先程高く積もっていた

瓦礫の山は綺麗さっぱり無くなってしまった。何とか気弾を避けることが出来て、

安心していた千次郎を見て慎也はニタつと黒い笑みを浮かべた。

「フツやはり馬鹿だ・・・」ニツ

「死ね!!」ボツ

隠していた右手の気を千次郎に向かって放つ慎也。

「!!」

さっきので終わりだと思っていた千次郎は向かって来る気弾にワ  
ンテンポ遅れてしまった。

「ヤベエツ!!!」

ギューーン!!!」

しかし、何としてでも避けようとした為か道着に少しだけ触れただ  
けだった。

「フッフッフ……よーよーしいいぞ……よく避けたな……」

「ハアハア」

無傷で笑いながら闘って慎也に対し、千次郎は道着の右上半身が  
さっきの気弾により破れてしまった。

「ハアハアハア」スーローツ

肩で息をしながら、ゆっくりと降りる千次郎。さっきまではあんな  
に

元気だったのが今はかなりバテている。

タツ

「ちくしよ……!!なんてパワーとスピードだ……」

「2倍の界王拳でさえついていけねえ……」

「しようがねえな……」バリツ!

そう言いながら道着の左上半身を破る千次郎。そして、ある事を決  
意した。

「界王様は絶対怒るけど、体がぶっ壊れても死ぬよりかはいいや!

界王拳を“3倍”まで上げるしかねえ……!」

界王星に居た際、界王に言われていたことを忘れ3倍で挑むこと  
にした千次郎。

「くつくつく……今のはわざと避けやすくしてやったんだぞ  
あつさりと楽に死んでもらっちゃつまらんからな……」

「そうかよ……」

慎也の挑発にいつもと違って冷静に答える千次郎。これ以上喋れ  
ば気が乱れるからだ。

そう2人の会話を遠く離れた所にぽつんと生えている木にそつと

誰かが見ていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

その者は優花里以上にモジャモジャしている髪で、木綿の着物を着ており丸々とした体付きで腰には日本刀をぶら下げている。

（ち・・・近くまで来やがったからしようがなく様子を seen に来たら何なんだよ・・・！）

あ・・・あのチビも強えが、もう1人のチビも強え!!もうしかしたらカリン様が言っていた

チビかなアイツ? まあどっちも強すぎてまるで悪い夢見てるようだぜ・・・・・・・・・・)

そうその者の正体は食う事が好きなヤジロベーだった。ヤジロベーは今日大洗で

ご飯を食べていた所サイヤ人の来襲によりとんでもない事に巻き込まれた1人だった。

そんなヤジロベーは、サイヤ人達から逃げようと獅子前まで来たにも関わらず、

千次郎と慎也が来てしまった為とんでもなく迷惑だった。

ヤジロベーは千次郎の事を名前だけしか知らないのととても見当がつかなかった。

そんなヤジロベーが見守る中3倍界王拳を出す千次郎!!

果たして今度こそは慎也に通用するのか!!

それとヤジロベーは2人の一騎打ちに参戦するのか!!《次週に続く

!!》

## STAGE 12 3倍界王拳の力!!!

(さて……と……界王拳を3倍まで上げて俺の体がどのくらいまで持ち堪えられるかな……)

「どうした青田! かかってこいよ。ハツハツハ手の内を全て無くしたのか?」

(どっちにしてもやるしかねえやこのままじゃ絶対に負ける……!)

界王に止めろと言われていた界王拳3倍を遂に出す千次郎。

しかし、その界王拳3倍は先程2倍と違って更に体に負担が掛かってしまうのだ。

でも、このままでは絶対に劣勢なので界王との約束を破ることにした。

「相手が悪かったようだな!俺はサイヤ人(仮)の中でもNo. 1の実力だった。

貴様の様な落ちこぼれがどんなに苦しい訓練をしても所詮は

倒される時がほんの僅かだけ伸びただけだったな」

(ま……不味いぞ……サイヤ人のヤローの方が圧倒的に押してやがる……)

オ……オレ今のうちに逃げた方がいいな……)

こっそり見ていたヤジロベエは、2人の一騎打ちを見ていて千次郎が圧倒的に劣勢と思ったのか、

このまま千次郎が一方的にやられている内に逃げようと考えていた。

しかし、その考えは次の瞬間、吹き飛ぶこととなった。

「どうしたかかってこい! かかってこなければ俺から……!?」

「あんまり俺を舐めんよ……タコ」グググググッ……

突如千次郎の回りに少しばかり赤いオーラが漂い始めた。そして、  
「カラダ持つてくれよ!!! 3倍界王拳だつ!!!」

物凄い大きな声と共に千次郎の気が高まり始めた。

■ 一方こちらは界王星。荒れ果てた大洗と違ってこちらは静かで平和の星である。

しかし、そんな平和の星に1人だけ汗水を垂らしている者がいた。「い、いかん……!! 2倍以上はこ、超えちやいかんぞ千次郎……!!」

そう界王だった。界王は千次郎の恩師とも言える人で、千次郎がサイヤ人と戦える様に鍛えてくれた者でもあった。

その為最初はかなり敵対心を持っていた千次郎も今ではとても恩師として向き合っている。

その界王は今とても焦っていた。理由は千次郎が自分と約束した3倍界王拳を

開いてしまうからだ。

「……とはいえた……確かにあのままでは勝ち目はない……ま……まさかあれほどの強さだとは……」

この勝負駄目かもしれない……」  
自身が思っていたサイヤ人の脅威に恐れ、界王拳を使っても無理だと思ってしまう

諦めかけていた界王であった……。

■ 「おああああ……!!!!」 ゴゴゴゴゴツ!!

一方自分の恩師が諦めかけているのにも関わらず

諦めるという言葉を知らない千次郎は、気を溜めに溜めていた。

ヒューヒューヒューヒュー!!!

「何だろう・・・この感じ・・・？」

「さつきから物凄く風が吹いていますよね！」

「もしかしたらこの感じは・・・千次郎か！」

「千次郎さん・・・」

しかもその気は、獅子前から遠く離れている修平とみほ達がいる所まで広がっていた。

「あの一多田さん・・・」

「どうしたの？梓さん」

「さつき私あの大きな人が付けてた変な物を付けていたんですが・・・」

「ああスカウターという物だね！それがどうかしたの？」

「実は、さつきから風が吹いている方から段々と数字が上がっているんです」

「え!?本当！少し貸してくれ!!」

梓が持っていたスカウターを貸してもらい、スカウターを付ける修平。

スカウターがどれほどの数値を上げているのかと表示を見ると、

「す、凄い・・・!!数値が物凄く上がってる・・・!!!」

「え!？」

「どう言う事ですか？」

修平が言っている事に全然分かっていないみほ達。

「これは、戦闘力という強さを数値で表すんだけど、今千次郎の気を見ているんだけど、

どんどん上がっていて今数値が17000・・・19000・・・

21000・・・!!」

ピピピピピッ

数値はどんどん上がっていき、千次郎の戦闘力が21000を超えた瞬間、

ボンッ!!

「うわあっ!!!」

突然スカウターが爆発したのだ。

「だ、大丈夫ですか!?」

「お兄ちゃん大丈夫!?」

「うん・・・大丈夫大丈夫」

すぐさま梓と佳利奈が心配するも笑顔で対応する修平。しかし、心の中では、

（何て物凄い気なんだ・・・!!これだったらあの少年慎也にも勝てるかもしれない!!

頑張れよ千次郎!!）

あの物凄い気の数値を見た為か、慎也に千次郎が勝てると思った修平だった・・・。

シユウウウー

シヤアアアー!!

「はああああー!!!」

そしてこちらは獅子前。サイヤ人が居なくなつて少し穏やかになつた大洗町と違って、

千次郎の気溜めにより荒々しい風が吹き続けていた。その風はまるで全てを飲み込むかの様に。

「な・・・!!!何・・・!?!」ビリビリ!

これには先程まであんなに強い事を言っていた慎也も今はその事も言えなくなつてしまった。

慎也でさえびつくりする千次郎の気は段々高まつていった。そして、

「行くぞっ!!! 《3倍界王拳ーっ!!!》」

そう言った瞬間、先程まで千次郎が立っていた地面がバキバキと音を立てながら砕け散つた。



「らーっ!!!」ギューン!!

赤いオーラを出しながら空中へ飛び慎也に近づくと千次郎。その速さは正に光線の様だ。

「な．．．!!速い．．．!!!?」

余り速さに驚く慎也。何としてでも逃げようと動くも、

「よう．．．」

「!?!」

何と目の前に千次郎が斜め後ろから飛んでいたのだ。

「テメエにはやられた分やり返さねえとな．．．!!」

「!!」

「うおりゃーっ!!!」

バギツ!!

力一杯強く握った千次郎の左拳が慎也の眉間に当たった。

「グハア!!!」

流石に眉間を殴られたせいかわず意識を失っている慎也。

しかし、それで終わりでは無かった。千次郎は、慎也が倒れる前に移動し後ろに回った。

「勝手にくたばんじゃねえよっ!!!」ドムツ!!

「くっ!!」

強烈な蹴りを入れた千次郎は、高く上がっていった

慎也にまだ喰らわせようと猛スピードで飛んだ。

ギューン!!

「くっ!!!調子に乗りやがって．．．!!」

歯軋りをしながら、怒りを覚える慎也。勢いよく近づいてくる千次郎に気弾を喰らわせようとした。

「死ね!!!」

掌に気を集めて打とうとする慎也。しかし、千次郎は急転回し慎也の後ろに回った。

「そうくると思ったぜ!!」

しかし、慎也は予想していた為今溜めている気を全部左の掌に集めた。

「喰らえっ!!!」ボンッ!

左掌に集めた気を全てぶつけ渾身の気弾を放った慎也。

これには千次郎も避けられまいと少しニヤツと顔を歪ませる。しかし、

「そんなトロイ物が当たると思ってたのか!!!」ヒュッ

フッ

「にっ!?!」

何と更に猛スピードを出して、気弾を簡単に避けたのだ。千次郎はそのまま慎也の懐に入り、

「俺を舐めんじゃねえこのタコ野郎!!!」ドガッ!!!

全体重を乗せたキックが見事に慎也の顔に決まった。

「!!!」

勢いよくぐるぐる回る慎也は、どうすることも出来ずそのままマンションへとぶつかった。

慎也が勢いよくぶつかったせいにかマンションの上部が崩れてしま

い 慎也は下敷きになってしまった。

「う・・・うぬぬぬ・・・!!」

慎也は怒り怒っていた。自分よりも価値が低く「落ちこぼれ」の人間に自分が「敗けて」いたからだ。

違う。自分はこんな奴に敗けるなんて有り得ない!そう思っている自分に更に怒りがこもった。

「があああーっ!!!」グワッ!!

大きな叫び声と共に気を上げていく慎也。それと同時に向かってくる千次郎。

「おっのれ~~~~~~~~っ!!!」ブンッ!!

どうしても一発喰らわせようと凄まじいジャブを放った。しかし、

「らーっ!!!」ギャルルッ!!

「!?!」

何と綺麗に慎也のジャブを一回転しながら避けた。後ろを取った

千次郎はそのまま勢いに乗り、

「おらよっ!!!」ドガッ!

飛び膝蹴りを慎也の背中に入れた。慎也は、勢いよく飛ばされたが、

一回転して体制を立て直した。

「くっ!!!」ブウーン

そして、今度は左拳に気を纏わせて突っ込んだ。

「死ね!!!」ブンッ!!

全体重を乗せたジャブを千次郎に顔面に喰らわせようと物凄い速さで懐に入った慎也。

このまま行けば千次郎の顔面に綺麗に入る・・・つもりだった。

「はっ!!」ヒュッ!!

「!?!」

何とまたもや交わされてしまったのである。ジャブを避けられてしまい、

どうしようかと思った次の瞬間、

「タイムン11戦中10勝1敗の俺をナメんじゃねえーっ!!!!」

バギッ!!!!

「うっ!!!!」

千次郎の渾身の拳が慎也の鳩尾にメリメリと音を立てながら綺麗に入った。

「あ・・・ぐ・・・!!!」

メリメリと音を立つ程ぐらい凄かったのか慎也の口からは赤い液体が溢れ落ちていた。

「あ・・・青田くっくっくっ・・・!!!」

バツ!!!

唇を噛み締めて千次郎を睨みつける慎也。しかし、このまま一方的にやられると

まずいと思ったのか後ろへジャンプした。

「ハアハアハア」

「バ・・・馬鹿な・・・!!オ・・・俺の“戦闘力”をこ・・・”

「超えやがった」……………!!」

肩で大きく息をしている千次郎と対し慎也は眉間に血管が  
出ていて物凄く歯を食いしばっていた。それぐらい慎也は怒りを  
覚えていた。

「ち…………畜生…………タフな野郎だぜ…………は…………早く決めないと確  
かにヤバそうだ……………」

3倍界王拳の反動が来たのか、物凄い顔をして耐えている千次郎。  
しかし、今は弱音を吐く暇も無いので根性で我慢する。

(す…………凄えぞあのチビ…………!!か…………勝てるかもしれねえ!!)  
2人両方苦しそうな表情を浮かべている中ヤジロベエは違ってい  
た。

なぜならあんなに劣勢だった地球人千次郎の少年がサイヤ人をおしてい  
たからだ。

ヤジロベエはこの調子で行けば勝つと思ったのか少し笑みが溢れ  
た。

勝負の流れは慎也から遂に千次郎に回った。

しかし、両者どちらもバテている。先に動くのは千次郎か!!それと  
も慎也か!!《続く》

STAGE 13 激突!!ギヤリツク砲VSかめはめ  
波!!!!

「こ……こ……こんなことがあつてたまるか……」

!!!  
オ……俺は超<sup>スパー</sup>エリートだ……!!あ……あんな落ちこぼれにやられる訳がない……!!」

(俺が宇宙一なんだ……!!!)

激しく齒軋りをし、網膜からは血管が見える程怒りが爆発した慎也。

「か……体中が痛くてたまらねえ……!!やつぱ3倍の界王拳は無理があるみたいだ……」

チンタラやっているとこつちが先にギブアップしちまう……」

一方の千次郎は、3倍界王拳を使ったことで反撃に成功したが、やはりリスクが大きかったのか体中に痛みが走っている。

(や……やれっ!!!やつちまえチビっ!!!)

そんな2人に対してこつそりと見ていたヤジロベエは、この勢いなら千次郎が勝てると思ったのか千次郎を応援し始めた。

「ぐっ……!」

涎が垂れたのか、慎也は手で拭った。すると、

(……血……!!!)

何と涎だと思っていたのは血だったのだ。

(こ……この俺があ……あんなゴミを相手にけ……気高い血を……!!)

この時、慎也の中の何かが音を立ててブチブチと千切れて始めていた。

その音は慎也の顔があのか千次郎に一度見せたあの不動明王になっていくと共に大きくなっていく。

そして、全てが千切れた途端慎也の心を大きく動かした。

「ゆ……許さん……絶対に許さんぞおお……」

「な、何だ？ 凄え顔してやがる……」

眉間には血管が、網膜にも血管が湧き出ている慎也の顔を見て何か嫌な感じがする千次郎。

すると次の瞬間、その予感是不意にも的中してしまった。

「もうこんな星などいるものか!!! 地球諸共粉々に打ち砕いてくれるわーっ!!!」

「何だっ!!!」

ギョーンッ!!

千次郎の言葉を遮る様に慎也は紫色のオーラを出しながら高々と空中に上がっていった。

「よけるものならよけてみるがいい青田!!!」

「貴様は助かってても地球は粉々だーっ!!!」

手の甲に気を溜めながら慎也は千次郎に向かって叫んだ。

「!!考えたな!!!この野郎!!!」

慎也の作戦に怒りを覚える千次郎。しかし、このまま放ってしまうと、

地球はおろか大洗までもがその犠牲になってしまう。それだけは何とか止めなければならぬ。

「糞っ!!あれだけの気だったら《ジャジャン拳》だったら絶対に無理だ!

こうなったら……あの技”に賭けるしかねえっ!!!!!!」

「はあああーっ!!!」

そう言うと、千次郎の体からまた赤い気がスパークし始めた。

そうその赤いスパークとは読者の皆さんご存知の、

「3倍界王拳のかめはめ波だ!!!」

3倍界王拳のかめはめ波である。

「か……め……!!!」

両手で気を溜めると共に地面が割れ始め破片が浮かび始めた。

それに加え千次郎の界王拳の気が更に赤くなっていく。

「はあああーっ!!!」

一方の慎也もそれは同じで紫色のオーラにスパークが混じり始めた。

「は．．．!!!」

「俺のギャリック砲は絶対に喰い止められんぞっ．．．!!!」

「め．．．!!!」

お互い気が絶頂に達する瞬間、周りにあった家やビル、森林が一気に粉々に砕け散った。

そして、

「地球諸共宇宙のチリになれーっ!!!」 ヴオツ!!

遂に慎也からギャリック砲が放たれた。

「!!!ちくしょう!!!こんな事で死ぬんならもつと肉まん食つときや良かったーっ!!!」

ヤジロベーは、ギャリック砲が放たれた瞬間、諦めてしまい死ぬのを理解し目を瞑った。

しかし、ヤジロベーは忘れていた。ギャリック砲と同じぐらいヤバい物が放たれるということ。

「波ーっ!!!」

掛け声と共に千次郎の両掌から強烈な気が放出された。

その気は慎也が放ったギャリック砲とみると距離を縮める。

そして、2つの気は途轍もない眩しさを出しながら衝突した。

カツ!!!

「うわあ〜っ!!!」

その瞬間、獅子前にあった物が全て粉々になり吹き飛んでしまった。

ヤジロベーも2つの気の衝突による爆風により勢いよく飛ばされた。

「なっ何っ!!!俺のギャリック砲とそっくりだ．．．!!!」

「ギギギギ．．．!!!」

「ぐぬぬ．．．!!!」

バチバチツ!!

両者どちらも互角で中々動かない。でも、どちらが押ししていると  
言えば慎也の方だ。

「ぐっぐぐぐぐぐぐ．．．っ!!!」

「うっおっおおおお．．．!!!」

両者本気の力を出し合いながら一向に2つの気は動かない。

このままではどちらかが先にギブアップするまでと予測した千次  
郎は、

更にもう一段階限界の線を超えてしまった。

「喰らえっ!!!界王拳4倍だぁーっ!!!」

「いかんっ!!!千次郎ー!!」

界王星で叫ぶ界王の声など聞こえず千次郎は4倍の力を出した。  
すると、次の瞬間、

ドウンッ!!!

さっきまでのかめはめ波なんかを遥かに超えるかめはめ波が両掌  
から放出された。

「ぐおおおおーっ!!!」

あまりの凄さに反動で片足が上がってしまった。

両掌から放出された強烈な気は先程まで少し押していた

慎也のギャリツク砲をグイグイ押していく。

そして、やがてかめはめ波は慎也の目の前にまで達し、

「なっ!!おっ押され．．．」

ドンッ!!!

「うわあああぁーっ!!!」

勢いよく喰らいながらかめはめ波と一緒に天まで登っていつてし  
まった。

「ハアッ!!!ハアッハアッハアッあ．．．あうっ．．．!!」

4倍界王拳を使い限界の壁を壊してしまった千次郎は直後に来る  
激しい痛みにも声が出なかった。

遂に完璧にリベンジに成功した千次郎。しかし、闘いの火はまだ消  
えそうにない!

さあここからが本当の勝負だ!頑張れ!!千次郎!! 《続く》



## STAGE 14 慎也の形態変化!!!

私の名前は西住みほ。大洗女子学園戦車隊の隊長（仮）です。  
今私達一向は、千次郎さんの助けにより何とか病院まで逃げ切ることが出来ました。

でも、逃げていた際私達はとんでもないものは見ました。

「ねえ見て!!皆!!」

病院に向かって逃げていた時、沙織さんがある方向に向かって叫んだ。

よく見ると、少し遠いところから紫色の凶々しいモノが見えた。

「あ、あんなのが落ちたら………大洗が……!!」

私達は物凄く焦りました。もしあの凶々しいモノが地面に落ちれば

大洗はおろか地球までもが無くなってしまうと思っただからです。

落ちるとなれば出来るだけ何処か遠くに逃げないと思っただけ私達は一心不乱に駆け出しました。

少しの間走っていると、あの凶々しいモノが物凄いスピードで落ち始めました。

「あ!!!」

「不味いぞ………!!」

「皆!!出来るだけ散らばるんだ!!!」

多田さんが大きな声で私達を指示してくれ私は、  
適当に逃げようとした時突如足に激痛が走りました。

「くっ!!」

「西住さんっ!!!」

「みほさんっ!!!」

「西住殿!!!」

「みぽりんっ!!!」

「クッソー………!!!」

多田さんだけは何とかしようとする私の方に向かっていききましたが、

私はもう終わったと思いい目を瞑っていました。

(嗚呼短い人生だったなあ……)

勝手に今までの事を振り返り自ら諦めていた時でした。

ヴオツ!!!

「何だっ!?!」

「え……」

突如多田さんがびっくりしていたので、目を開けるとそこには、

「何だろう……あれ……?」

まるで海のように青くて生き生きとした光線が

あの紫色の凶々しいモノに向かって飛んで向かっていた。

一体誰があんなの打ったのか想像するのにも難しくなかった。

「千次郎さん……」

「そうだよ!!千次郎だよあの青いのは!!!」

多田さんが嬉しそうな声を上げた瞬間、

カッ!!!

突如周りが眩しくなった。そして、

「うわあああ……!!!」

「きやあああ……!!!」

物凄い風が吹き、周りの建物や木などが飛んで来た。

「皆!!早く何処かに!!」

皆が巻き込まれている中多田さんだけは声を出していた。

皆それに応じてなんとか頑張つて動こうとしていた。

私も足の痛みを何とか耐えながら歩いた。その時だった。

1本の木が私に向かって飛んで来た。

「みぽりん!!」

沙織さんが叫んでいた時にはもう目の前だった。

私はもう逃げるのは無理だと思いい目を瞑った。

来いと言わんばかり身構えた。しかし、中々恐れている物が来な

い。

何故来ないかと思いい恐る恐る目を開けると、

「え………?」

何と木は宙に浮いてギリギリ私の鼻の近くに止まっていたのだ。

その瞬間、辺り一面にまた凄まじい光が襲った。

カッ!!!

「きやあっ!!!」

それと同時に浮いていた木もドサツと音を立てながら倒れた。

「西住殿大丈夫ですか!!?」

優花里さんが駆けつけて来て私を抱擁してくれた。

「う、うん……大丈夫だよ」

「そうですか!!良かったです!!」

大丈夫だと知った途端物凄く喜び始めた。

そんな優花里さんとは対照に私は、凄く倦怠感を感じていた。

(千次郎さん……頼みます。生きて戻って来て下さい……!!!)  
胸を押さえながら私は神様に千次郎さんの安否を願った。



一方こちらは獅子前。

慎也をかめはめ波で遠い場所へ飛ばした千次郎は、

直後に来た激しい痛みに声が出なかった。

「あ……あうう………!!!」

「あ………あ………」

そんな悶絶している千次郎を少し離れた所で誰かが見ている。  
そうヤジロベーだ。

「や………やった………やったぞ……!!!」

ヤジロベーは、千次郎が慎也を倒したと思い嬉しそうな表情を覚えていた。

やがて、その気持ちは収まらず立つと共に一目散に千次郎の方へ走っていった。

「チビ千次郎ーーーーーっ!!!

やったじゃねえかこの野郎ーーーーっ!!!」

すると、何やらうるさいと思いい顔を上げるとそこには見知らぬ人物が立っていた。

「あ、あんた誰だ・・・?」

「そうかオメエ知らねえもんな。オイラの名はヤジロベー!

確かオメエ名は千次郎って言うんじゃないか?」

「そ、そうだけど何で俺の名前を?」

「カリン様から聞いたんだよ」

「カリン様?」

「ほら!猫で杖を付いてる」

「ああ!!あの猫神様か!!」

大体の意味が分かったようだが千次郎にはもう一つ疑問があった。

「まああんたが誰かということは分かった。

でも、何であんたがこんな所に?」

「何だ。気づいてなかったのかよ。

ずっとあそこの岩裏に居たんだ。

まああんなに必死だったら分かんねえな!」

「そ、そうだったんだ・・・」

「しかし、よくあんなスゲエ奴をぶっ飛ばしたな!

やっぱオメエは大した野郎だよ!」

そう言って激烈のついでに背中をポンポンと叩いた。すると、

「うっ!!!」

「え!?!」

「うああああ・・・!!!」

「な、何だよ!?!どうしたんだ!」

「か・・・体に無理な技を使っちゃまってよ・・・へへッ・・・」

「へえ．．．確かにふ．．．普通じゃなかったもんな」

さっきの行動に対して、物凄く済まないと思うヤジロベー。  
謝ろうとしたら大丈夫と笑顔を見せる千次郎に止められた。

「そ．．．．．それよりヤジロベーだったけ？」

「あ．．．あんだ逃げた方がいい．．．いい．．．」

「え!？」

「な．．．何でだよ．．．．．ま．．．まさか．．．」

「そのまさかだよ。奴は．．．アイツは生きている．．．．!!」

あれぐらいでくたばってくれたらこっちもこんなに苦労しねえよ．．．」

天を睨みながらそう伝える千次郎。

「でつでもよ!!平気じゃねえか!オメエの方が強かったぜつ!!」

「言っただろ．．．さつき無理したから体がガタガタなんだよ．．．」

も．．．もう限界に近いな」

「そ．．．．．そうか．．．．．」

この時ヤジロベーはどう声を掛けたらいいか分からなかった。

もし声を掛けても、どう伝えたらいいのか分からなかったからだ。

「じゃ、オイラ逃げるから．．．が．．．頑張れよ!」

「あ．．．ああ．．．」

でも、ここから離れなければいけないということは確かなので  
手を振りながら安全な場所に逃げることにした。



そして、一方その頃遙か高い天空に1つの青い気弾が飛んでいた。

「ぐぬぬぬ．．．っ!!」

その気弾には1人の少年が乗っていた。そう慎也だ。

「くっ!!」

先程千次郎渾身のかめはめ波によりギャリック砲は  
おろか自分まで巻き込まれてしまったのである。しかし、  
やつとのことので、かめはめ波から外れることが出来た。

「……………!!!」

遠ざかっていくかめはめ波を慎也は唇を噛んで睨みつけていた。

すると、さつきやられた事を思い出したのか眉間から血管が見えてきた。

「くそおお~~~~っ!!!」

突如大きな叫び声を上げ悔しさを露わにした。

それほど千次郎にやられたのが悔しかった。

「な……なんでだ……!何であ……青田の戦闘力の方が……こ……この俺を超えやがる……」

「ちつくしよめええ~~~~っ!!!俺はサイヤ人、地球人どちらも1なんだ!!!」

俺はこの世界で1番強いんだぞっ————っ!!!ハアハアハア

そう言うど荒々しく息をし始めた慎也。

2, 3回息をし終わると突如あの黒い笑みを覚えた。

「こ……こうなったら醜くて嫌だがアレに変身してぶっ潰してやる……!!!」

くつくつく……この俺がアレは半端な強さじゃないからな……!!!」

「糞が……!!!地球人の奴らを手っ取り早く片付ける為にわざわざ『満月』の日を

選んでやってきたのに……まさか青田の倒す為に変身することになるとはな……!」

糞っ!!頭に來るぜ……!!!」

アレと一体なんなのだろうか。アレという言葉の口に出せば出す程慎也の顔は黒くなっていく。

しかし、慎也は少し違和感を覚えていた。

「妙だな……もうとつくに月が見えてもいい時間だ……」

そう月が見えないのだ。変身に必要な月が見えてもいい時間なの

に見えないのだ。

「糞っ……!!場所を変えるか……」

何としてでも月が無ければ次に動かないため

慎也は月を探しに辺りをうろうろし始めた。しかし、

「な、無いっ!!!何処にも月が無いぞっ!!!ど、どういうことだっ!!!」

場所を移しても移しても何処にもない。慎也は更に焦った。

「そうか……!!ちくしょう……いちいち頭にくる野郎だぜ……!!

青田の奴ラディッツからアレを聞いたから事前に月を消しやがっ

たな……!!」

千次郎が消したと思つた慎也は、齒軋りをし始めた。

何処まで自分の邪魔をするのだと。しかし、この件は千次郎がやっ

たのではなかった。

では誰がやったのか。相手は想像に難しくなかった。

「ふっふっふサイヤ人いくら探しても無駄じゃ月はない……!」

わしが千次郎を鍛えている間に密かに閻魔大王の若い見習い鬼達

が

千次郎の為に消してしまつたわ……」

「フフッ……♪そろそろサイヤ人の奴ら慌て始めると思うなあ♪」

「そうだなあ。俺達が千次郎様の為に閻魔大王様に許可を貰つて〃消

しちまつたからな!〃」

「ハッハハハハハハ!!!」

そう千次郎を慕っている見習い鬼のコオロギとマツムシだったの

だ。

2人は、千次郎がサイヤ人と闘うということを知つた瞬間、

ほんの少しでも有利に立てる為に閻魔大王に頼み込み

サイヤ人がある変身をする際に必要な月をたった1日で消してし

まつたのだ。

これには界王もびっくりしていた。

「しかし、千次郎にはもう余力が残つておらんはず……

サイヤ人の奴がアレになれんでもピンチに変わりはない……」

だが、奴は弱つてきた……!元氣玉を使えるぞ!!

今の奴になら元氣玉が当たりさえすれば必ず勝てる!!」  
一粒の汗を流して千次郎の事を思っていた界王だった……。

「……やむをえん……」

「戦鬪力は多少弱まるがこれ以外に方法がなさそうだ……」  
「フフツ……ハツハハハ!!」驚き慌てる奴の顔が見ものだぞ!ハツハハハ!!」

それと同時に慎也もある決断をしていた……。

■  
「変だな……?さつきから何をウロウロ動き回ってるんだ……何でかかってこないんだ……」

中々降りてこない慎也を不思議に思っている千次郎。

まさか自分を倒す準備をしているのかと思うと、無駄に力が入っていた。

しかし、その行動は突然ピタリと止まり、自分の方へと降り始めた。

「!!やつと降りてきやがった……!!」ザッ

勢いよく降りてきた慎也を前に仁王立ちになる千次郎。

(アイツに勝つには……もう《元氣玉》しか無い……上手く精神集中できるかなあ……!)

不安こそはあるものの元氣玉を使わなければ絶対に勝てないと考えた千次郎はグツと拳を握った。

慎也が攻撃してくるのを待っていると慎也の方から口を切った。

「月を消しておいてやったり!……ってどこだろうがそうはいかんぞ!!」

「は?月??何言ってるんだ?」

「ハツハハハハハ白々しい野郎だ……おい青田!!」

何故満月を見ると変身できるのか教えてやろう……」



「変身？」

慎也が言っていることが一つたりとも分かっていない千次郎。しかし、慎也は続けて口を動かす。

「月の光は太陽の光が跳ね返ったものだということガキ子供の頃勉強したな……だが、

その太陽の光には “ブルーツ波” というものが含まれているのは知らないだろう……」

「ブルーツ波？それが変身とどう関係あるんだよ!？」

「フツそのブルーツ波が満月になると1700万ゼノという数値を超えるのだ……」

1700万ゼノ以上のブルーツ波を目から吸収すると尾に反応して変身が始まる……!」

宇宙じゅうの惑星に月は数多くあるがその大きさに関わらず何故か必ず満月にならないと

1700万ゼノを超えるブルーツ波は出ないのだ。しかし……」話を一旦終えたと同時に右手を前に出した。何をするかと思いきと見ていると、

「限られたサイヤ人にだけ人工的に1700万ゼノを超える小さな満月を造りだすことが

できるのだ!!!星の酸素とこのパワーボールを混ぜ合わせることでなっ!!!」

キューン!!

突如今までとは違う変に光り輝いている気弾が出てきた。

それと同時に慎也の気が減った。びっくりしている千次郎に対して、

慎也は息を荒くしながらニヤつきを覚えていた。

「待たせたな青田!!!やつと貴様の死ぬ時がやってきた……!!!所詮落ちこぼれが

スーパ

超 エリートに闘いを挑むべきではなかったのだ!!!フハハハハハ

ハ……!!!」

（あ、あのおかしな光りを出した途端アイツの気が減った……）

!!

!!) そ、そこまでして何をするんだ……!!全然分からねえ……

自分は弱っているにも関わらず更に自分を弱らせている慎也の行動に千次郎は理解出来なかつた。

何も理解出来ないままあたふたしていると、慎也がああ気弾を千次郎の頭上に飛ばした。

「なっ何だ!?!」

ヒユウウウー

顔を上げて見ていると、気弾は丁度雲より少し高い場所まで上がっていた。

それと同時に慎也は右手をグツと握った。

「弾けて混ざれっ!!!」 グツ!!

カツ!!!

「な、何だあれはっ!?!何をしたんだ!?!」

突如出来た謎の光の集合体に驚きが隠せない千次郎。

しかし、遠い何処かでは更に驚いている者がいた。

「まっまさか……!!!つつ、月を造りおつたーっ!!!」

そう界王だ。まさか、そこまでして月を造るとは考えていなかったようだ。

そして、ゆっくりとその場所にへたり込んでしまった。

「ハッハハハ!!アツハハハハ!!!!青田!!最後にこれだけは言っておこう

!!!

変身するには満月以外にしつぽがいる!!でも、俺はしつぽを持ってはいない!!!

そのかわりにしつぽが無くても変身できるように日々特訓した!

アイツを……!!千魔を倒す為に!!!

「何だっ!?今何て言ったんだ!!!?」

最後に何と言った……。千魔。確かにそう言った。

もう一度聞こうとしたが、次の瞬間言葉を失ってしまった。  
何故かというと、

「ハア、ハア、ハア!!」

ドクンツ！ドクンツ！ドクンツ！

心臓の鼓動と共に体を揺らしながら、慎也の口から牙が生え、そして、

瞬く間に体中が大きくなっていったのだ。自分より少し小さかった身長も

さつきよりも10倍以上に伸びていた。やがて、口も前に出て、顔も毛むくじやらになってきた所で千次郎は言葉を溢した。

「バ、化け物・・・大猿の・・・化け物・・・!!」

そう慎也が変身した姿は正しく大猿の姿だった。

大猿に変身し遂に最後の勝負に出た慎也。

果たして、千次郎は変身した慎也に勝つことができるのか!! 《続く

!!》

STAGE 15 元氣玉!!!

千次郎と慎也が死闘を繰り広げている中、みほ達はやつとの思いで病院に戻ることが出来た。

「ハアハアハアやつと・・・着いた」

「良かった〜!!」

「ちゃんと戻って・・・これましたね」

「しかも・・・1年生の皆全員で・・・!」

顔を向けると、1年性の皆は息を荒々しくしていた。ここまで来たのに無理もない。

皆疲れ切って地面にもたれていた時、誰かが物凄いスピードで走ってきた。

「西住ちゃんん!!大丈夫!!?」

「お前ら!!!大丈夫か!!」

「皆ー!!!」

そう、杏と桃と柚子の生徒会のメンバーだった。

「会長!!」

「西住ちゃん!大丈夫?」

「は、はい・・・大丈夫です。でも、少し足が・・・」

「うわあ!!これは大変だ!河嶋!!肩貸してあげて!!」

「分かりました!!ほら西住!!」

「ありがとうございます。河嶋さん」

「西住ちゃん以外に怪我しているのは!?!」

「私は大丈夫です」

「私も」

「私ものです」

「・・・大丈夫だ」

「1年生は全員大丈夫です!!」

「よし・・・分かった」

生徒のほとんどが怪我していないことを確認すると、胸を撫で下ろ

した杏。

「あ!!会長!!いました怪我人!!」

「え!?!」

「私達では無いんですが、ここにお兄さんがいまして・・・」

「お兄さん?どこにいるんだ?」

「え!?!ここにいるじゃないですか・・・って、あれ!?!多田さん!!!」

「お兄ちゃん居ない!!何で!!!?」

「ど、どうしたんだお前ら!?!」

梓達が慌てている仕草に全く理解出来ない杏。

すると、あやが杏に説明してくれた。

「会長!実は・・・私達と一緒に避難していたお兄さんがいたんです・・・」

「お兄さん?」

「はい。その人、多田修平って言うんですが・・・」

「え!?!修兄!?!」

「会長もしかして知ってるんですか?」

「知ってるも何もその人、うちの卒業生だもん」

「「「えくくく!!!」」」

修平が大洗の卒業生だったことに皆口を大きく開けてびっくりしていた。

「で、でもうちって女子校じゃ・・・」

「そう、確かにうちは女子校だけど、ほんの一時期は、共学だったんだ。

でも、やっぱり女子校に戻そうと言う事で修兄達がその時最後の共

学で

卒業した生徒だったんだ・・・丁度私達が1年性の時に」

「修平先輩・・・懐かしいな・・・」

「よく、私達にご飯奢ってくれましたもんね」

「ちよつと会長!?!そんな思い出話しないでください!!」

今そんな場合じゃないでしょう!!」

思い出話を始まりかけたので、喝を入れる梓。

「そうだったごめんごめん!!そうか・・・修兄が逸れてしまったのか」

「ですから、私達その人を助けに行きたいのでどうかお願いします!!」  
「別に良いんじゃないの? ほっといて」

「え!?!」

「修兄は、逸れたりするおバカじゃ無いよ。」

「多分何か理由があるから皆とわざと逸れたんじゃないの?」

「そう思えば何かずつと言っていました。友達を助けたいとか

連れ戻したいとか・・・」

「でも、その友達は、死んだんじゃない?・・・」

「だとすると、まさか大洗をこんななめちやくちやに

してくれた奴らに復讐するつもりじゃないのかな?」

「え? 復讐?」

「でも、その復讐したい奴って確か、青田って言う人が闘ってるんじゃない?・・・」

「何!? 誰か闘っているのか!」

「はい! 青田千次郎というとても心優しい人が、私達の為に!!」

「みぽりん。何で青田って言う人の時になったらそんな声大きくするの・・・?」

「へへッ。つい千次郎さんの話するとウキウキしちゃって・・・」

「そんなことより! その青田って言う人と先輩に助けに行くぞ!!!」

「待って下さい!」

桃が、皆を連れて助けに行こうとした時、みほは叫んだ。

「どうした西住?」

「あの・・・千次郎さんと多田さんは、

会長の言う通りほつといていいと思います。」

「何を言っている!? 私達の大洗をこんなにしたんだぞ!!!」

「確かにそうです・・・でも、千次郎さんは、言っていました」

「俺が闘っている間、皆は手を出せないでくれ」って・・・」

「だからと言ったって!!」

「河嶋ももうそこら辺で良いんじゃない?」

2人が口論している最中、杏は呟いた。

「会長・・・」

「西住ちゃん。本当にその青田って言う人はそう言ってたの？」

「はい。そう言っていました」

「そう………OK!!皆——立って!!!病院に入るぞー」

「え!?!」

「会長………」

「その人が手出しするなと言ったのなら私達は

その青田っていう人に託してみよーじゃん」

「大洗の……運命を」

「!!」

「うんじゃあ、西住ちゃんも早く行こう。」

河嶋。西住ちゃんに肩貸してあげて」

「は、はい!!」

そう言うと、桃は再びみほに肩を貸した。そして、

そのままみほと一緒に病院の中へと入っていった。

病院に入る直前みほはこう祈った。

(千次郎さん………私は、会長達は、皆千次郎さんに託しました。

どうか………どうか大洗を、守ってください………!!!)

そう思いながら、病院の中へと入っていくみほだった。

「ハアハアハアハアハア」

何処まで歩いただろうか。体中汗に濡れて、服はボロボロで、口は乾いている。

これほど苦しいことはない。でも、

「ハアハアハア待つてろよ………千次郎。」

俺もすぐ………ハアハアそつちに………向かうからな」

そう呟くと、息をたつぷりと吸って走り始めた者がいた。  
彼の名前は、多田修平。

大洗女子学園最後の共学卒業生であり、  
友の復讐に心を燃やす若き青年である……。



そして、一方千次郎と慎也の一騎打ちはクライマックスへと進んでいた。

「あ、あああああ……！」

「グウオオオオー!!!」

とてつもない咆哮に汗を落とす千次郎。

やがて、それは、自分よりも遥かに大きくなっていき、

「グハハハハ!!どうだ青田!!これで貴様はもうおしまいだっ!!!」

大きな声で醜く笑い、大猿へと変身していた。

「おい……何が……どうなってるんだよ……!!!!」

さっぱり分かんねえよ!!」

「大猿の……バケモノ……!!!」

「いいことを教えてやろう青田……大猿になった俺達サイヤ人は

戦闘力が通常よりも、10倍にもなるのだ!!!」

「グハハハハハハハハハッ!!!」

ドラミングしながら叫ぶ慎也。その咆哮聞くたびに千次郎の汗は止まらない。

(マ……ジ……かよ……!!!まさかこんなのに変身するだなんて……でも、もしここで俺が倒れたら……みほさん達も終わりだ!!)

(何が何でも……絶対に負けられない……!!!だからまずは……)目を閉じて、自身の貧しい頭をこねくり回し始めた千次郎。  
慎也に勝つには、作戦が大事だと思ったらしい。

「ななな……何だっつてんだ……!!それに、  
何なんだよあのバケモノは……!!!」



一方、千次郎と別れた後、急いでこの場を離れようとしていたヤジロベエは、遠い場所から見えた大猿に驚愕していた。

「もっ、もも……ものすげえ殺気だ……」

あ……あのバケモノの服……サイヤ人の……

ア、アイツもサイヤ人なのか……!?」

まさか慎也がサイヤ人だったのか。ヤジロベエは、汗水を垂らしながら

千次郎の命の危険と自身の命の危険を感じていた。

(よし……こういう感じできた後は……俺と地球の元気玉を喰らわせれば……!!)

大体の作戦が出来始めたのか目を見開き、グツと拳に力を入れた千次郎。

いざ行こうと思ったその時、

グアツ!!!

突然、慎也が千次郎に向かって拳を振り上げてきたのである。

「わっ!!!」

あまりにも突然だったので千次郎は少し判断が遅れてしまったが、なんとか避けることが出来た。

バチツ!!!

しかし、それと同時に慎也の鋭い蹴りをもらってしまった。

「ぎゃっ!!!」

ドゴツ!!

ドガツ!!

血を吐き、ぐるぐると回りながら地面に叩きつけられた千次郎。

「フハハハハー……ツ!!!」

倒れている千次郎にもう一発喰らわせようと凄まじい速さで飛んでくる慎也。

しかし、千次郎は絶対に負けられない為、必死に大きな声を出した。

「かつ、界王拳っ!!!」

ギヤーン!!!

声と同時に体中が赤くなりなんとか慎也のパンチを避けることが

出来た千次郎。

出来るだけ距離を取ろうと逃げようとした時、

「逃がすか!!!」

バシツ!!

慎也が生やした尻尾が鞭の様に千次郎の額を叩いた。

それと同時に、界王拳も消えてしまった。

「う……!!痛ってっ!!!」

額から血を出していた千次郎は、先程の尻尾の攻撃にやや悶絶していた。

「ハーハツハツハ!!!どうした!!!逃げることも出来んのか!!!」

千次郎が悶絶している間、慎也は攻撃の手を緩めない。

「ちっ!!デ、デケエ癖になんでこんなに速えんだよっ!!!」

元気玉を出す為に精神集中する暇もないっ!!」

「界王拳を5倍にしたってアイツには通用しねえっ!!!」

「糞っ!!!た、たった10秒だけでいいのにつ!!!集中する時間が欲しいっ!!!」

このままだと、慎也にボコボコのボコにされると感じた千次郎は、混乱していた。

しかし、早くしないとまた慎也からの凄まじい攻撃が来る。

「そ、そうだった!!!」

そんな風に焦っていた時、千次郎の頭の中からひらめきが宿った。すると、さつきまで焦っていた表情は無く、逆に笑みを浮かべていた。

「シツシシツ!!喰らってみるがいい……俺の《ジャジャン拳》を!!!」

そう言うと、右拳に気を溜め左手で覆い被せる様に構え出した千次郎。

「何だっ?何をやる気だ!!!」

謎の構えに何をしているか分からない慎也。しかし、次の瞬間、

「最初はグー!!!」

掛け声と共に突如千次郎の気が跳ね上がった。

「何だ!? 戦闘力が一瞬跳ね上がった・・・!!」

これには一体全体どうなっているか分からない慎也。

しかし、千次郎は声を止めない。

「ジャン!! ケン!!!」

慎也が混乱している中、千次郎の拳の気は段々跳ね上がり、そして、

「グーーーー!!!」

バギツ!!!

「ウオツ!!!」

強烈なパンチが、慎也の鳩尾に綺麗に入った。メリメリと音を立てながら。

「グオオoooooooo!!! は、腹がっ!!!」

相当効いたのか、腹を抑えながらゆっくりと地面に倒れた慎也。

その隙に千次郎は、慎也から距離を取ろうと離れた。

数kmぐらい離れたら、手を天に向かって上げ始めた。

「だ・・・大地よ。海よ。そして、生きている全ての皆・・・・・・・・」

この俺にほんのちよつとずつだけ元気を分けてくれ・・・!!!」

「頼む!!!」

そう言い終えると精神集中し始め、ほんの少しだが千次郎に気が集まり始めた。

「く・・・糞~~~~っ!!!」

少しマシになってきたのか顔を上げた慎也。

よく見ると、千次郎が手を上げて何かしていた。

マズイ! このままだと自分が負けてしまう!!

そう思った慎也は、何とか立ち上がろうとした。

遂に千次郎と慎也の一騎打ちもクライマックスへと突入した。

現時点では、千次郎が最後の大技《元氣玉》を出そうとしている。

一方の慎也は、元氣玉を止めることが出来るのか!? 《続く》

STAGE 16 元気玉・・・失敗!?

「う・・・ぐうう・・・!!畜生!!ゴホッ・・・ゴホッ・・・!!!」  
(あ、あと少し・・・!!あとちよつとで元気玉が出来るぞ!!!)

前回、遂に最後の賭けに出て、大猿に変身した慎也。

変身した慎也に対して、元気玉しか倒すことが出来ないと考えた千次郎。

しかしその為の精神集中する時間が稼げない!

千次郎はジャジャン拳で慎也をダウンさせた隙に距離を置いて精神集中を始めたお陰か、少しずつ溜まり始めた。

「よし!この調子でもう少し溜まれば・・・!!」

もう少しで元気玉が出来る。その時だった。

「く・・・くっそく・・・!!」

先程までダウンを取られていた慎也が立ち上がったのだ。

(完全に回復しやがったな!!だけどこれだけの距離が有れば

アイツの攻撃より先に元気玉が出せる!!!)

しかし、千次郎との距離はとても遠い。すぐには攻撃されないだろうと千次郎は思った。

「ち、畜生!!何処だっ!!!何処に行きやがった!!!逃げてても無駄だっ!!!気

配で分かるぞっ!!!」

(元気が集まってきた!!!)

「!!」

(ヤベエ見つかった!!?間に合えー!!!)

慎也が気配を読み取り千次郎をあつさりと見つけてしまった。

段々近づいてくる慎也に急いで元気を集める千次郎。

キーン

その瞬間、千次郎の体中に元気が染み渡った。

「で・・・できた・・・!!!地球中の元気が集まった・・・!!!良しっ!!!」

「喰らってみやがれ・・・!!!」

キツと慎也を睨みつけながら右腕に染み付いた元気玉を喰らわせ

ようとした。

その時、誰一人予想していなかった事が千次郎の身に襲った。  
「喰らえっ!!!」

突如慎也が千次郎に向けて大きく口を開けた。

「な、何だ．．．!?」

何をするのかと思いつつ見つめた途端、

ピューーーン!!!!

「なっ!!!!」

慎也の口から物凄い気弾が飛んで来たのだ。

突然起きたことなので千次郎はどうすることも出来なかった。

気弾はやがて千次郎の前に落ち、

ボガーーン!!!!

獅子前に大爆発を起こした。そして、それと同時に

千次郎に染み付いていた元氣玉も消えてしまった。

「わあああーっ!!!!」

遠くに逃げていたヤジロベーもこの大爆発に巻き込まれてしまっていた。

「何だ!?何が起こった!?!」

一方一人で激戦区獅子前に向かっていた修平も大爆発による爆風に被害を受けていた。

しかし、この大爆発に一番被害を受けていたのが、

「あ．．．．．う．．．．．ゴホツゴホツ．．．．．」

千次郎だった。

「く．．．．．糞ツツくまさかあんな攻撃をしてくるなんて．．．．．!!」

と．．．．．とんだ誤算にも程があるぜ．．．．．ゴホツ!!」

体中大爆発により更に傷まみれになってしまい、額からは血が流れていた。

そして、左腕を負傷してしまい右手で抑えていた。

「ち．．．畜生．．．．．せ．．．せっかくの元氣玉がき．．．．．消えちやった．．．．．」

千次郎がゆつくりと立ち上がったと同時に慎也もゆつくりと地面に足を付けた。

よく見ると、口を歪ませてニヤけている。

「へっ……しぶとい野郎だ。だが、限界は近そうだな。分かるぜ……」  
「ハハッ……参ったな……こ……これでもう流石にヤバイや……  
さっきの元気玉でお……俺の気は殆ど使っちゃった……ハハッ」  
乾いた笑いをする千次郎に慎也は、ゆつくりと歩いて来る。

ズシン　ズシン

音を立てながら向かってくる慎也に何とか立ち向かおうと身構える千次郎。

「はーっはっは!!さあどうする!?!」

すると、大きく左足を上げた。何をするのかと思い、ジッと見つめてみると、

ドスンッ!!

「わっ!!!」

突如上げていた左足を千次郎に向けて踏もうとしたのだ。

「くっ!!!」

何とか避けることができ、距離を置こうと飛ぼうとした瞬間慎也に勢いよく払い飛ばされた。

バシッ!!

「うっ!!!」

勢いよく飛ばされた千次郎はそのまま何とひたちなか市那珂湊漁港まで吹き飛び、

停泊していた漁船に鈍い音を出して墜落した。

「あ……あ……カハッ!!」

余りにも強くぶち当たった為か何度も血を吐いた。

よろめきながら、何とか船に降りて慎也に立ち向かうとした。

「く……!!何処にいやがる……!!!」

左腕を抑えながら慎也を探していると、突然自分の周りが暗くなっ  
た。

どうしたのだろうと思い、見上げたその時だった。

ズンツ!!!!

突如那珂湊中に鈍い音が響き渡った。そして、バギツ!!!!

鈍い音と同時に骨が砕ける音も響き渡った。

「う……うぎやあああー……!!!」

その鈍い音の正体は千次郎の両足の骨が砕けた音だった。

慎也が踏みつけたことにより悶絶していた。

「ああああ!!! ううう………!!!」

拳を強く握り、髪を強く掴んでいた千次郎は、ただ叫ぶ他何も出来なかった。

叫んでいる千次郎を見て慎也はニヤつきながら足を戻し、

「おっと！悪い悪い！うっかり踏んでまって足を潰しちまったようだな！

ヘツツヘツヘへ……!」

「うあああ………!!!」

「じゃあ今度はうっかり心臓を潰してやろう」

「ハアツハアツハアツ!!」

「これで終わりだ青田!! 例えまた生き返ったとしてもその時にもうこの星はない!」

そう言うと、人差し指を出しながら千次郎の胸に向けた。

「く……クツソー……まさかタイマンで無敗だった俺が負けるなんて……」

畜生……こんなに力の差がある……なんて……強い奴がいたのは……超嬉しいけど……

し……死んじまっちゃ……な……く……やしい……よ……」

ボロボロになり、みほ達の約束を破ってしまうと感じた千次郎。

このまま心臓を潰されてしまえば元もこうもない。

何とかしようと体を動かすが、両足を潰されてしまった為ほとんど動けない。

「死ねっ!!!」

慎也の人差し指が千次郎の胸に向かつて刺そうとしてきた。

(け……結局俺はここで死ぬのか……何も出来ずに)

この時千次郎は、自身の人生を何故か振り返っていた。

振り返っていた際、幼少期の頃に言われたある言葉を思い出した。

『殺生丸……貴様にはこの家を継ぐことは出来ん』

『え? どうして!?!』

『……貴様には才能がない。だから』

『貴様はもう……この家にはいらぬ』

いつ言われただろうか。確か12歳の時だった。

父親から言われた言葉。俗に言う勘当というものだった。

(確か……この時からグレ始めたんだっけ……)

?)

『どけどけどけっー!!! 邪魔だー!!!』

そして、この時からグレ始めた。

毎日喧嘩しては学園艦の寄港日にバイクを深夜まで走り飛ばした。

人が嫌がつているのにも関わらず、わざと嫌がらせをした。

要するに 迷惑しかかけていなかった。

それからというものの迷惑しかかけていなかった自分にとある出

来事があった。

『もう! 本当君はおっちょこちよいなんだね』

(仁美……)

そう栗田仁美との出会いだった。千次郎にとって仁美は生きる希

望だった。

『私ね。普段は余り楽しくないんだけど……青田君という時はとっても楽しいんだ!』

いつも皆から煙たがられていた千次郎に唯一積極的に声を掛けてくれた存在だった。

そして、どんなに苦しいことがあっても、

いつも仁美に言われたある言葉を思い出すと元気が戻ってきた。

『青田君の好きな所は全部だけど、1番好きな所はね』

『どんな事があっても絶対に諦めない所だよ』



(!!)

その瞬間、気が無かった瞳に気が戻り始めた。

(そうだ……!あの言葉を言われるまではずっと心のどこかに穴が空いていた!

何をやっても無駄だと思ってた!!でも、仁美が教えてくれたんだ!!!)

(例え何も出来なくても、諦めさえしなければ良いって!!!)  
キューーン!!

そう思つてくると、右手に気弾を作り始めた。

(みほさん。俺はまだ……諦めないよ。みほさんとの約束は……皆との約束は……)

「絶対に破らねえからよーー!!!」  
バンツ!!!

次の瞬間、作っていた気弾を慎也に向けて放った。

「!!」

そして、気弾は見事慎也の右目に当たった。

「うあぎやーーーっ!!!」

目ということもあつたのが叫び声を上げながら、

右目を押さえている慎也に対して、千次郎は笑っていた。

「へへッ……イタチの最後っ屁……つてやつだ……」

そう言うと、両足を潰されたのにも関わらず何と立ち始めた。

「おい。生意気君。俺はまだ諦めねえよ……」

「絶対……お前に……勝つまではよ……!!」

この時慎也は再び立ち上がってきた千次郎に恐怖を感じた。

何故かは分からない。自分が圧倒的に有利にも関わらず。

「どうした?まさか、さっきので参りましたなんて言うんじゃないやねえだろうな」

「!!」

「お……のれ……!!!」

千次郎のからかいが余程気に入らなかったのか、今まで以上に恐ろしい顔をする慎也。

潰された右目を見せながら睨みつけている為、更に恐怖を感じる。  
(く、来るぞー！)

慎也の表情を見ると、次の瞬間、来ると感じた千次郎は攻撃に備えて身構えた。

しかし、いつまで経っても攻撃してこない。どうしたのかと思い、構えを緩めた。

「青田!!!き、貴様……!!!よ、よくもこの俺の顔に傷をくくく!!!」

すると、慎也が両手を広げて千次郎を掴んだ。

「しまった!!!?」

まさか、掴んでくるとは思っていなかった為全く反応が出来なかった。

何とか慎也の両手から出ようとするも、全く力が入らない。

「握り潰してやる……!!!」

すると、慎也が両手の握力を強くし始めた。

どうやら弱っている今握り潰した方が良いと考えた。

「うぎゃああ……ああ……!!!」

かなり強く握られているせいか、体中が圧迫されて苦しい。

しかも千次郎の場合、体中ボロボロのせいか、より一層苦しく感じる。

両足を潰された時は、もう勝ち目がないと考えていた千次郎。

しかし、仁美の言葉を思い出してもう一度立ち上がった。が、

またもや慎也の攻撃でピンチと変わってしまった。

何とかしないとこのままでは握り潰されてしまう!!

「急げ!!千次郎!!!」《続く》

# STAGE 17 必殺!! 気円斬!!!

「ぎゃあああああ~~~~っ!!!」

ググググググ……

「死ね!! 青田!!!」

千次郎を握り潰そうと慎也は更に握力を強めた。

握力を強めると同時に千次郎の声も大きくなる。

「ひえええ……!! あ……あいつはキツイぜ……」

「だ……駄目だ……! 死んだな……」

苦しんでいる千次郎を遠い場所からヤジロベーは見ていた。

無論助けようとはしなかった。

「オ……オレは見捨てたわけじゃねえからな……」

どうしようもねえんだからな……オ……オレを恨むなよな……」

どうせ助けても無駄……」

どうしすれば良いか分からないヤジロベーには無惨にもその答えしか出なかった。

「フハハハ……!! せいぜい苦しんで死ぬが良いっ!!」

「あつああああ……!!」

ヤジロベーがじっと見つめている先には慎也に握り潰されかけている千次郎がいた。

千次郎はなんとか逃げ出そうとするも、全く意味が無かった。

バギツ! バギツ!!

その時、今までに聴いたことない鈍い音が千次郎の中から聞こえた。

そう、千次郎の肋骨が慎也により砕け散ってしまった。

「あ、ああああ~~~~!!!」

千次郎はうめき声に近い悲鳴上げていた。

「……!!!」

千次郎の肋骨が砕け散ってしまった所を見てしまった  
ヤジロベーは余りの残酷さに目を瞑ってしまった。

このままだと千次郎が握り潰されてしまう。  
その時だった。

「おい．．．何でこんな所にいるんだ。一般人が」  
「え？」

ヤジロベーが振り向くとそこには、

「げっ!? オメエ誰だ? それになんて傷だ．．．」

「大丈夫だ。こんな傷ぐらい．．．それよりアンタ早く逃げろ．．．」  
体中火傷を負い、着ていた服がボロボロになっていた修平だった。  
彼は、みほ達と行動を取っていたが、千次郎の手助けをする為にな  
ざわざ那珂湊まで走ってきたのだ。

その時に、慎也の砲撃による爆風で体中に火傷を負ったのである。  
修平は、荒々しく息をしながらヤジロベーの肩を掴んだ。

「な、何だよ!？」

「すまない．．．ちよつと疲れた．．．．．」

「で、俺が逃げたらオメエどうするんだ？」

「．．．．．す」

「え？」

「アイツを．．．．．殺す」

「!!」

ヤジロベーは驚いた。自分より明らかに弱そうに見えるのに．．．  
修平の目を見ると、強者の様に感じたからだ。

「で、でもオメエあれを何か知ってて言ってるのか!？」

サイヤ人だぜサイヤ人!!」

「知ってる!!! だけど、奴には弱点があるんだ!!!」

「何!？」

「見ろ!! アイツの尻尾を!! アイツが今あんな風に

変身出来ているのは尻尾とあの変な月があるからなんだ!!」

「でも、奴には最初尻尾が無かったぜ」

「それは、奴が変身したことによって尻尾が生えたんだ!!」

だから、俺がなんとか尻尾を切ってみせる!!  
アンタはその間に逃げてろ!!!分かったな!!!

「ちよ、おい!!!」

そう言い残すと、修平は一目散に走って慎也と千次郎の所へ向かった。

「けっ……弱い癖に言いやがって、知らねえからな俺は……」  
駆け出していく、修平をヤジロベエはただ見つめていた。



(千次郎……頼むから死ななくてくれ……!!)

一方、千次郎の所へ向かわんと言わんばかりものすごい勢いで向かっている修平。

そして、とうとう千次郎と慎也がいる所まで着き、

「おい!!!千、千次郎を離しやがれっ!!!」

慎也の目の前に立ち、威勢よく声を上げた。

「うん?コイツは……確か……?」

「お前が殺した辻本っていう奴の友達の多田修平だ!!」

「多田修平?……嗚呼、思い出した!あのカプセル船に居たバカか」

修平のことを思い出したのか、嘲笑いながら修平を見つめる慎也。

「まあ、所詮貴様程度の奴が来ても、青田コイツが死ぬことは変わらん」

「ああああ!!!」

「千次郎!!!」

慎也が千次郎の首の骨を折ろうとゆっくり曲げ始めた。

その瞬間、またもや千次郎のうめき声が聞こえた。

修平は、千次郎を救うべく突如右手を天に上げた。

「くっ!!……この技を使うのは久しぶりだけど、やってみるしかない！」

そう言うと、修平の右手から平らな気弾が出てきた。

「《気円斬》!!!」

ブウーン!!

修平は気円斬を右手に留めておきながら、狙う場所を探していた。

(狙うのは、奴の尻尾だ!!)

慎也がこうして変身出来ているのも尻尾があるからだと思っっている修平は、尻尾に狙いをさだめた。

「フツ……何をやっても無駄だ。残念な事に青田コイツはもう気を失っているんだ。

今更何をしようとも、もう……終わりだっ!!!」

「させるかっ!!!」

ギャンツ!!!

千次郎の首を折ろうとした瞬間、修平の気円斬が慎也の尻尾に放たれた。

「当たれっ!!!」

気円斬はみるみると尻尾に近づき、そのまま行くと尻尾に当たる。

慎也はまだ気づいていない。よし!当たった!つと考えていた修平。

しかし、その思いは次の瞬間大いに裏切られた。

「フンツ……」

バンツ!!

「な!?!」

何とさっきまで油断していて全く気づいていなかった慎也が

いとも簡単に気円斬を避けてしまった。

避けられた気円斬はそのまま修平の近くにある公園に落ちていっ

た。

「だから、言った筈だ。貴様の様な雑魚が何をしようこの俺には勝てん。」

特に仲間すらも守れん様な雑魚にはな」

「くっ………クッソ………」

嘲笑いながら、修平を見る慎也。修平は握り拳を作り俯いていた。せつかくのチャンスが泡となってしまった。

「まあ、何故俺を止めるには尻尾を切れば良いと考えたのは分かんが、

結局無駄だったな。待っている。青田を片付けたら次はお前だ」

そう言うと、ニヤツと修平を見つめながら千次郎の首を折り始めた。

「やっやめろっ!!!やめろー!!!」

「ハッハハハハー!!!所詮貴様らがこの俺に挑む事自体が間違いだったんだよー!!!」

(ち……ち……畜生………!!な……なんて奴だ……こ……コイツは

化け物になっても冷静で隙がない………す……すまない千次郎……)

み……見殺しにはしたくないけど……こ……コイツの気が凄すぎて

近寄ることも出来ないんだ………!!)

完璧に慎也の気に押されてしまい消極的になってしまった修平。

しかし、このままただじつとしているだけだと千次郎は死んでしまう。

でも、慎也の気が修平を拘束していたのだ。

「くっ、クッソ………!!!なっ、何とかしないとっ!!!」

地団駄を踏み激しく声を荒げる修平。もうどうすれば良いのかも全く分からない。

このまま見殺しにするのか。それか、自分が止めるのか。それとも！それとも!!

そう考えていた時、まさかの出来事が起きた。

ザグツ!!!

「!!」

突如慎也の体に異変が起きた。何が起きたかと思えば尻尾を見ると、  
「な!!!?」

何と慎也の尻尾が謎の毛むくじやらの男に斬られていたのだ。

毛むくじやらの男は慎也の尻尾を斬ると何処かへと走り去って  
行った。

「へ………?」

一体何がどうなったのか分からない修平はただ口を開けてポカーンとしていた。

「ち……畜生………!!!も……もう一匹いやがったとは………!!!」

「オ……俺の尻尾を………!!!」

一方、尻尾を斬られてしまった慎也は突如体が震え始めた。

すると、千次郎をゆっくりと放して体がみるみると小さくなっていく。

「ぐううう………!!!」

「何だ?!体がどんどん小さくなっているぞ!!!」

さつきまで途轍もない大きさを千次郎を圧倒していた慎也だったが、尻尾を斬られると、

「ハア……!ハア……!!ハアツ!!!」

以前の様に元に戻ってしまった。そして、大猿に変身していたせいかバテている。

(し、知らねえぞ!!!オ、オレ後からどうなっても!!!)

それを岩の裏から見ていたヤジロベエはどうなっても知らんと責任を誰かに取らせようとしていた。

ヤジロベエと修平の活躍により遂に慎也を大猿から元の姿へと戻すことに成功した!



しかし、元に戻っても慎也は強い!!千次郎は体中の骨が折れて動けない今どうする!?

頑張れ!!ヤジロベー!修平!!《続く》

## STAGE 18 覚醒!!

「ハアハアハア……」

「や、やった……!!尻尾が切れた……!!」

ヤジロベーが慎也の尻尾を斬ったことで、元の姿に戻ってしまった慎也。

余りにも凄い出来事に修平は、嬉しさの余り声が漏れていた。

(し、知らねえから俺は……ど……どうなっても知らねえから……)

一方ヤジロベーは、尻尾を斬った後すぐに岩場に隠れた。

「き、きつさまらあく……俺をそんなに怒らせたいのかく……」

切り札である大猿の力を失った慎也は、怒りに怒った。

しかも自分より劣っている底辺生物に尻尾を斬られたと思うと尚更怒った。

そして、そんな怒りを抑える事など出来る訳でもなく――

「いいだろう……そんなに死にたいなら望む通りにぶっ殺してやる……!!!」

このゴミ共が……!!!」

体の底から黒い叫び声を上げた。

(そらみる!!)

叫び声を聞いたヤジロベーは、ますます岩場の奥に隠れた。

隠れている時、慎也が修平の方に飛んできた。

「あ……」

「まずは貴様からだ」

ドガッ!!

「……ガバアッ!?!」

「どうした? 敵討ちに来たのじゃないのか? やり返して来いよ」

「く……糞っ……」

バギッ!!!

「グハアッ!!!」

「さつき俺に見せた本当の力を見せてみるよ？え!!」

「ゲホツゲホツ!!」

どうする事も出来ぬまま慎也に痛めつけられている修平。

先程の鋭い蹴りといい、このままでは本当に死んでしまう。

「フンツッ！まあ良い・・・次は・・・俺の尻尾を斬りやがった野郎だーっ!!!」

(ひいっ!!覚えてやがった!!!)

ヤジロベーは途端に体中がブルブル震え出した。

もうすぐ命が無くなると思っているのだろう。

「さてそうと決まれば、まずはこのゴミから始末するか・・・」

そう言うのと、慎也は修平の首を掴んで持ち上げた。

「ぐっ・・・あっ・・・!!!」

「ハハハハハ・・・ゴミでも血だけは赤いらしいな・・・」

修平の体から流れる血を見て嘲笑う慎也。

「黙・・・れ・・・!!!」

首を掴まれている為、上手く言葉が出ない修平。

「せめて親友の隣で死なせてやろうか？俺は優しいんだよ」

「うるさい・・・お前みたいな奴に・・・死んでたまるか!!」

慎也の容赦ない言葉にとうとう怒りを通り越した修平は、慎也の腕に噛み付いた。

ガブツッ！

「うっ!!きつさまっ!!」

不意打ちという事もあつてか、噛まれた腕を抑える慎也。

「ハハハハハハッ・・・エリートだのこうの言ってる癖にこんな攻撃も避けられねえないとはな笑」

そんな慎也を見て笑う修平。しかし、もう立つ力も無いのか座ったままだ。

修平に笑われたのが、気に入らなかったのか気弾を作り始めた慎也。

キューーン

「このゴミが・・・調子乗りやがって・・・死ねえーっ!!!」

そう言うと、作った気弾を修平にぶつけようとした。  
すると次の瞬間、

「待てー！ー！っ！！！」

「！！」

「!?」

突如、何者かが慎也と修平の間に入った。

かなりの速さで入って来たので、誰かと思いい目を向けると、

「何勝手にお兄さんを殺そうとしてんだ。テメエ・・・」

何とそこにいたのは、千次郎だった。

「せ、千次郎!!」

「お兄さん・・・コイツは俺が倒すって決めてるんだ」

そう言うと、ギロツと慎也を睨み付けた。

「ハハハハハハッ・・・青田。まだ生きていやがったとは・・・

今更何も出来んお前が何の真似だ？笑笑」

「俺と勝負しやがれ!!俺とお前の決着はまだ着いてねえだろ!!!」

「そうかそうか・・・そんなに俺と勝負したいのか？青田」

嘲笑いながら千次郎との距離を詰める慎也。

対する千次郎は、慎也をじっと見つめていた。

すると、

バギツ!!

「グハアツ!?!」

「おいおい、さっきのは躲せただろ?..どうやら相当へばってやがる」

慎也の鋭いパンチが、千次郎の鳩尾に入った。

不意打ちに近い攻撃だったので、よろめいている千次郎。

そんな千次郎を慎也は見逃さなかった。

ドガツ!!

「う・・・..がつ!!」

「ほらどうしたどうした!?俺と勝負したかったんじゃないのか!?え

!?!」

よろめいていた隙に今度は膝蹴りで千次郎の鳩尾を蹴った。

流石に応えたのか、血を吐き出してしまった千次郎。

そして、地面に倒れてしまった。

そこからは、慎也の容赦ない攻撃だった。

バギツ!!

ドガツ!!

ガツ!!

殆ど無抵抗に近い千次郎を踏みつけたり、馬乗りで殴り回した。

「ゲホツ!!!ゲホツ!!!」

「ハハハハハハッ!!!所詮落ちこぼれの癖に手こずらせやがって!」

バギツ!!!

「ブフツ!!!」

そう言うと、大きく脚を上げて、千次郎の顔面目掛けて踵を落とすた。

余りにも酷い攻撃を見ていた修平は、見るに絶えなかった。

(くっ!!僕のせいで千次郎が・・・!!)

自分を匿ってくれている千次郎に申し訳ない気持ちが生かんだ。

このまま、黙って見ているだけだと千次郎は死んでしまう。

しかし、自分も慎也の攻撃を喰らっているせいか思う通りに体が動かない。

「糞ッ!!!」

こんなにも胸糞が悪い気持ちがない事は無いと思う修平だった。

■  
一方、慎也のリンチに近い攻撃を喰らっていた千次郎は自分を責めていた。

(く、糞ツ……また俺は負けるのか……守らなければいけないモノを守る勝負に……)

(何でた……何のためにわざわざ界王様に修行して貰ったんだ?)  
大事な勝負に負けてしまう自分が情けなくて、今にもやり返したい。

しかし、体中の骨が砕かれている今は何も出来ない。  
そう思うと、更に自分を責めた。

(ヤ、ヤベエ……なんか視界がボヤけてきた……もう、死ぬのか……)

不自然に視界がボヤけ始めた。息も段々少なくなっていく……。

(畜生……もつとこの俺に……力があつたら……!!!)

悔しい気持ちが残ったまま千次郎は、死ぬのを待った。

その時だった。

(このまま諦めて死んでも良いのかーい?)

(!!)

突如、誰かが自分に話しかけてきた。辺りを見回すが、誰もいない。  
一体誰が話しかけてきたのだろう。

(誰だ!?)

(そんなんだから、あの女も死んだんだよー)

声を上げるも誰もいない。それに何故か見えない何かは、千次郎を

侮辱している。

(一体何なんだ!?何が言いたいんだ!!)

(まあそうヤケになるなよーせっかく力を貸してやろうと思ってるのにー)

(力?)

(そう。君の様に弱い奴に僕の力を貸してあげようと思ってるのになー)

そう言うと、見えない何かは、溜息をついた。

しかし、千次郎はその言葉を聞き忘れなかった。

(おい!だったら、その力を貸してくれ!!このままだと皆死んじゃう!!!)

(良いよ♪そのかわり君の精神を貰うよ・・・)

(え?何だつて??)

(ううん何も無いよーさあそうと決まれば手を出して♪)

(あ、ああ)

見えない何かに焦らされ手を出す千次郎。

すると、何も無い空間から黒い手が出てきた。

(わあっ!?何だこれ!?)

(僕の手だよ。さあ、僕の手を握ってー)

(お、おう!)

そして、言われるがままに手を握った。

すると、次の瞬間、

ピカッ!!

突如物凄い光が千次郎を積み込んだ。

(うわあっ!!!何だ!!!?)

(さあ、生まれ変わる時が来た。今からとことん楽しみなよ・・・)

この世の全てが自分のモノになるまで!!!

「ああ・・・」

ガシツ!!

「グハアッ!」

「この世の全てが・・・俺のモノになるまで・・・」

そう言うと、慎也の首を思い切り絞める千次郎。

慎也を見つめる瞳は柔らかいブラウンでは無く、不快な紫色になっていた。

この勝負、どうなる・・・。

《続く!?!》



## STAGE 19 邪悪な力

「せ、千次郎……?」

今、俺こと多田修平の目には信じられない光景が映っている。

「ぐっ……あぁ……」

さっきまで圧倒的に押されていた千次郎が、

慎也の首を掴んで圧迫している。

それも、かなり強い力で。

「良いぞ千次郎!そのまま、殺っちまえ!!」

もう俺も千次郎も、闘い続けられる体力も残り少ない。

今ここで慎也をやっつけなければいけない。

しかし、

「ブツ……」

「ちよ、何してるんだ千次郎!」

何と慎也の首を圧迫させていた手をパツと離してしまった。

圧迫されていた慎也は、よろめいていた。

「何やってるんだ千次郎!!早くしないと!」

一体千次郎が何を考えているか分からないが、

意味の分からない事をしている千次郎に苛立ちを見せてしまった。

でも、その苛立ちも次の瞬間、大きく吹き飛んだ。

バギイツ!!!

「ブフツツツ!!!??」

「え?」

突如、千次郎が大きく足を振って慎也の顔面をサッカーボールの様に蹴った。

余りにも予想していなかった事だったのか、慎也は数十m先の湊公園まで飛ばされた。

唐突にも一瞬過ぎて目が追いつかなかった。

「くつくつく……」

千次郎の方を見ると、首を横に傾けて笑っていた。  
何やら途轍もなく歪な感じだ。

何か……さっきまでの様な感じではない。

「千次郎……」

何だ。本当に何だ。さっきから、凄く気持ちが悪い。

千次郎の、あの紫の瞳を見ていると妙に緊張感が走る。

「おい。そこの弱い奴」

「!!」

千次郎が俺に話しかけてきた。

「な、何だ!!」

「おいおい……そんなにビクビクしなくて良いだろ笑

本当、そんなんだから友を殺されるんだよー」

「な!!」

何なんだ! さっきから、全然雰囲気がおかしい。

今俺が話している相手は、千次郎なのかと思うぐらい。

首を傾けて話している千次郎を少し睨みつける様に見てしまう。

でも、この行動がいけなかった。

「うん? 何その面。僕に喧嘩売ってるのかな?」

「あ……」

俺の目つきが気に入らなかったのか、

少し不機嫌そうな顔に変わった。

そして、それと同時に千次郎の周りのオーラが歪み始めた。

ゴゴゴゴゴゴ……!!!

(な、何だ!?! このオーラの量は……!!)

「せっかく機嫌が良かったのに……お前、殺スヨ?」

「!!」

ヤバい。ヤバい。このままだと俺の命が危ない。

早く逃げないと……。

「くつくつく……逃げようとしても無駄だよー」

「え？な、体が動……か、ない……」

突如体が自由に動かなくなってしまった。

よく見ると、両足に黒い糸が無数にくっついていていた。

「くっ、糞っ!!何で離れないんだ!?!」

「無駄無駄無駄ーそれは、象さんが引つ張り合っても千切れないよ」

そう言うと、闇千次郎は、ゆっくりと近づき俺の顎を掴んでクイツと上げた。

すると、口を歪ませながら右拳を挙げた。

バチバチバチイ!!

「さあ、言い残す事はあるかい？笑」

歪んだ笑みを見せながら、闇千次郎はそう言った。

「ちっ……千次郎！目を覚ませ!!こんな奴に負ける奴じゃないだろ!!」

俺は言いたい事をそのままストレートに言った。

すると、突然千次郎は笑い出した。

「ハハハハハ……何を言うと思ったら、とんだ間抜け発言じゃないか」

右拳で顔を隠しながら、笑っている闇千次郎。

明らかに俺の事を軽蔑した目で見ている。

「くっ!!」

その目を見た俺は、強く歯を噛み締めた。

あの気怠けている態度と伸ばす発言にとても苛立ってしまった。

「殺す前に言っとくけど、もう千次郎は元に戻らないよ。」

千次郎は、僕と交代したからーねー」

闇千次郎は、俺ではなく何処かを見つめながらそう言った。

「交代?どう言う事だ!?!」

闇千次郎の言葉の意味が理解できない。

どういう事なのか、教えて欲しい。

つい、闇千次郎に問いかけていた。

「それは教えられないよ。どうしても知りたかったら・・・」

「知りたかったら・・・何だよ!?!」

勿体ぶる闇千次郎に吠える俺。

すると、次の瞬間だった。

「あの世でしらべなっよ!!!」

黒いオーラに纏われた右拳が俺の顔面に近づいてきた。

(マ、マズイ!?)

突然の行動に判断が遅れてしまった。

このままだと俺の顔面に直撃してしまう。

俺は、両腕を捨てる気で、クロスガードした。

「ハハハハハ♪♪そんなガードじゃ、防げないよー」

クロスガードで対抗する俺を鼻で笑う闇千次郎。

笑われてもしようがない、こうでもしなければ死んでしまう。

(俺が死んでしまったら、元もこうもない!)

そう思うと、更にガードを堅くした。

その時だった。

キュイーン

「うん?何だ?」

突如、謎の白い球体が俺と闇千次郎の間に割って入って来た。

それは、闇千次郎の右拳にゆつくりとぶつかり、

ズウーーーーーン!!!!

大爆発を起こした。

「うわぁーーーーー!!!?!!」

爆発直後、俺は大きく宙を舞った。

余りにも予想外の出来事に理解が追いつかない。

宙に数分舞った後、勢いよく地面に叩きつけられた。

「グハアツツ!!」

背中から叩きつけられたせい、体中に電気が流れた様な痛みが襲う。

「くっ………。一体何なんだ」

痛みが少し和らぎ、何とか立つことが出来た。

辺りを見渡すと、さっきの大爆発のせいか煙が舞い上がっていた。

闇千次郎はどうなったのか、気になっていた時煙の向こうから誰かが歩み寄って来た。

一体誰だ。

「ふうー………。上手くいったようだな」

「お、お前は!?」

何と、歩み寄って来たのは慎也だった。

闇千次郎にやられたと思っていたがまだ生きていたのか。

「さっきのアレは何だ?」

「ああアレか? 何、俺の全ての気を奴にぶつけたただけだ。

まさか、こんな事になるとは思わなかったがな」

よく見ると、彼も大爆発で服がボロボロになっていた。

一呼吸つくと、慎也は俺の方を向いた。

「さあ、これで青田は居なくなった。後は、お前だけだ」

歪んだ笑みを見せながら、近づいてくる慎也。

「待、待て! 何で千次郎が死んだって言えるんだ!」

俺は、慎也の一言がとても気になった。

あの、闇千次郎を倒したなんてはつきり言って有り得ない。

あの悍ましいオーラを纏った奴を消すことなんて……。

「くっくっく……。何を言ってる。」

さっきから奴の気を全く感じないじゃないか?

だから、死んだと言ってるんだ」

腕を組み、顎を上げながら俺にそう伝えた慎也。

「違う!! 奴は死んでない!!!」

死んだと見せかけて、俺達を殺すつもりだ!!!」

「さっきから何を言ってる。青田はもう死んだと言った筈」おい、俺も

混ぜろよ♪」

慎也と口論になりかけた時、突如背中(背中)に冷たいものが走った。ゆっくりと後ろを覗くと、そこには闇千次郎が首を傾け、俺の肩に手を置いていた。

そして、さっきの大爆発をまともに喰らったにも関わらず何と無傷だった。

「!!」

「な、何故だ!? さっきまでお前の気は完全に消えていたのに!

何故生きているんだ!?!」

これには俺達も、度肝を抜く他、思いつくことが出なかった。特に慎也は、顔色が一気に変わっている。

「くつくつく・・・再生しただけだよ」

「再生?」

「そう、こんな風にね!」

そう言うと、が溜まった右手で突如左手を斬った。

バチュ!!

「え?」

「よく見ておくんだよ。斬られた左手が・・・」

ギュルル!!

「戻っちゃった♪」

「嘘・・・だろ・・・」

一体何が、起きているのか分からない。

斬られた筈の左手が触手の様なものと結合し、再生した。

最早闇千次郎は人では無い、人の形をした怪物だ。

(に・・・逃げろ!)

心の中の自分が危険だと叫んでいる。

しかし、足が言う事を聞かない。

奴の恐怖心が俺を縛り付けている。

しかし、そんな恐怖心に唯一対抗した奴がいた。

「ふ、ふざけるな!!」

慎也だけは闇千次郎に向かって凄まじい踏み込みを見せて闘いを

挑んだ。

その踏み込みは、たちまち目と鼻の先になった。

「死ねー!!!」

拳を握り、パンチを喰らわせようと振りかぶった。

このまま行けば闇千次郎の顔に当たるだろう。

でも、そんな攻撃が闇千次郎に通用しない。

「遅いよー」

パシッ!

「なっ!?」

「パンチっていうのはー」

ブイーン!!ポワッ!!!

「こうやって、するんだよ!!」

ドガッ!!!

闇千次郎の右拳が慎也の鳩尾にメリメリと音を立てて入った。

「ガハアツツ?!?!」

相当な威力だったのか、口から血を吐き出した。

「フハハハハハ・・・チョロすぎ♪♯」

片目を隠しながら、ヘラヘラ笑う闇千次郎に俺は絶望した。

もう、誰もこの怪物を止める事は出来ないのだと・・・。

(千次郎!頼むから二元に戻ってくれ・・・!!)

心の中でそう叫ぶ虚しい俺が、膝をつきながら。

《続く》

STAGE 20 喰らえ!!アベック元気玉!!!

「ハハハハハハ・・・ねえ、もつと僕を楽しませてくれヨ笑」

「くっ・・・ゴホッ!!ゴホッ!!」

「い・・・異次元だ!」

闇千次郎のストレートをまともに受けた慎也は、口から血を吐き出しよろめいている。

そんな2人の間に入って観戦している修平は、闇千次郎の強さにただ茫然としている。

「くっつ笑どうしたの?かかってこないの?」

よろめいている慎也を見て、首を傾けながら笑う闇千次郎。

明らかに有利なのは自分と分かっているのか、慎也の目の前でしゃがみ込みながら嘲笑する。

「くっ・・・!!!」

「フッフ・・・まあ、頑張った方だし、そろそろ楽にさせてやるか」

そう言うと、闇千次郎は立ち上がり右手を慎也に向けた。  
キューーン!!

右手からは紫黒色の気弾が出来始めていた。

それは悍ましいオーラを正に凝縮した様なモノだ。

「ハハハハハハ・・・これで、お・し・ま・い・♪」

「く、糞っ!!!」

「あ、ああ・・・ダメだ。何とかしないと・・・!!」

気弾から逃げようと体を動かすも、さっきのダメージでまともに動くことが出来ない慎也。

もう逃げる事は無理と判断したのか、歯軋りをした。それを見た闇千次郎の口角が更に上がる。

修平は、闇千次郎が放とうとしている気弾を止めようと考えるも恐怖心で考えが思いつかない。

「じゃあね。哀れな戦士ちやん」

「うおおおおおー!!!」



「や、止めろー!!!」

闇千次郎は、嘲笑しながら慎也に向けて気弾を放とうとした。避ける事を諦めた慎也は、叫び声を上げた。

同じく修平も静止しようとするも間に合わないと思ったのか、慎也の巻き添えを喰らわれない様にとガードを作った。

(正直、このガードでは耐えられる威力じゃない・・・!!)  
そう思いながら、ガードを更に堅めた。

(さあ、来るなら来い!)

もうすぐ気弾の爆風がやってくる頃だ。

そう思うと、全身の筋肉がより強張る。

しかし、一向に爆風はやって来ない。

修平は何がどうなっているのか把握しようと思いをゆっくり開くと、

「えっ？」

「くっ・・・ゲホッ!!ゲホッ!!」

口から血を吐き出し、膝について弱っている闇千次郎がいた。

「チツ・・・どうやらここまでみたいだねー笑」

「どう言う事だ!?!」

苦しそうに笑う闇千次郎に修平は、疑問を問いかけた。  
すると、右手を額に重ねてこう言った。

「・・・完璧に乗っ取ったと思っただけ、まだ自我があったみたいだよ・・・」

今回はここで終了だけど、次は最後まで楽しむからねー♪」

「それじゃ、A die u♪」

パチンツ!!

そう言うと、指を鳴らし頭をガクツと下げた。

少しの間頭を下げていたがゆっくりと頭を上げ始めた。

それと同時に修平は拳を構える。

しかし、その拳は次の瞬間下ろすことになった。

「あ・・・・・・うっ!あれ?俺何してたっけ?」

「せ、千次郎!?!」

顔を上げた瞬間、すぐに分かった。

先程までの暗いオーラではなく、明るいオーラを感じる。

「本当に千次郎なのか?」

「え、うん。そうだけど・・・一体何が・・・」

本気で心配している修平に対し、状況が全く把握出来ていない千次郎。  
（まさか、覚えていないのか?・・・自分が何してたのか?）

そんな千次郎を見て修平は、驚きが隠せなかった。

さつきまで悍ましいオーラを出し、

慎也をヘラヘラ笑いながらボコボコにしていたことを覚えていないなんて

明らかにおかしいとしか言いようが無い。

「あれ?何で傷が治ってるんだ!?!」

慎也に付けられた傷が殆ど治っており、血が止まっていた。

異常と言っていない程の再生力が無ければこんな事にならない。  
それすら知らないと知った修平は、困惑していた。

パンツ!!

「!?」

「危ない千次郎!!」

そう思っていた矢先、突如謎の気弾が2人を襲った。  
状況を理解していない千次郎は、硬直したままだった。  
それを見た修平は、千次郎を守るため飛び込んだ。

「くっ!!」

「お兄さん!!」

しかし、飛び込んだ時に気弾が修平の背中を掠めた。  
すると、目の前から誰かが歩み寄って来た。

「何勝手に………終わらせてる………んだ……」

「お、お前は!?!」

何とその正体は慎也だった。  
ボロボロの体で気弾を放ったせいか、かなりふらついている。  
慎也を見た千次郎は、すかさず身構えた。

「青田……どうやらさつきまでの威勢は無くなったようだな」

「え?だから、さつきから何言ってるんだよ!?!」

慎也にも訳の分からない事言われ、困惑する千次郎。

「まあ良い……ハア……お前を殺せば、話が済むからな……」  
キューーン

そう言いながら、慎也は気弾を作り始めた。

千次郎も気弾を作ろうとしたが、

(あれ?一向に気が湧いてこないぞ?!)

何故か、気が溜まらないという非常事態が起きてしまった。

(く、糞っ!!何で、何でだ!!?)

どうにかして気を溜めようとするも、全く溜まらない。

どうやら、意識を失った時に何かあったのは間違いないらしい。

まさか、あの時……

「僕の力を貸してあげるヨ」

あの変な者に力を貰った時か。  
そうだ。そうに違いない。

じゃないと、他に思いつかない。

「だとしたら、大ピンチじゃん……」

クスツと下を向いて笑う千次郎。

その笑いはただの笑いでは無く、諦めの笑いだ。

一人で笑っていると、突如目の前から気弾が飛んで来た。

「くっ!!」

何とかギリギリで避けるも、足が掬われどちらかというと

避けたと言うより転けたと言っていい避け方だ。

「おいおい。何だその間抜けな避け方は? 笑」

「くっ! 《界王拳》!!」

ギヤーン!! バチ! バチ! シューン……

「ダメだ! 上手く発動しない」

「喰らえっ!!」

ドスツ!!

「グハアツツ!!」

慎也の拳が千次郎の腹にメリメリと音を立てて入った。

それと同時に千次郎の口から血が吐き出された。

慎也は、ポケットからリモコンを取り出すと、なにやらボタンを押

し始めた。

「この……俺が……引き返す事になるとはな」

どうやら、ここに来た時に乗った宇宙船をここに呼ぼうとしている

ようだ。

もし、ここで逃げられたらみほ達の約束が果たせなくなる。

「待てよ……まだ勝負は……終わってねえだろ!!!」

再び立ち上がった千次郎は両手を上に挙げ、気を集め始めた。

(もう一度、元氣玉を集めないと……!)

しかし、今の千次郎は傷は治っているが気力は殆ど無かった。

(駄目だ……このままだと一向に溜まらねえ……)

どんどん気が減っていく。もう無理なのかと思っていた時だった。

「諦めるな!!千次郎!!!」

「!?」

「俺も協力する!アイツは今ここで倒すんだ!!」

修平が助けに来てくれた。自分よりも気が少ないのにも関わらず、協力してくれるなんて・・・そう思うと何処から力が湧き始めた。

「分かった・・・一緒に倒そうお兄さん!!」

「ああ!」

「うおおおおおおお!!!」

息を合わせて力を注いでいく。最初は小さかった元氣玉も少しずつ大きくなっていき、

バスケットボールボール並の大きさになった所で2人の限界がやって来た。

「もうこれ以上は無理だぞ!!」

「分かってる!でも、これを1人で持つのは難しいよ!!」

2人の力を混ぜ合わせているからか、元氣玉は1人で持てる程の重さでは無かった。

それに元氣玉を慎也に当てるのも至難だ。

「何をやるつもりか知らんが・・・この俺には・・・当たらんぞ!!!」  
キューーン

慎也は右手に氣弾を集め、千次郎達のいる方向に飛ばそうとしていた。

今の2人に氣弾を飛ばされたら、元氣玉は弾け飛んでしまうだろう。

「さあ・・・地獄へ行くがいい青田!!!」

溜めた氣弾を千次郎達に飛ばそうと右手を向けてきた。

(マズイ!?!?)

「死ね!!」

慎也は右手に溜めた氣弾を放とうとしたその時だった。

「う、うおおおお!!!」

「何だ?」

ザグッ!!!

「な、何だと!!!」

突如、何者かが慎也の背中を切り裂いた。

突然の出来事に慎也は理解が追いつかない。

「へへッ・・・や、やってやったぜ・・・!」

「あーアンタは!?!」

慎也を切り裂いたのは何とヤジロベエだった。

瓦礫の中に隠れていたヤジロベエが千次郎達を救う為にわざわざ助けてくれたのだ。

「へへーんだ!! テメエなんかがこのヤジロベエ様がやっつけてやらあ!!!」

そう言うと、ヤジロベエはもう一度慎也に飛びかかった。

しかし、

「まぐれで当たったのが・・・そんなに嬉しいか・・・」

「え?」

ブンッ!!

(あ、空振っちゃまった!?)

「死ね!!」

ドガッ!!

「ぎやうっ!!!」

慎也のカウンターのキックをまともに顔面にもらってしまった。

ヤジロベエは、大きく跳ね飛んで行く。

「まだ終わりじゃないぞ」

「ひいっ!!!」

さつきまで有利だったヤジロベエが今度は追い詰められてしまった。

遠くで見えていた千次郎と修平は機会を伺っていた。

「くっ!! 奴に元氣玉を当てる隙が見当たらん・・・」

「お兄さん・・・次慎也がヤジロベエっていう奴に攻撃を仕掛けたらコレをぶち込もう!」

「何!?!でも、どうやって奴がいる所まで進むんだ!?! 2人で持っていないと、

せつかく溜めた元氣玉が消えちゃうんだぞ!!」

「それは分かっているよ。だから、さつき考えていたんだ」

「コレを1人でも持てて、進むことが出来る作戦を」

すると、千次郎は修平の耳に作戦を伝えた。

「え?そんなこと・・・出来るのか?」

「ああ・・・俺とお兄さんだからこそ出来る作戦だ」

心配な表情をする修平に白い歯を見せる千次郎。

2人は、目を閉じて2度深呼吸する。

「スウー・・・ハアー・・・」

2度深呼吸し終わると、目を開きお互いを見つめ合う。

(行くよ、お兄さんー)

(ああ!!)

互いに頷き、慎也の方に首を向ける。

そして、

「うおおおお!!!」

一斉に慎也の方へ向かって行った。

「馬鹿が・・・2人でそれを支えながら突っ込んで来るとは」

人差し指に気弾を少し溜めながら慎也は2人を馬鹿にした。

「死ね!」

バンツ!!

慎也は溜めていた気弾を修平に飛ばした。

「ぐっ!!」

気弾は修平の右太ももを掠めた。

その時、修平の体勢がやや崩れる。

「糞ッ!千次郎すまん!!(よし!今だ!!)」

体勢が崩れたと同時に千次郎が元氣玉を手放し慎也の方へ突っ込んだ。

千次郎が前へ突っ込んだのを見た修平は両腕に力を込めて、

「うおおおおおお!!!」

何と千次郎の方へ元氣玉を投げつけた。

元氣玉は千次郎の所まで飛んで来て、千次郎の掌に収まった。

「何!？」

これには慎也自身も驚く他無かった。

「よし！ナイスお兄さん!!」

元氣玉を受け取った千次郎は、慎也との距離を徐々に詰めて行く。後少し近づけば、元氣玉を当てる事が出来る射程圏内に入る。

「糞ツ!!きつきからちよこまか動きやがって!!」

バンツ!!

「よつと！お兄さんつ!!」

ドガツ!!

慎也が再び気弾を飛ばすも、千次郎は簡単に避けた。

そして、持っていた元氣玉を修平に蹴り返した。

「くっ！強く返し過ぎだぞ!!」

「ごめんごめん！」

そして、2人は遂に慎也の目の前へと迫っていた。

(マ、マズイ!?!?)

慎也は、何とかして避けようと後ずさりをしようと足を動かす。

しかし、

ズキツ!!!

「!？」

突如背中に激痛が走った。

「糞ツ・・・斬られた所の傷が・・・!!」

ヤジロベーによってつけられた傷がきつきよりも開いてしまった。

そのせいで足が完全に止まってしまった。

「今だーーーー!!!」

修平は、元氣玉をオーバーハンドして千次郎にパスした。

「うおおおお!!!」

目の前にバウンドした元氣玉に千次郎は手を乗せる。

身動きが取れない慎也に向かって大きく踏み込む。

「これで終わりだく!!!」

「行っけーーーー!!!」

もう絶対外すことは無い。射程圏内に入った今、慎也はもう避ける



ことは不可能だ。

迫り来る死から逃れるのを諦めた慎也は、仁王立ちで腕を広げて待ち構える。

「ハハハ・・・来いよ、来いよ青田ー!!!」

「ああ、喰らわせてやるよ・・・骨の髄までな!!!!!!」

そして、渾身の元氣玉を修平にゆつくりとぶつけた。

「うおらああああ!!!」

ギューン!!

「ぐううう?!!」

元氣玉は、慎也の胸にメリメリと音を立てて陥没した。

すると次の瞬間、

カッ  
!!!!!!!

辺り一面が過剰な光に包まれた。

「ぐ、ぐわあああ~~~~っ!!!!!!」

それと同時に慎也の悲鳴が響き渡る。

バスケットボール並の大きさでも威力は凄まじい。

しかし、その威力をまともに喰らっているのは慎也だけでは無かった。

「グハアツツ!!!!」

「うわあああ!!!!!!」

元氣玉の反動をまともに喰らった千次郎は口から血きながら吹き飛ばされた。

2人の近くにいた修平も爆風をまともに受け、吹き飛ばされた。

光の中で悲鳴を上げる慎也は、スパークを出している元氣玉と共に上へ上がっていた。

「糞ッたれー!!!!!!」

そして、元氣玉はスパーク出し終わった直後大爆発を起こした。

ゴオオオン  
!!!!!!

大爆発を起こした後、辺り一面を包んだ過剰な光は無くなり元に戻った。

それと同時に千次郎と修平も地面に叩き落とされた。

遂に元氣玉を慎也に当てることが出来た千次郎。  
果たして、慎也を倒すことは出来たのだろうか。

《続く》